巻き込まれた放浪者

北河静

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数多の世界を巡る事を強いられてしまった者がいた。

これはその中のうちの物語の１つ。

さぁ、今宵の物語の幕を上げるとしよう

目次

第1話 1
第2話 5
第3話 11
第4話 19
第5話 25
第6話 33
第7話 42
第8話 48
第9話 54
第10話 60
第11話 68
第12話 73
第13話 76
第14話 83
第15話 88
第16話 94
第17話 101
第18話 106
第19話 112
第20話 116
第21話 122
第22話 129
第23話 139
第24話 145

第1話

突然だが、パラレルワールドという言葉は御存知だろうか？
似たような意味を持つ言葉として、並行世界、並行宇宙、並行時空などもあるが、まあ簡単に言ってしまえば『ＩＦの世界』を指し示す言葉になる。
分かり易い例を挙げるとするならば、創作物を思い浮かべて欲しい。例えば特撮、これに登場するものはフィクション、つまりは虚構のものとされている。だがもし、本当にそんな世界が存在したら？
大半の方は夢の見すぎだと失笑するかもしれない。しかし、それを確かめる術など、今の人類は持ち得ていない。

少々前置きが長くなってしまったが、何故こんなことを述べたかというと、私自身が、その並行世界を巡っているからに過ぎない。何を馬鹿なことをと思われるかも知れないが、私にとっては自らが体験したことである為、この言葉に虚偽はない。
ある時は一族に課された試練を背負い、世界を破壊し続けた青年と、その仲間たちと旅をした。
平凡な日常を愛する少年と、その仲間たちと共に、総てを破壊しようとする不死の軍勢と対決した。
聖杯と呼ばれる願望器を奪い合う戦争に巻き込まれもした。
現実で幻想となったものが流れ着く郷に迷い込みもした。
科学と魔術が交差する街で、右手に異能を打ち消す力を宿した不幸を嘆く少年と共闘したりもした。
その他にも、那由多の数の世界を巡った。それこそ、気が狂いそうになるほどの年月をかけて。
何故こんな事をする羽目になったのかは今でも定かではない。世界を巡り始めた頃は、少々腕が立つ程度の学生だったと思う。だが、世界を1つ、また1つと巡るうちに摩訶不思議なチカラが宿っていき、自分が人間という種族から乖離していくという実感があった。
今では最早、出来ない事の方が少なくなってさえいる。与えられた

とも、押し付けられたとも言えるチカラの中には不老の効果を及ぼすものもあったようで、自分の外見は２０代後半の姿を保ったままだ。
と、此処まで散々愚痴に近い物言いをしてきたが、無論悪い事ばかりではない。世界を巡るたび、新たなチカラ、新たな情景、新たな技術、そして新たな友を得ることが出来た。もしそれすら得ることが出来ていなかったのならば、とうの昔に自ら命を絶っていただろう（死ねるかどうかは別にしてだが）
那由多の世界を超えてもなお、こうして当てのない旅を続けているのはひとえに友となった彼等から託されたモノがあるからだろう。
自らの命を賭してまで、一族の悲願を果たそうとした男からは、自分の総べてを代償にしてでも為し遂げようとする覚悟を学んだ。
私と同じ果てのない繰り返し（永劫回帰と言っていた）をしていた男は、とある術式と、それに必要な物を用意してくれ、互いに友と呼び合うようになった。
怪人と戦う男達からは、彼らの魂とも言ってもいい物を託された。

……結局、那由多の時を体験したところで私自身が変わったわけではないと思う。いくら力を得たとはいえ、それは与えられた物。自らが磨きあげた物ではないのだ。
故に、託された想いを無下にしないように、自己の研鑽だけは忘れなかった。
それさえも怠ってしまえば、私は恐らく『ワタシ』ではなくなってしまうだろう。もしかしたら、私を崩壊させることが、私をこのような道に引き込んだ者の目的かもしれないが、今更どうでもいいことだ。
「今度はどのような世界なのだろうか？辺りを見渡した限りでは、此処は私が旅を始めた頃の日本と同じような風景なのだが……」
毎度のことながら、自分がどのような世界に来たのか、調べなければ行けないというのは非常に面倒だ。
「精神的には既に老害を通り越している筈なのに、ちっとも歳をとったと感じないのは何故なのだろうか……？」

数少ない、旅の始まりからの所持品であるスマートフォンを懐から取り出す。これも本来ならとうの昔に壊れている筈なのに、いつの間にか、電波が届かない場所でさえ、あらゆる機能が使用可能、更には充電不要の魔改造品になっていた。

何度か中世のような世界でも機能した為、それ以降は必ず世界を訪れた際には現在地を調べる為に使うことにしている。

「なにせ、大概はその世界特有の土地に流れ着くからなぁ……」

ＧＰＳ機能により、スマートフォンの画面に現在地の住所が判明する。

「海鳴市藤見町、ね。来たことも、聞いたこともない地名……新たな世界、か」

並行世界といえど、殆どの世界が細かな差異に留まる。極たまにだが、ロボットが存在する世界や、完璧なファンタジー感が漂う世界、果てには別の惑星なんてこともあるにはあるが。

「取り敢えず、この世界での拠点を探すとしますかね」

流石に文明がある世界で野宿は辛いものがある。

「果たして、この世界では一体何が起こるというのかねぇ？」

私が訪れる世界に共通する条件として、必ずその世界が崩壊する危機が訪れる。場合によっては全並行宇宙を滅ぼしかねない事態に発展することもあった。

俺をこのような役目につけた某は世界を守らせる為にチカラを与えるのか？または世界を壊させる為なのか？それとも、こうやって俺が足掻くのを楽しんでいるのだろうか？

「まあこのような事を考えても詮無きことではあるが……」

「……離……さいよっ!!この…態っ！」

相も変わらず、無駄な事に思考を割いていると、遠くの方から少女の悲鳴らしき声が聞こえてきた。

「……いきなりトラブルに巻き込まれそうな予感がしてきたな」

声の聞こえてきた方に急ぎ目で向かうと、年端もいかない少女二人が黒服の集団に車の中に担ぎこまれていくところだった。

「……何となくわかってはいたが誘拐か」

そんなことを呟いているうちに車は走り出してしまった。
「……このまま見捨てるのも目覚めが悪い、か」
呟きつつ、チカラの一つである異空間に存在する収納空間の入口を開き、愛用しているバイクである
『ディアブロッサ・カスタム』を取り出し、跨る。
「さて、人助けの時間と洒落こもうか……！」
漆黒のフルフェイスのヘルメットを被り、バイクを走らせる。これが私、『緋峰（アカミネ）　蓮夜（レンヤ）』のこの世界での初行動になった。

第2話

Ｓｉｄｅ　アリサ・バニングス

どことも知れぬ廃工場、そこに私とすずかは連れ込まれていた。

学校からの帰り道、塾に向かう途中で黒服の集団に強引に車に引きずり込まれ、今は二人揃って鉄柱に縛られている。すずかはさっきから顔を青くして俯いている。

わたし達から少し離れた場所には黒服の集団が、十人ほど集まっている。

「しかし、今回の仕事は楽勝だったな!!子供1人攫うだけでいいんだからよ!」

「バカ、まだ引き渡しが終わった訳じゃねぇんだ。

気ィ抜いてんじゃねェよ」

「つーか、その場にいたからもう一人の餓鬼も攫っちまったが、こっちはどうする?」

男のうちの一人が私を指差しながら周りの男達に問いかけていた。

……私を指さしてるってことはこの連中の目的はすずかってこと?

身代金目的で私達二人を攫ったわけじゃないのかしら?

「ああ?別にどうでもいいからほっとけ……と言ってやりたんだが、確かそっちの金髪の嬢ちゃんはバニングス家のご令嬢だったはずだ。そっちはそっちで利用価値がある、そのままだな」

「なんだよー!!利用価値がなかったら俺が楽しもうと思ってたのに……ごぷぁああ!!?」

「……テメェ、もう一度俺の目の前で同じこと言ってみろ、脳漿ぶちまけるぞ……?」

男の一人が下衆なことを呟いた途端、さっきから周りを諌めたりしていた男がその男を殴り飛ばしていた。

……なんなの?こいつら、仲間割れ…?

「痛ってぇ……!何しやがんだテメェ!!」

「こちらの台詞だ、依頼者の関係者だか知らねぇがこっちにも矜持っ

てもんがある、テメェの上司の目的は月村の嬢ちゃんのほうだろうが。ああ？」
「それがどうしたってんだ!!」
「バニングスのご令嬢をさらってきたのは足がつかねぇ様にするためだけだ。この嬢ちゃんはこっちの管轄、手ぇ出してんじゃねぇ……！」
「うっ……！」
……おかしい、彼は私たちを攫った張本人の筈なのに、この中で一番わたし達の身を案じてくれている…？ならなんでわざわざ攫ったりしたの？
そんなことを考えている内に、さっき男を殴り飛ばした人がこちらに近づいてくる。
その人は顔を隠す為にしていたサングラスを外し、こちらに笑いかけてくる。その顔は、とても誘拐という犯罪を犯した者とは思えないほど爽やかなものだった。

「……わりぃな、本来なら嬢ちゃん達みてぇな子供相手にすることは無いんだが……こっちにも事情があってな、月村の嬢ちゃんに関しては何もしてやれねぇが、バニングスの嬢ちゃんは悪いようにはしねぇつもりだ」
「それを信用しろって言うの……？わたし達を攫った癖に……！」
私がそう言い返すと、男はその笑顔を苦いものへと変えた。
「それ言われちゃ返す言葉もねぇンだが……月村の嬢ちゃんの姉さんに期待してくれ」
そう言って男は、後ろの連中に見えないようにわたし達から取り上げた携帯の画面を見せてくる。そこにはすずかのお姉さんである忍さんの携帯への送信履歴があった。
それを確認すると共に、また別の車が入ってくる。
「……っと依頼人のお出まし、か。……チッ、間に合わねぇ、か……これ、返すから手放すなよ？」
男は落胆したような言葉を零す。……この人、本当に悪人じゃ無い

の……？
「ご苦労様です、流石は黒岸殿、仕事を任せたかいがあるというものです」
　車から出てきた男は小物、と表現する他ないような容姿をしており、その後ろにメイド服を着た女性を数人侍らせていた。
「そいつはどーも、で？報酬を先に渡して貰うぜ？」
「ええ、勿論。……おい！」
「……確かに。これで契約は終了だな」
　黒岸と呼ばれた男性は、男の側に控えていたメイド服の女性からトランクケースを受け取っている。
「そんな……安次郎叔父さん!?どうして叔父さんが!?」
「やあ、すずかちゃん。久しぶりだねぇ、元気そうで何よりだ」
　叔父さん……!?ってことはこの誘拐を企んだのはすずかの親戚だったの!?
「私の質問に答えてください!!どうして叔父さんがこんな事を!?」
「決まっている、月村の財産を手に入れるためだ。月村の家は君の姉でもある忍には、手の余るものだ。であるからして、私が管理してやろうというのだよ。……ああ、君を攫った理由だが、交渉を円滑に進めるために君を利用するつもりなのだよ」
「そ、そんな……！」
　安次郎とかいう人の口から真実が告げられると、すずかは魂が抜けたように力が抜ける。
「すずか！しっかりしなさい、すずか!!」
「そんな……私のせいで、お姉ちゃんに迷惑が……」
　今のすずかの目には光が灯っておらず、うわ言の様に何かを呟いている。
「……ところで、黒岸殿？すずかちゃんの隣の子は？」
「月村の嬢ちゃんを攫うとき時に一緒にいたんでね、一緒に連れてきたんですよ。友達とかじゃないですか？」
「ほう……手間をかけさせてしまったようだね。……では、後始末はこちらで行おう」

そういうなり、安次郎は、懐から銃を取り出し、私に向けてくる。
「……おい、何するつもりだ？」
「決まっているだろう？ついうっかり私の計画を話してしまったのだ。口封じをしなければならないだろう？」
「だからって子供に銃を向けてんじゃねぇよっ!!」
そういうなり、黒岸は安次郎に殴りかかろうとする。……が
「まったく、所詮はヤクザものか……イレイン、やれ」
「イエス、マスター」
「ガハッ……!?」
安次郎の後ろに控えていたメイドが逆に黒岸を殴り飛ばした。
「くっ……なんだ、そいつは……？」
「ハハハッ!!素晴らしいだろう？月村が誇る自動人形は!!黒岸君、君もそれなりに腕が立つようだがイレインには敵わないようだねぇ」
「自動人形……？要はロボットかよ、めんどくせェ代物引っ張り出してきやがって……！」
「ふん、私は元々君のようなヤクザものなど信用してい無いのでね。君もここで物言わぬ死体にでもなってもらうつもりなのだよ」
「とことん下衆だなテメェ……！」
「我々月村の一族を君達と同じ次元で語らないでもらおうか。文字通り生命体としての次元が違うのだからね」
「あ？何言ってやがるテメェ……頭湧いてんのか？」
黒岸って人の言う通りだ、何言ってるの？こいつ……
「おや？すずかちゃん、お友達に説明していなかったのかい？いけない子だねぇ……お友達に隠し事をしているなんて」
「叔父さん！止めて!!」
すずかが必死の形相で安次郎を止めようとしている。……そこまでして隠しておきたいことがあるっていうの…？
「何を隠す必要がある？そこの少女も我々からすれば、所詮は劣等種に過ぎないだろうに」
「そんなことない!!アリサちゃんは、私の……私の大切な友達なんだからッ!!」

すずかが叫ぶと同時に、倉庫の入口から轟音が聞こえてきた。
「チィィイ!!何事だ!!」
「仕込みが功をなした……か?」
その場に居たものすべてが入口に目を向ける。
そこにいたのは、漆黒のバイクに乗った、これまた全身真っ黒な人影だった。
黒のフルフェイスヘルメットを被り、黒のロングコートを羽織った人物。
「……私が想像していた状況とは違うのだが、まあそれはどうだって良いか。……そこの少女達を傷付けたのは、誰だね?」
瞬間、周りの大人達が身構えた。……一体、あの人は何者なの?
「貴様…何者だ?」
「名乗るほどのものではない。偶然、誘拐現場を目撃した通りすがりだよ」
「そうか……では、その立派な正義感を抱いたまま、死ぬといい。……イレイン、やれ」
「イエス、マスター」
その男が命じると共に、倒れていた男の側にいたメイドが男の人へと向かっていく。
「クソッ、御神の剣士じゃねぇのかよ……!おい、逃げろアンタ、死ぬぞ!!」
その声が私に届くと同時にイレインと呼ばれたメイドの拳が、彼の頭を捉える。
「ああ……ッ!」
「ハハッ!ざまぁ無いな!!」
「……そんな」
安次郎とかいうおっさんが高笑いを上げるなか、私とすずかは言葉を失っていた。……もしかして、死んじゃった?私たちのせいで?
そんな考えが頭をよぎるが、その考えはそのすぐ後に聞こえてきた声に打ち消された。

「ふむ、この拳の感触から察するに、君は人間ではないね？義手の可能性もあるが、人間にここまでの力が出せるとは思えないのでね」
「なっ……!?貴様、なぜ無傷なのだ!!」
「無傷などではないよ、ヘルメットが砕けているだろう？」
ヘルメットが砕けたことで男性の素顔が顕になる。
男性の顔は何処か浮世離れした雰囲気を感じる顔立ちで、髪は彼の服装とは真逆の純白。それが目に掛かる程度に切り揃えられていた。
「さて、このような事をされたのだ、それなりの報いは受けて貰うとしようかね」
そう言いながら、男性はイレインを振り払う。
その勢いは凄まじく、私たちのところまで、風が届く程だった。
「きたまえ、凡百どもよ……格の違いを見せてやるとしよう」
そう語る彼の姿は、何処かヒーローを思わせるものだった

第3話

Ｓｉｄｅ　緋峰

さて、殴られる瞬間に私の体に施された術式《エイヴィヒカイト》の位階を活動位階に上げたため、ダメージはないが少々煩わしい。

誘拐犯を追ってきてみれば、その実行犯の一人は倒れているわ、小物臭が凄まじい男がメイドを引き連れているわ。想定外にも程があるというものだ。

「どうした？私を始末するのだろう？たかが拳一発防がれた程度で萎縮したのかね？……だとしたら、機械にあるまじき臆病さにほかならないな。その隠している武器は只の装飾品なのかね？」

正直な所、少女二人をさっさと助けてしまえば良い為、挑発を兼ねた言葉でこちらに気を引きつけつつ、小型人形を少女たちの元へと放つ。多少の自立稼動を可能としている為、問題は無いだろう。

「き、貴様ぁ……！イレイン！本気で構わん！そいつを殺せ!!お前たちはそこの男たちを始末しろ!!」

「チィッ！させっかよ！」

こちらに向かってくるのは1人だけ。恐らくコレがあの男にとっての最高戦力なのだろうが、幾分舐めすぎでは無いのだろうか？

先程倒れていた男は何処からともなく刀を取り出し、仲間らしき黒服をメイドの集団からたった一人で守り通している。

「ふむ……彼も生身にしては中々の実力を持っているようだな」

「さっきからウザってぇんだよてめぇはよぉおお!!」

「おや、命じられるままに動くだけの人形だと思っていたが、感情を持っていたのか。これは失敬、先程の発言を撤回しよう。感情を持つというのなら怯えるのも致し方ないというものだ」

「舐めてんじゃねぇよおおお!!」

ふむ、幾分か攻撃が苛烈になったようだが、それでもまだ私には届かぬよ。イレインと呼ばれた人形は両手に軍用ナイフを持ち、私を殺そうとしているが、いかんせん実力が足りていない。私からすれば、

大人が子供相手に手ほどきしているようなものだ。
「どうしたのかね？そんな調子では日が暮れるまで続けても私には傷1つつけられぬよ」
　イレインの攻撃を全て薄皮1枚で躱しつつ、彼女（？）を挑発する。
「テメェェェェェェェェッ!!!!!」
　こうして見ると、この人形は感情を持たせる面に重きを傾け過ぎなのではないかね？本来、こういった戦闘用人形の類は感情を持たせないものだと思うのだが……もしくは、この人形の製作者は『人間』を作ろうとしたのかもしれんが…まあ、詮無きことか。
「やれやれ……私としては、もう少しこの遊戯に付き合ってやっても良いのだがね。あちらの彼にも話を聞きたいので、早々に終わらせて貰うとしよう」
「あ゛あ゛!!?!!さっきから避けてばっかのテメェに何が出来るってんだよォ!!」
「色々、だよ。未熟な感情を持つ人形殿？そう、例えば……こんな方法だ」
　そう言い放ち、私はエイヴィヒカイトの位階を上げる言葉を紡ぐ。

Ｙｅｔｚｉｒａｈ（形成）—
血の伯爵夫人（エリザベート・バートリー）

『血の伯爵夫人（エリザベート・バートリー）』。１６世紀に実在し、自身の美貌を維持するために数多くの少女たちの命を奪ってはその血をバスタブに浸し、血の風呂に入っていたというハンガリーの貴族であるエリザベート・バートリーが記した日記。
　魔女の鉄槌（マレウス・マレフィカルム）こと、ルサルカ・シュヴェーゲリンの所有する聖遺物。
「日記に記されたありとあらゆる拷問器具を召喚し操る」という能力を持つ代物であるが、それを我が渇望に従い具現化させる。
　そして形成位階になったことにより、顕現するのは禍々しい雰囲気

を帯びた鋲付きの鎖。それで目の前の人形、黒服の青年が相対しているメイドの集団、小物臭漂う男、その周りにいる男たちを縛り上げる。
「なっ!!?てめぇ!!一体どこからこれ出しやがった!!?」
「君には説明したところで理解出来ぬよ、大人しくそこに這い蹲っていたまえ……もっとも、屑鉄にされたいのであれば存分に抵抗してもらってもいいがね」
……いくら人に似せた物とはいえ、所詮は人形か。鎖を巻き付けられても尚、平然と動けるのだから。……かと言って、向こうの黒服共のように汚い悲鳴を上げられるのも困るのだがね。
「この程度であたしを止められるとでも……!」
「そうか、では無様に散りたまえ」
「がっ!?ぐ……ぎぃぃ……!!」
鎖を引きちぎろうと力を込めようとした人形を、それを上回る力で締め上げる。
「ああ、無駄な抵抗は止めて貰いたい。人形相手に何時までも遊んでいるほど、私も暇ではないのだよ。故に潰れろ、貴様の出番はこれにて終わりだ」
そう言い放つと同時に、人形の上にとある拷問器具を落とす。その拷問器具の名は鋼鉄の処女(アイアンメイデン)。その名の通り、鋼鉄で出来たそれを人の形をしたものに落とせば結果は一目瞭然である。
「やはり、所詮は人形か。自らの終わりに対して立ち向かおうという意志が弱い」
「ば、バカな……ッ、イレインがこうもあっさりやられるなど……!」
そこに散乱するのは先程までイレインと呼ばれていた人形の残骸。無論、少女たちには刺激が強いため、人形たちに潰れる瞬間に目を隠すよう指示はしてある。
「オラァッ!!これで終いだ……!」
人形をいたぶっている間に、あちらも終わらせたようだ。人形だけを確実に無力化している。
「ふむ、流石というべきかね?」
「よしてくれや、あんたの鎖が無きゃあもうちょい苦戦してたっての」

「……では、そう言う事にしておくとしよう」
ふむ、私が繰り出した聖遺物にさして驚いていないところを見るに……1つ、彼に聞く事が増えたな。
「き、貴様らぁ……！劣等種如きが調子に乗るなァア!!」
「……オイオイオイ、なんつー馬鹿力だよ、あいつ」
青年が思わず、と言った様子で呟く。確かに人間が鎖を引きちぎれば驚きもするか。
いくら強度を必要最低限にしていたとはいえ、それでも人間に敗れるものではないのだが……
そしてそれに鎖が破壊されたことによるフィードバックで多少の痛みが腕に走る。
「しかし『劣等種如き』とは……何処ぞの吸血鬼を思い起こさせるな」
「ほう？貴様、よく私が吸血鬼と見抜いたなァ……！そう！我々月村の一族は、『夜の一族』と呼ばれる吸血鬼なのだ!!貴様ら劣等とは格が違うのだよ!!」
「「「……ッ!!」」」
青年と、少女たちが息を呑む音がする。しかし吸血鬼、ねぇ……
正直な所、今まで吸血鬼なぞ腐る程見てきた為、驚きは少ない。……というか皆無である。
「……で？それがどうかしたのかね」
「「「……は？」」」
「私にしてみれば、吸血鬼なぞさして驚くものでは無いのだよ。それで君はどのような力を持っているのだね？不老不死か？それとも666の軍勢をその身に宿しているのか？運命を操ったりは？はたまたあらゆるものを破壊する能力（チカラ）でもあるのかね？」
「な、何だその化け物どもは……！」
「……その様子から察するに何の変哲もない、ただの吸血鬼か。つまらんな、まったく」
小物が驚愕しているが、こちらにしてみれば特に面白みのない相手だ。
「……あまり興が乗らんが、少女たちの安全を考えるに貴様を野放

しにするのも危険だな。よって、貴様のその下らないプライドを形成している吸血鬼というアドバンテージを打ち砕いてやろう」

「何を言っている、貴様ァ!!」

「さァ……死骸を晒せ、貴様こそが劣等ということを思い知らせてやろう……!」

そして、さらにエイヴィヒカイトの位階を上げる為の詠唱を紡ぐ。

Wo war ich schon

eine mal und war so selig

Wie du warst! Wie du bist!

Das weiss niemand,

das ahnt keiner!

Ich war ein Bub,

da hab, ich die noch nicht gekannt.

Wer bin denn ich?

Wie kommt denn ich zu ihr?

Wie kommt denn sie zu mir?

War, ich kein Mann,

die Sinne mocht mir vergeh, n.

Das ist ein seliger Augenblick, den w

Sophie, Welken Sie

Show a Corpse

Es ist was kommen und ist was g, schehen

Ich mocht Sie fragen

Darf's denn sein?

Ich mocht, sie fragen: warum zitterte

Sophie,

und seh, nur dich

und spur, nur dich

Sophie, und weis von nichts als nur:

dich hab, ich lieb

Sophie, Welken Sie

Ｂｒｉａｈ―創造
死森の薔薇騎士 Der Rosenkavalier Schwarzwald

そして詠唱が終わると共に、廃工場が闇、いや夜に包まれる。
聖遺物『闇の賜物(クリフォト・バチカル)』。
串刺し公と恐れられたヴラド・ツェペシュの血液が結晶化したもの。形成位階になると、全身から血液が凝固した杭が生えてくる。そして形成位階のさらに上の位階である創造位階、
死森の薔薇騎士(ローゼン・カヴァリエ・シュヴァルツヴァルド)。
この聖遺物の本来の所持者である、串刺し公(カズイクル・ベイ)こと、ヴィルヘルム・エーデンブルグの『昼の光を忌み嫌い、永遠に明けぬ夜と、夜に無敵となる吸血鬼でありたい』という渇望を具現化した創造。
その能力は『一定範囲に強制的に夜となる結界を展開し、結界内のあらゆる生物・物体の生命力を吸い取って自らの力に変え、枯渇させ朽ち果てさせる』というもの。強力ではあるが、本来私の抱く渇望ではない為、多少性格が本人のものに近づくという欠点があるがさして問題ではない。
「な、何なのだこれは!!?」
「何を戸惑っていやがる、テメェも吸血鬼なんだろうが。ならこの夜は心地いいはずだぜェ？」
「ふ、巫山戯るな!!こんなものが我々に心地いいものである訳が無いだろう!!」
「……あァ、所詮テメェも劣等かよ、くだらねェ。もう話すこともねェし、とっとと逝けや」
言い放ち、小物に杭を放つ。
「ギャアアアア!!!!」
「たかが杭一本刺!!さっただけで喚くなよ。面倒くせェ」
「お、ごっ……あっ……」
「安心しな、殺しはしねェよ。テメェにはその価値すらねェからな」
杭が刺さった瞬間は叫んでいたが、あっという間に生命力を吸い尽くされ、干からびる。

「ま、こんなもんで充分だろ」
「アンタ……マジで何もんだよ、強過ぎんだろ…」
「別に大したことねェよ、遭遇した状況に対しての引き出しが多いだけだ」
　干涸らびた時点でエイヴィヒカイトを解除する。あまり長い間展開させると、少女たちまで危険になるためだ。
「さて、大丈夫かな？お嬢さんがた。怪我等はないかね？」
「え、ええ…大丈夫です」
「あの……助けてくれて、ありがとうございます」
「礼など必要無いよ……そもそも、彼は君達を攫った一味の一員なのだから恨み言のひとつでもぶつけたらどうかね？」
「そいつを言われちまうと返す言葉もねぇんだが……」
　私の言葉に青年が苦笑する。
「アリサちゃん！すずかちゃん！大丈夫か!!」
　そんなぎこちない空気が漂う中、入口の方から声が聞こえてくる。
「ようやく来たか、御神の。遅ぇーんだよ」
「な……!?黒岸!?なぜお前がここに……？」
「月村の嬢ちゃんの携帯使って連絡したの俺だぜ？……まあ嬢ちゃんたち此処まで連れて来たのも俺んとこなんだけどな」
「何だと……!?」
「別に此処で言い合いをするのは構わんが……さっさと彼女たちを安全な場所に連れて行った方では良いのでは無いかな？」
「あっ……」
　今気づいたかのような声を上げる二人。……間抜けか？
「やれやれ、御神だったか？君は彼女たちを連れて行ってもらえるかね？青年……黒岸？君はあそこで転がっているミイラを連れて行ってくれ。黒服は……私が処理しておこう」
「……いいのか？」
「構わんよ……このように一瞬でかたがつく」
　指を鳴らし、使い魔である食人影（ナハツェーラー）に黒服を喰わせる。エイヴィヒカイトは強度を上げるために人の魂を必要とする。雑魚の魂を喰ら

うよりは強者の魂を喰らう方が効率はいいんだが、無いよりはまシだ。
「……スマンが、今の現象について説明願いたいんだが」
「後にしたまえ、一応私も当事者なのでね。説明くらいはするつもりだ、そのあとにでも答えられるものは答えよう」
少女たちを救出しに来た青年が話に割り込んでくる。がここで話すのも面倒なため、断る。
「……わかった。あと俺の名前は高町恭弥だ。御神じゃない」
「おや、済まないね高町恭弥。私の名は……後でいいだろう」
「んじゃ行きますかねぇ……月村の嬢ちゃんの家でいいのか？」
「ああ、あんたは俺の車について来てくれ。……あそこのバイクはあんたのだろう？」
「然り、では早急に向かうとしよう。ここは長居するような場所ではないのでね」
こうして私がこの世界に来て早々巻き込まれた（首を突っ込んだともいうが）事件は幕を閉じた。

第４話

Ｓｉｄｅ　緋峰

さて、現在私は月村邸にいる。時刻は既に夕刻。高町恭弥が運転する車について来たところ、豪邸に辿りついたのには流石に驚愕した。何でも少女たちはどちらもそれなりの富豪らしい。

……もっとも知り合いに桐条の御令嬢や南条の御曹司、果てには魔王までいるのでスケールの点では彼らの方が数段上だと気づいた時には、もう来客室に通されていた。そこで小物をどう対処したかだけ話して、今に至る。

「……改めて、この度は私の妹のすずか、そしてすずかの友達のアリサちゃんを助けてくれてありがとうございます」

「俺からも礼を言う。あの子達は家の妹の友達なんだ」

そう言って頭を下げるのが、高町恭弥と一人の女性。

名を『月村　忍』何でもあの小物と親類に当たるのだとか。正直、ご愁傷様としか言いようがない。あと、高町恭弥とは婚約を結んでいるそうだ。

「別に構わんよ。偶然、今横に座っている青年が強引に車に乗せようとしたところを見かけたのでね、見捨てるのも目覚めが悪くなると思って行動に起こしたに過ぎんよ」

「そうだ。黒岸、貴様なぜすずかちゃんたちを誘拐なんて企んだんだ？きっちり説明してもらうぞ……？」

「あーそれね。恥ずかしい話、うちの新入りが金に目がくらんで俺含む上役に相談せずに嬢ちゃん達誘拐してくれって依頼引き受けちまったのよ」

そうして話始めたのは先程剣を振るっていた青年。『黒岸（くろぎし）　紫耀（しよう）』というらしい。

……しかし彼はどうも月で出会った森の英雄を思い起こさせる顔立ちをしている。弓兵だった彼が剣を振るっていると考えると中々に面白い。

「ならどうして、すずかの携帯を使って私に連絡してきたりしたのか

しら？」
「一度受けた依頼は断らねぇのが信条だからな、取り敢えず誘拐だけしろって依頼だったから攫ってその後はあのクソ野郎殴ってお終い……って感じでこなそうと思ってたんだけどな。あのイレインだったか？あれにおもっくそぶん殴られて、そんときにこっちの兄さんが颯爽と登場してくれてな。いやーあれはかっこよかったぜ～!!」
「私からして見れば誘拐犯がメイドの横で蹲っているのだから思わず目を疑ったよ」
　想像して欲しい。誘拐犯を打ちのめすつもりで突入。そして目にしたのはメイドを引き連れた三下臭全開のスーツ姿の小物。その前にメイド、さらにその前に蹲っている黒服。……シュールだろう？
「……そうだ、小物で思い出した。月村忍」
「はい…？何でしょうか、緋峰さん」
「あの小物が自分の事を『夜の一族』やら吸血鬼などと言っていたが……それは君達姉妹もなのかね？」
「……ッ!!」
　そう私が問いかけた瞬間、月村忍は息を呑んだ。それに伴い、高町恭弥は懐から何かを取り出そうとしている。……あれは小太刀か、渋い武器を持っているものだ。
「ああ、答えなくて構わない。その反応で充分だ」
「……何も思われないのですか？」
「私は何処ぞの俗物とは違うのでね。『たかが』吸血鬼程度ならば、私にとって人間とさほど変わらんよ」
「そ、そうですか……」
　何やら戸惑っているようだが、さして気にするほどでもあるまい。
「それよりもだ、アリサ・バニングスといったかね？彼女もその言葉を聞いている。最低限、説明とフォローはしておくべきだろう……君の妹も含めてな」
「……そうですね、申し訳ありませんが少し席を離れます」
「構わんよ、しっかりと姉の務めを果たすといい」
「俺達は俺達で話をしておく」

「俺としては改めて嬢ちゃんたちに謝っておきてぇんだが……時間置いてからじゃねぇと逆効果だな」
「では、失礼します」
　そうして月村忍が部屋を出るのを見届けると、高町恭弥が口を開く。
「……しかし自動人形を相手に余裕とは、一度貴方とも手合わせ願いたいですね、緋峰さん」
「蓮夜で構わんよ、敬語もいらぬしもっとフランクに接してくれたまえ」
「じゃあそうさせてもらうけどよ、あんたが使ってた『アレ』一体何なんだ？随分と強力な代物だったけど」
　黒岸紫耀が口を挟む。……そう言えば、後で教えると言ってしまっていたな、仕方あるまい。
「ん？……ああ、エイヴィヒカイトのことか。あれは特殊な術式……まあ有り体に言ってしまえば魔術によるものだ。何分特殊なものなので、扱いには注意が必要だがね」
　なにせ活動位階でさえ、超人と呼ばれるレベルになるのだ。今回の件では思わず創造位階まで解放してしまった。なるべく自重せねばいかん。
「魔術、だと……？にわかには信じられんが」
「テメーが言うなよ、御神の。お前んとこの奥義だって大概だろうが。自らの意志で体のリミッター外して知覚できない速度で動けるとか訳わかんねぇ代物使いやがるくせに」
「なっ……!?そういう貴様こそ、剣に氣を宿らせて衝撃波を放つなぞ人間離れしている技を使っているだろうが!!」
「……ように我々はそれぞれ互いに理解出来ないナニカを平然と使いこなしている。というわけだな」
　それより、少し気になることが出来た。
「それはそうと……黒岸紫耀、なぜ貴様は高町恭弥のことを『御神』などと呼んでいる？」
「態々フルネームで呼ぶなよ、紫耀でいいっての。……で何で此奴

を御神って呼ぶかだっけ？此奴の流派が御神流とか言う流派なんだよ。その印象が強いからかねぇ？」
「正確には『永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術』だがな。……まあ裏に精通している者は大体御神流で通っているがな。それと、俺も恭弥で構わんぞ？」
「承知したよ。紫耀、恭弥。しかし、中々に面白いなこの町は。退屈する事は無いだろうよ」
「ん？もしかして、お前この街に住んでるわけじゃねぇのか？」
「ああ、そうだよ。実は今日この町に着いてね、泊まるところを探していたときに紫耀と彼女達を見つけたのでそのまま追いかけたのだよ」
　真実を全て話したわけではないが、嘘は言っていない。
「あら、でしたら今日は家に泊まっていったら如何ですか？」
「忍か、すずかちゃんたちはもういいのか？」
「ええ、心配してくれてありがと。恭弥」
「……愛を育むのは構わんが、せめて周りに人がいない時にするのがマナーだと思うのだがね」
　いつの間に戻って来たのやら。
「ご、ごめんなさい、緋峰さん。……それでどうかしら？」
「いいのかね？素性もはっきりしていない輩を簡単に泊めたりして」
「ええ、すずか達を助けてくれた人が悪人とは思えませんから」
　……全く呆れ果てるな、月村忍には。私が暗に何か企んでいると言っているようなものなのに月村忍は笑顔で答えてきた。……これではこちらの毒気が抜けるというものだ。
「それに……」
「ん？何かね？」
「いざという時には恭弥が守ってくれますから」
「「……」」
　正に恋する乙女といった表情で恭弥への信頼を伺わせる言葉を月村忍は零す。その表情に紫耀と揃って絶句する。
　恭弥？照れて顔を真っ赤にしているよ。
「……わかった、では今日はその好意に甘えさせてもらうとしよう。

宜しく頼むよ、月村忍」
「ええ、どうぞごゆっくり過ごしてください」
「さーて、俺もそろそろ帰るとするかぁ。じゃな蓮夜、御神の。また集まって話そうや」
　そう言うと、紫耀が席を立つ。
「ああ、勿論。また邂逅する日を楽しみにしているよ、紫耀」
「だからその名で呼ぶなと言っているだろうが。……まあいい、またな紫耀」
　そうして黒岸紫耀は月村邸を去った。まあ直ぐに会うことになるだろう。
「緋峰さん……少し宜しいかしら？」
「……自分たちが吸血鬼であることを口外しないで欲しいのだろう？その程度口に出さぬともわかるよ」
「ええっ!?……緋峰さん、貴方人の心でも読めるんですか？」
「統計だよ、こう見えてそれなりに永い時を過ごしているのでね。そういった顔をする者の言いたいことは何となくわかるのだよ」
　実のところそういった異能も持ち合わせているが、使うまでもなくわかる。
「……失礼ですが、おいくつですか？わたし達と同い歳くらいにしか見えないのですが……」
「少なくとも君たちより遥かに年上だよ、とある出来事に巻き込まれた際に不老になってしまってね。外見が一切変わらんのだよ」
「吸血鬼が実在するくらいだからなまじ有り得んと言いきれないな……」
　恭弥が驚愕しているが、まあ若い内に色々な経験は積んでおくに越したことは無いだろうよ。
「他に何か言っておきたいことはあるかね？月村忍」
「え？……いえ、わたし達一族のことだけですね」
「そうかね？ならば親睦を深めるために雑談でもするかね？」
「賛成です!!恭弥もいいわよね？」
「ああ、蓮夜の話はためになることが多そうだ」

「……まあ永年の教訓くらいなら教えてやってもいいがね」

……こうして、この世界初の夜が過ぎていった。

第5話

Ｓｉｄｅ　緋峰

時は流れ、月村すずか、アリサ・バニングス誘拐事件からもう一週間がたつ。月村邸に泊めてもらった翌日にはそれなりのホテルを見つけたのでそこに滞在している。そして今私が何をしているかというと……

「ありがとうございました、またの御来店をお待ちしています」

恭弥の実家でもある、喫茶店『翠屋』で働いている。

なぜこんなことになっているかは、至極単純。することがなかったのだ。これも最早慣れたものなのだが、

私が訪れた世界で事件が起こるとはいっても、直ぐに起こるわけではないのだ。長い時など、一年ほどすることが無かったこともある。

ゆえ、今回も何時になるか分かったものではない為、恭弥という伝手を使わせて貰って翠屋で働いているのだ。

「お疲れ様、蓮夜君。もう人も捌けてきたし、上がって入って貰って大丈夫だよ」

「お気遣い感謝するよ、士郎殿。だが、まだまだ忙しい時間帯だ。もう少し手伝わせていただくよ」

声をかけてきたのは高町士郎、翠屋のオーナーで恭弥の父親だ。何でも翠屋を開く前は用心棒をしていたそうなんだが、とある一件で重傷を負い、引退せざるを得なくなったそうだ。

「あらあら、そんな遠慮なんかしなくても大丈夫よ？恭弥の数少ない男友達なんだし」

「桃子殿、そういう訳にもいかんよ。私はあなた方のご厚意で働かせてもらっている身だ、不躾な真似は私自身が許せないのだよ」

士郎殿の横で、私を労わってくれたのが高町桃子。

恭弥から聞いたが、高町家は三人兄妹らしい。

だが、桃子殿はとても3児の母とは思えない美しい美貌を保っている。

世界を巡る中で何度かこういった人物を見たことがあるが、未だに謎だ。
たわいのない内容の雑談を高町夫妻と話していると、店の扉が開かれる音がする。
「いらっしゃい……何だ、お前か」
「おいおい、客に対してその態度はねぇんじゃねぇか？」
「しっかり接客して欲しいのならその人を馬鹿にしている様なうすら笑いをやめるのだな、紫耀。……士郎殿、桃子殿、先程あのような物言いをしたばかりなのに申し訳ないが……」
「ああ、構わないよ。友達は大切にするものだ」
「感謝するよ、士郎殿……紫耀、そこで座って待っていろ。着替えてくる」
「おうよ、士郎さん。いつものよろしく～」
「わかった。コーヒーとシュークリームが二つだったね、直ぐに用意するよ」
「……毎度毎度申し訳ない、士郎殿」
「なに、売り上げに貢献してくれるのなら大歓迎さ。紫耀君も時々手伝いに来てくれているからね、このくらいは構わないさ」
……この二人には頭が上がらないな。私の方が遥かに歳を食っているはずなのだが、大人の余裕というものをしみじみと感じる。恐らくだが、その余裕は親となることによって生まれるものなのだろう。
「……さっさと着替えてしまうとするか。余り待たせるのも良くない」

「スマン、待たせた……何をしている？」
「蓮夜？ちょうどいい！！手伝え！」
「離してくださいまし！！あの男には一言ビシッと言ってやらなければならないのです！！」
「何？いい歳したババアの癖してキーキー騒がないでよ、メンドクさ

いなぁ……」
「……貴方という人はぁぁあああ!!」
「だから落ち着け!!テメェも挑発してんじゃねぇよ!!」
　私が着替える為に裏にいた数分で何があったというのだ……!?漫画などで良く見るお嬢様の様な髪型をしている金髪の女性が紫耀に羽交い締めにされていて、それをコーヒーを飲みながら挑発している藍色の髪の青年。……紫耀の知り合いのようだが、このままではマズイな。
「……士郎殿、すまないが少し道場を借りても良いかね？このままだと店に被害が出るかもしれん」
「ああ、構わないよ……というより、僕も協力しようか？」
「流石にそこまでしてもらう訳にはいかぬよ……」
　さて、どうやって今にも暴れ出しそうな彼女の動きを止めるか……余り人目につくものは使えないしな。
「これが最も適しているか。……エーテライト、彼女を縛れ」
　とある錬金術師に扱いを習ったものだが、こういう人目につく場所で使うには役立つな、相変わらず。
　ミクロン単位の細さのフィラメント、視認することすら不可能な代物だ。
「キャアッ!?か、身体が……動かない!?」
「そら紫耀、今のうちに裏の道場までその女性を連れていくがいい」
「サンキュー!!オラ行くぞ！……てか店の中で暴れんなよな！」
「は、離しなさい紫耀!!今日こそはあのウスラトンカチに一発ぶち込まなければ……！」
　紫耀に引き摺られて、女性が連れて行かれる。
「済まないが、君も来てくれないか？どうもこの騒動の原因の一端を担っているようなのでね」
「……誰、アンタ」
「私かね？紫耀の友だよ。名は緋峰という」
「……！そう、アンタが紫耀の馬鹿が言ってた蓮夜って奴か。……いいよ、ついていってあげる」

「助かるよ、こっちだ」
　そうして、毒舌青年を連れ、店の出口に向かい、店を出る直前で士郎殿の方に向き直る。
「士郎殿、迷惑をかけて済まないね」
「店に被害は出て無いから問題ないよ」
「そう言ってもらえるとありがたいよ。彼らの飲食代は、私のバイト代から引いておいてくれ」
　そう言い残し、店を出る。……どうしてこうも厄介事が私の元へと来るのだ、まったく。

　高町家には恭弥が修めている御神流の鍛練のための道場がある。この一週間で恭弥と幾度か組み手をする際に利用していたので、ある程度の勝手はわかる。
「さて、どういう事か説明したまえ紫耀。回答次第で貴様への罰を決めるとしよう」
「ちょ!?俺が悪ぃの!?騒いだのコイツらだろ!!」
「店で騒ぐ原因になったのは貴様だろう？違うのかね、んん？」
「ぐっ……そりゃあそうなんだけどよ～」
「理解したのならばさっさと説明したまえ。どうしてこのようになったのかをな」
　その一言で観念したのか、ようやく紫耀が話し始める。
「……まあ極々単純な話しだけどよ、あの二人は俺のちょっとした知り合いなんだが……犬猿の仲でな。それがバッタリ翠屋で出会っちまってあの有様だ」
　そうして紫耀が示す先には件の二人が立ち合っている。しかも何処からともなく女性の方がレイピアを、青年の方が双剣を持って打ち合っているだから驚きだ。
「今日こそはその憎たらしい顔を穴だらけにしてあげますわ!!」
「無駄無駄、アンタじゃ僕には傷一つ付けられないって」
　立ち合いの最中ですら互いに罵倒しあうくらいなのだから本当に仲が悪いようだな。どことなく、互いへの信頼が垣間見えるが……

言わぬが花、というものだろう。
「紫耀、この際だからハッキリさせておこう。お前……いや、お前達だな。一般人が持ちえないナニカを持っているな？」
「……やっぱ分かるか、流石って言うべきかね？」
「いいからとっとと説明したまえ」
「へいへい……おい、蒼児！ローザ！その辺にしとけって!!」
紫耀があちらで立ち合い……というか殺し合いにまで発展しかけている二人に声をかける。……が、
「うるさいですわよ!!マヌケ面！」
「突撃馬鹿が僕に指図するな」
「テメェら……！上等だゴラァ!!」
ご覧のありさまである。
なぜ諌める側の貴様まで簡単に挑発に乗るのだ……！
「はぁ……貴様等、いい加減にしたまえ」
「「ッ!!?」」
ほんの少し殺気を放つだけでここまで反応出来るのであれば素晴らしいといえるな。
「わかってもらえて何より。……取り敢えず、貴様等そこに正座だ。」
「なっ……！なぜ私がそのような……！」
「異論は認めん、断じて認めん、この場においては私が法だ、黙して従え」
「……わかりました」
お嬢様風のローザと呼ばれていた女性が噛み付いて来たが、先程より強めの殺気をあてたら大人しく言う事を聞いた。やはり人間素直なのが一番だ。ちなみに私は人間のカテゴリーを超越しているため素直である必要など無い。
……男共は命じた瞬間には正座になった。顔が青ざめているがどうしたというのだろうか？
「さて……紫耀達の話を聞きたいところだが、まずは説教だ。そこの二人、公共の場で暴れかけたことに対して、何か申し開きはあるかね

？」
「コイツが喧嘩売ってきた（のですわ！）」
「いい大人が子供の様な言い訳をするな。……まったく何処その馬鹿共そっくりだな貴様等」
　ヴィルヘルムとシュライバーは事ある毎に殺し合いをしていたからこの二人はまだマシと言えるのかもしれんが。
「まあ貴様等へ言うことはもう少し我慢を覚えることだな。……で、次。貴様だ紫耀……！」
「うぇい!?俺もかよ！」
「当たり前だろう、そこの二人を止めようとしたくせに暴言一つでキレて醜い小競り合いに参加。まあそれだけならばまだそこの精神年齢が子供と変わらん二人と同じだと呆れ果てる程度で済ましてやったのだが……」
「精神年齢子供……」「な、なんですのこの方は……？」などと呟いているが知ったことではない。
「話しをする為に小競り合いを止めようとしたのでは無いのかね？違うというのならば言ってみたまえよ」
「……蓮夜の言う通りです」
「だろう？……であるならば、だ。何か言うことがあるだろう？」
「……暴走しかけて申し訳ありませんでしたッ!!」
　紫耀が選択した答えは土下座からの謝罪。
　惚れ惚れするほど見事な土下座だな。これで多少溜飲が下がったので、良しとしてやるとしよう。
「よし、もう正座を崩していいぞ。説教終了だ」
　ほんの数分だというのにローザとやらが百面相をしている。……嗜虐心が擽られるが、まあまたの機会で良いだろう。
「取り敢えず先ほどの説明を再開したまえ、紫耀」
「あいあい……まあ簡潔に言うと、俺らは俗に言う『転生者』って言われる存在なんだよ」
「紫耀!?貴方何を勝手に……！」
「問題ないよローザ。この人がこないだ紫耀が言ってた緋峰って人だ

から」
「この方がですか!?」
……ローザと呼ばれる人物は気位が高いのか、所々見下したような発言があるが、このような物言いはまだ可愛いほうだ。
「で？それがどうしたのかね」
「……やっぱり、驚かねぇのな」
「転生者自体には何度か出会っている。私も人から化外になったという点では私も転生した者と言えるかもしれんがね」
「……まじで？」
「本当だよ、まあその話はまた今度でいいだろう。続きを話したまえ」
「ああ、うん。それでだな……俺達に協力してくれないか？」
「そういう交渉をするならまず何に協力して欲しいかを言いたまえよ、紫耀」
「悪ぃ悪ぃ……少なくとも一週間以内に、地球が崩壊しかける事件が起こる。それの解決に協力して欲しいんだ」
……今回私がこの世界に来たのはそれに関係していそうだな。
「……協力するのはやぶさかではないが、何故それがわかるのだ？」
「「……」」
だんまり、か……ならばそういうことなのだろうな。
「この世界が漫画、もしくはアニメなどの世界だと言うのだろう？」
「……ああ、そうだよ」
ふむ、やはりか。
「……なんでわかったの？」
「今までそういった世界を見てきたからだ。こう見えて貴様等が前世を足した年月よりも遥かに長生きしているのでな」
「……どう見ても同年代にしか見えないのですが？」
「先程言っただろう？化外になったと。その時に不老になってね、それ以降外見が変化していないのだよ」
蒼児、ローザと呼ばれた者達が交互に尋ねてくるが、それに対して律儀に答えてやる。
「……やっぱすげぇな、あんたは」

「ただの年の功だよ。まあ協力はしよう、詳しい話は……また今度にするべきだな。何時までも道場に居座るわけにも行かんだろう」
紫耀が感心したように頷いているが、軽く流す。
「……それもそうだな。じゃあ明日、あんたの泊まってるホテルに行くわ」
「了承したよ、紫耀。……もし、明日も同じようなことをすれば……わかるな？」
「お、おう！わかってるって！な？蒼児、ローザ！」
「え、ええもちろんですわ!!」
「大丈夫だよ……多分」
軽く脅すと、面白いくらいに怯えているがそんなに怖がらせるようなことをした覚えがないんだがな。

第6話

紫耀達三人の暴露から時間が経ち、現在はその翌日の朝である。何をしているかというと、目の前にある荷物を眺めていた。

「今度は何を送ってきたのだ、あいつは……」

荷物はダンボールひとつ、差出人のところには『メルクリウス』とある。どう考えてもカールが送ってきた物だろう。彼は度々こうやって何かしらの物を送りつけてくるのだ、こんな手間をかけるなら直接渡しに来いと言いたい……というか一度言ってやったのだが、それに対する返答が、

『何故私が直接渡しにいかねばならんのだ。確かに貴方も私の友だ、だが我が女神の下を離れてまで向かう意義を感じないのだよ』

とのことだ。即座に鳩尾を殴った私は悪くないと思う。まあ彼が送ってくる物には何度も助けられているのも事実なため、なんとも言い難い。

「……考えていても仕方が無い、か」

そう呟き、開封する。

ダンボールにはアタッシュケースが二つと、手紙がひとつ、入っていた。

「これだけの荷物を一度に送ってくるのは珍しいな……」

いつもならば、小包ひとつ程度だというのにこれだけ送ってきたということは何かしら事情があるのだろうが、奴ならば嫌がらせという点も拭い切れない。

「態々手紙を備えているあたり、まだマシなのだろうが……」

取り敢えず、手紙を開く。

『やあ我が友よ、この手紙を今君が読んでいるという事は、無事に私が手配した荷物が届いたということだろう。今までも何度かこのような事をしているが、今回は少々特別な物になる。何故ならこれら総て、君の知り合いから渡されたものなのだ』

「……何だと？」

書かれた内容は私を驚かせるものだった。私の知り合いだと……

？
『総て身体能力を強化する類の物のようだ。無論、そのままでは君の身体能力についていけないので私が手を加えさせて貰ったがね。まあ詳しくはそれぞれのケースの中に伝言が残っているのでそれを見てくれたまえ、では君の旅にも終幕が訪れることを祈っているよ』
「……カールも代わり映えしないが、それも仕方が無いかね」
　事実、奴の女神に対する執着は永遠の刹那に言わせれば【コズミック変態】と呼べるくらい執着しているらしいからな。それを聞いて言い得て妙だと納得した私は悪くない筈だ。
「しかし、身体能力を強化する物……か」
　何となく察しはつくのだが、それにカールが手を加えたという事実が恐ろしい。
「取り敢えず一つずつ確認していくとするかね」
　そう呟き、アタッシュケースの一つに手を伸ばす。ケースには【ＭＵＳＥＵＭ】と書かれたロゴが貼られている。
「ミュージアム……となると、彼等かね？」
　アタッシュケースを開く。
　その中に入っていたのは、ＵＳＢメモリを模した掌サイズのものが２６本、そしてそれを入れると思わしき形状をしたバックルだった。
「ガイアメモリにロストドライバーか……しかしこのガイアメモリ、もしやＴ２メモリを送ってきたのか？」
　ケースの中にカールの言った通り、手紙がついていたので、それを開く。
『やあ緋峰　蓮夜。久しぶり……になるのかな？君と最後に出会ってからもう２年になるが、こちらは相変わらずだ。翔太郎はハーフボイルドだし、照井竜は亜樹子ちゃんと仲睦まじく暮らしている』
「……そうか、彼らの世界ではまだ二年しか経っていないのか。時の流れからこの身が逸脱しているのを実感してしまうな」
　そう呟きつつ、手紙を読み進める。
『さて、本題に入るとしよう。君に送った物だが、それはＴ２メモリを参考にして財団Ｘが作りだした、新型のガイアメモリだ。マキシマム

ブレイクで破壊出来ない点はＴ２と同じだが、問題はメモリに内包された記憶だ。半分近くが、ゴールドメモリクラスの力を有しているようだ。幸い利用される前に回収出来たから良かったが、僕たちも持て余していた所に君の友を名乗るメルクリウスなる人物がやって来てね。丁度いいから君にこれを託すことにしたんだ、君なら上手く使ってくれると期待しているよ。では、またいつか会おう』

「……」

これは要するに厄介なものを押し付けられただけでは無いのか……？フィリップらしいといえばらしいが。

「……まあ有り難く使わせてもらうとしよう」

さて、次だ。残ったケースを開ける。

そこに入っていたのは、緋と黒で装飾されたバイクのハンドルグリップを模した物と、ミニカーのようなもの、バイクの排気口にも似た装飾が施されているバックル、そしてミニカーと同じサイズのバイクのようなものが入っている。

「……何だ？これは。何処かで見たことがある気もするが」

これにも手紙が内包されているので確認しておくとしよう。

『やあ緋峰　蓮夜！久方ぶりだねぇ。メルクリウスなる君の友を名乗る男に何かプレゼントはあるかと聞かれたので、りんなとハーレー博士に頼んで、ブレイクガンナーを模して、君用に再調整したものを贈ることにした。名付けて、【ファントムガンナー】だ！

専用のバイラルコアも一緒に送ってあるので、上手く活用してくれたまえ！それと、試作型マッハドライバーと、変身機能だけのシグナルバイクのレプリカも一緒に送らせて貰うよ！では、Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ!!また会おう!!』

「……クリム・スタインベルトからだったか。相変わらずテンションの高い御仁だ」

彼らとはさほど関わりが無かったような気もするが、もしかしたらまたいつか彼らの下を訪れることがあるやもしれんな。

「ふむ、こうやって今まで出会って来た者が私のことを覚えていてくれているというのは嬉しいことだな」

私の様な存在を恐れずに接してくれる存在は希少だからな。
そんな風に感慨に耽っていると、部屋の内線が鳴り始めた。おそらくカウンターからの連絡だろうと思い、受話器を取る。
「もしもし？何用かね」
『申し訳ありません、緋峰様。黒岸と名乗る方がカウンターで緋峰様のお部屋を聞きたいとのことでお電話した次第でございます』
もうきたのか。しかしいくら何でも早すぎないだろうか？まだ午前中なのだが。まあそれだけ話す内容が多いのだろう。
「ああ、彼は私の友人だ。もし連れがいるのならば、その者達も連れて来てくれ」
『かしこまりました。それでは失礼いたします』
その言葉と共に内線が切られる。
……飲み物でも用意してやるとするかね。

カウンターから連絡がきてからわずか数分。
部屋のドアがノックされる。
ドアを開けると、ホテルのボーイと紫耀達3人がそこにきていた。ケースは二つとも異空間に仕舞っているので問題はない。
「失礼いたします、ご友人をお連れいたしました」
「ご苦労。紫耀達もよく来てくれた。さ、入ってくれたまえ」
「お、おう。邪魔するぜ」
ボーイにチップを渡し、紫耀達を部屋へと招き入れる。
「どうした？遠慮せずに好きなところに座るといい」
「なあ蓮夜……ひとつ、いいか？」
「何かな紫耀？」
「こんな高級ホテルに泊まってるんだったらお前翠屋でバイトする必要ねぇだろ?!」
「何だ、そんなことかね。翠屋でのバイトは単純に有り余っている時間を潰すためのものなのだよ」
高級……なのかね？一泊、数万程度なのだが……まあ一般人にとっ

ては高級か。
……私？私は逸般人だから除外だ。何処かの世界で誰かが言っていたが、『金の単位はtで数えるもの』などと戯けた事を抜かすような奴もいるからまだセーフだろう。
「で、だ。朝から訪ねて来たということはそれなりに話す内容が多いのだろう？」
「……まぁな」
「ならさっさとそこに座れ、今飲み物を入れてくる
……全員珈琲でいいかね？」
「おう、すまねぇが頼むわ」
「では、暫し待ちたまえ」

彼らを待たせる事数分、全てブラックで入れた珈琲四つと、シュガースティックとミルクを幾つかテーブルまで運ぶ。
「待たせたね、砂糖とミルクは自分で調節したまえ」
「……悪いな、ここまでもてなして貰ってよ」
「別に構わん。それより話を進めるとしようじゃないか」
「おう……昨日どこまで話したっけか？」
「まだ貴様らが転生者だということと、この世界で何かが起こるという程度しか聞いておらんよ。そこの二人には自己紹介もされていないが」
正確には名前だけは知っているが、敢えて呼ばない。ある世界での教訓で、相手が名乗らなければその人物の名を呼ばないことにしている。……私がまだエイヴィヒカイトを習得する前の変哲のない学生だった頃の経験だ。あの頃はいつ何時も気が抜けなかったものだが、今となっては懐かしい。
彼女たちは元気だろうか？あの時は別れも言えずに去ってしまったから、もう忘れられているかもしれんな。その方が彼女たちにとっても幸せな筈だと思うが……まああいつらが何とかしてくれているだろう。

「……そういや、名乗ってなかったね」
「私としたことが抜かっていましたわ……」
二人して自責の念に苛まれているようだが、こちらとしてはさっさと話を進めたいのだがね。
「……まあ自己紹介に関しては私もしていないのだから、お互い様というものだろう」
「……まあお前については俺が教えてたんだけどな」
「自分で名乗って無いのだから一緒だろう……では、改めて名乗るとしよう。私の名は緋峰　蓮夜、化外だ。まあよろしく頼むよ」
「ローザ・シャルラハロートと申しますわ。転生者で今生ではドイツの生まれですが、前世では日本の高校生でした。宜しくお願い致しますわ」
「……灰群蒼児（かいむらそうじ）。この中では一番年下で高3、転生者だ。別に仲良くしてくれなくていい。めんどいし」
「んじゃ俺も改めて、黒岸紫耀、転生者だ。一応この中では仕切りを担当している。歳は23、ローザも同い年だ」
「……紫耀よ、女性の年を断りなく明かすのは辞めたまえ。要らぬトラブルを引き起こす原因になるぞ」
「は？何言ってんだよお前」
紫耀の後ろで黒いオーラ全開のローザ・シャルラハロート。本当なら怒鳴り散らしたいのだろうが、昨日の俺の言葉を覚えているのか我慢しているようだ。
……というか紫耀、もしかして鈍感スキルでも持っているのか？あの漆黒オーラを感じ取れないとは。
「……ローザもいちいち反応しなきゃいいのに」
「何か言いましたか、蒼児……？」
「何でもないよ」
「……いい加減そのコントのような流れを止めたまえ。話が進まん」
仲裁に入るのも疲れるのだがね。彼等のコント紛いの掛け合いは見ている分には面白そうだが、自分が関わっていると面倒でしかな

い。
「確かにな。っーわけでローザ、蒼児。しばらく黙ってろ、お前らが口挟むとマジで話進まねぇから」
「その評価については異論を挟みたいところですが、確かに交渉事は貴方が一番向いていますものね」
「さっさと帰れるならどうでもいい」
「蒼児はほっといても別にいいか。じゃ、早速説明と行こうか。何から話せばいい？」
「まず協力を要請する原因になるものがこれから起こるのだろう？まずはその説明からだ」
「オーライ。まあ端的に言って……地球が滅びるくらいの事件が今年中に二回起こる。それの阻止を手伝って欲しいんだ」
「そのうちの一回は昨日言っていた件だろう？それ以外にも起きるというのか？」
「今んとこは可能性だけどな、まあほぼ間違いなく起こると考えて貰っていい」
「それはまた、災難なことだ」
　どんな並行世界でも、世界規模の危機が起こっていることを鑑みるに地球は魔窟と評して差し支え無いのではなかろうか？
「つまり紫耀、私はそれの解決に手助けすればいいのかね？」
「そのつもり……だったんだけどな。昨日ふと思い出したことがあってよ」
「なんだね？」
「お前……【デバイス】って持ってる？つか知ってる？」
「何だねそれは？……何処かで聞いたこともあるような気もするが」
　確か赤龍帝と出会った時だったか、人をモブキャラ扱いする糞生意気な餓鬼がデバイスがどうのこうの言っていたような気がする。よりにもよって我が友の姿を模していた為、塵も遺さず滅した筈だ。
……嗚呼、思い出しただけでも腹が立つ。
「マジで？まあ一応説明しとくと、魔法を発動する為の機械だな。種

類は色々あるんだが……まあここでは割愛するわ」
「ふむ、聞き捨てならない単語が聞こえたがいいかね？」
「おうよ、ドンとこい！」
　何故か胸を張る紫耀。そんなに誇ることなのか？
　……おそらくは私が知らぬことを自分が知っているという矮小な自尊心に満たされているのだろうよ。
　至極どうでもいいが、紫耀が嬉しいのならそれで良いだろう。
「では遠慮なく。先程この世界において魔法を使うための道具だと言っていたが、この世界では魔法が認知されていないようだが？」
「ああ、それな。この世界は【次元世界】って概念があって、その中に【ミッドチルダ】って場所で使われてるものなんだよ。地球には普及してない筈だ」
「……つまりなにか？そのデバイスとやらがこの世界に流れ着くとでもいうのかね？」
「あー……間違ってはねぇんだけど厳密には違う。【ロストロギア】っつー代物がこの世界に流れ着くんだ。それを追ってきた奴等がこの世界にデバイスを持ち込むって感じかねぇ……？」
「なんだそれは……はた迷惑な奴がいるものだな」
「うん、まあそいつらだけで何とかしてくれるんだったら問題は無えんだけど……」
　と、そこで紫耀が言いよどむ。……なんだ一体、気色が悪いな。
「なんだ紫耀、何か言いにくいことでもあるのかね？」
「……実はなのはちゃんが追ってきた奴等が持ってるデバイスを使って首突っ込んじまうんだよ。
　というか、この世界の物語の名前が【魔法少女リリカルなのは】なんだよな……」
「……成程。貴様が言い淀んだ理由が解った」
　どう考えてもこのことを知ったら間違いなく恭弥が暴走するだろうな。
「まあそれはいざとなったら私が半殺しにしてでも止めるとして、結局私は何を手伝えば良いのだ？」

「話を振っておいて気が引けるんだが……正直、前半は手を出さないで欲しい。蓮夜に動いて貰うのは、【時空管理局】っていう組織が介入して来てからだな」
「時空管理局……？なんだ？そのいかにも頭の悪そうな名前の組織は」
「……あー、一言で言うと超ブラック組織？」
「なんだそれは」
「いや、才能が有れば年齢二桁いってない餓鬼でも組織に組み込もうとするような組織だし」
「……ほぉ、なかなか愉快な組織なようだなぁ。出会う時が待ち遠しいな」
　幼子を組織に組み込もうなどとは、今迄最低の悪だと思っていた奴等ですらそこまで屑な真似をしなかった筈だ。これは、それなりの理由を聞かせて貰わんとなぁ……!!!
「れ、蓮夜……？少し落ち着こうぜ、殺気が漏れてるぞ……？」
「あ〝？……ああ、すまない。少し取り乱してしまったようだ」
「あ、あれが少し取り乱したという規模なんですの……？」
　そう呟くローザ・シャルラハロート。
　その顔はかなり青ざめている。口には出してはいないが、灰群蒼児も顔を青くしているようだ。……私の殺気に当てられてしまったのか？少々精神的な鍛練が足らんのではなかろうか。その証拠に紫耀は大して気にしていないように見える。まあこいつは一度私の殺気を受けているから耐性が出来ているだけだと思うが。
「まあ言いたいことは理解した。その管理局とか言う屑が来るまで日常を過ごしていればいいんだな？」
「おう。もしかしたらその前に力を借りることになるかも知れねぇがそんときはまた連絡すっわ」
「わかった。まあ気軽に連絡してくるといいさ」
　本来なら私が積極的に動くところなのだが、紫耀達には何か考えが有るようだから任せるとしよう。
　暇な時間は管理局とやらへの制裁でも考えるとするかね……

第7話

話がある程度纏まったので、四人揃って珈琲を飲んで一息つく。
「……さて、このまま解散するのもやぶさかではないが、何か話しておきたいこと、聞きたいことはないかね」
「では、お互いが持っている力について共有するのは如何ですか？私達3人は互いの能力について把握していますが、緋峰さんについては何も知らないも同然ですから」
そちらにしても、同じことが言えますけど。
とローザ・シャルラハロートが提案してきた。
……成程、随分と理に適っている。まあこちらもメインで使う幾つかチカラを教えれば充分だろう。
「私としてはそれでも別に構わんが……紫耀と灰群蒼児はどうするかね？」
「あ？俺も問題ねえよ？そんな隠す程のモン持ってねぇしな……蒼児、お前は？」
「興味ない。僕の能力については勝手に話しといて」
そう言うなり、懐から携帯を取り出し、弄り始めた。
……えらい気難しそうな少年だな。共に活動するならば、扱いには細心の注意を払うべきかもしれんな。
「お前なぁ……もうちょい協調性ってもんを」
「別に他人にどう思われようと僕には関係無い」
紫耀が説得しようとしたみたいだが、取り付く島もないようだな。
「……わかったよ、取り敢えず話だけでも聞いといてくれ」
「はいはい」

紫耀の言葉に、灰群蒼児は適当な返事で答えた。
「そんじゃ能力の説明会を開催しますかね。……誰のから話す？」
「言いだしっぺの私から始めましょうか？」
「私としては誰からでも構わんがね」
「じゃ、ローザから頼めるか？」

「わかりましたわ。……と言ってもそこまで特筆するようなチカラはないんですけど。能力はＡＡ＋の魔力、傷を癒すアイテムを渡されましたわ。デバイスは【ミッド式】のインテリジェンス・デバイスの【ワルキューレ】ですわ。ワルキューレ、ご挨拶を」
《初めまして、ワルキューレと申します。宜しくお願いいたしますね、緋峰様》
　電子音声がローザ・シャルラハロートの胸元のブローチから聞こえてくる。
「……アクセサリーが喋るとは、それがデバイスなのかね？」
「あ…そういやデバイスの説明忘れてたな。全部のデバイスが喋るわけじゃねぇんだけど、俺らの持ってるデバイスは全部喋るぜ。普段は持ちやすいようにアクセサリー状にしてるが、本来は武器の形をしてる」
「成程……中々興味深い代物だ。機会があれば、分解してみたいものだな」
「わ、私のワルキューレは渡しませんわよ!!?分解するなら蒼児か紫耀のにしてくださいな!!」
「おい!!さらっと俺の相棒売ろうとしてんじゃねぇよ!!」
「……渡さないよ」
　紫耀のリアクションはなんとなく予想はついたが、灰群蒼児までもがこちらを睨んで威嚇してくるのは予想外だった。
「……ちょっとしたジョークのつもりだったんだが」
「お前が言うと冗談には聞こえねぇよ……」
　そのような印象を持たれるような行動はしていない筈なのだが……まあ気にしないでおこう。
「んじゃ次は俺だな。俺はデバイスと、魔力とはまた別の力の【氣】って代物を操る力を与えられた。氣は主に身体能力の強化に使ってる。デバイスの名前はベルカ式の【村正】だ」
《よろしくお願い申す。緋峰殿》
「……また随分と古風な喋り方をするんだな」
　村正……ということは日本刀の村正がモチーフなのだろうか？

おそらく誘拐の際に使っていたあの刀が本来の形なのだろう。
「で、最後に蒼児。こいつが得たのは、高度なシミュレーション能力と機械整備技術。デバイスはミッド式の【シェルティス】。こいつのはインテリジェント・デバイスじゃなくてアームドデバイスっていう純粋な道具だ。そんで、俺たちのデバイスの調整は蒼児に頼んでるんだ」
「……別にあんたらのためじゃないよ。元々機械弄りが好きなだけだし」
「ほう……灰群蒼児とは気が合いそうだな。私も時々ではあるがそのようなことをしている」
　なんせ異空間に閉まってあるバイクやらは正規品ではないものばかりなので、自分で整備する他ないからな。
「……へぇ、どうでもいいけど」
「おや、振られてしまったか」
　しかしどうでもいいなどと言いながらも、こちらに向ける感情が幾分柔らかいものになった。
「……とまぁ俺たちの能力としてはこんなもんだ。次はそっちの番だぜ？」
「解っているよ。さて私の能力の一つは、紫耀には言ったと思うが、エイヴィヒカイトと呼ばれる魔術による超人的な身体能力と超常現象を操る事ができる」
「……詳しい説明をしてもらってよろしいかしら？流石にそれだけでは詳細がわかりませんので」
　取り敢えずエイヴィヒカイトについて概要を話したが、流石にわからなかったのか、ローザ・シャルラハロートが口を挟む。
「構わぬよ。さて、エイヴィヒカイトとは聖遺物と呼ばれるものを媒介にして、自らの魂を改竄し、魔人へと作り替える魔術だ。そしてその強度は４つの位階に分けられる。活動、形成、創造、流出となっていき、位階が一つ違うだけでも蟻が象に挑む程の力の差が生まれる」
「魂を改竄するって……つまり貴方は人間ではないということですか？」

「その通りだ。種族的には……魔人になるはずだ」
「……そんじゃ今のお前の位階は？確かこないだは創造とか呟いてたから少なくとも創造位階何だろ？」
　紫耀が少し考え込むような仕草をしていたが、大方私が純粋な人間ではないと言うことについて考えていたのだろうな。……まあどうでもいいがな。
「……一応流出位階まで到達しているが、真の流出位階とは言えないのだよ」
「どういうことだ？」
「まず、エイヴィヒカイトの位階を上げるためには自分の内に秘めた渇望を認識する必要がある」
「……渇望、ですか？」
「そう。例えば私の知り合いは、幼い頃に死別した自分の親族二人を取り戻したいという気持ちを炎と定義し、『その情熱を決して消さず永遠に燃やし続けたい』という渇望を抱いていた。その者はその渇望を体現し、創造位階において『自分自身を炎に変える』という業を身に着けた」
「それはまた……凄いですわね」
「最も、その様な超常現象を引き起こすには創造位階にまで達する必要がある。活動位階では身体能力の向上、形成位階では聖遺物の具現化となる」
「そんで？お前が真の流出位階じゃないってのはどういうことだよ？」
「渇望にも種類があるのだよ。先ほど例に挙げた者の渇望は『～になりたい』という求道型の渇望、それとは別に『～だったらいいのに』という覇道型の渇望の二種類に分かれる。そして真に流出位階に到達できるのは覇道型の渇望を抱く者だけなのだよ」
「つーことはお前は求道型ってことか？」
「そういう事になる。流出位階とは文字通り、『自らの渇望を流れ出すことにより、世界をその理に染め上げる』事ができる。それが出来るのは覇道型の渇望を抱く者だけなのだよ。それに対して求道型は流

出位階にまで到達することは出来るが、覇道型とは違い自らが【特異点】となり、世界から独立した存在となるのだ」
「つまり蓮夜は【特異点】ってことか？」
「ま、そう言う事だ」
　思っていたよりも詳しく説明してしまったが、まあ別に構わんだろう。
「……一つ、気になったんだけど」
「何かね？灰群蒼児」
「……あんたの渇望って何？」
「私の渇望かね？」
　その質問が来るとは思っていたが、まさか灰群蒼児から質問が飛んで来るとは思っていなかった。
「別にそこまで大したものではないよ。『今まで出会ったものとの記憶を忘れないでいたい』というその程度のものだよ」
「……マジで何の変哲のない渇望だな。てっきりもっと凄い渇望を抱いていると思ってたぜ」
「……まあ私にも色々あるのだよ」
　那由多の年月を放浪し続けた私にとって、思い出とは非常に大切な物になる。それ故に私の業はあそこまで反則的な物になるのだろう。
「さて、取り敢えずエイヴィヒカイトについてはこんなものでいいかね？」
「ん？おうよ、長々と説明させて悪かったな」
「それはお互い様というものだ。他にも色々あるのだが……まあ別に構わんだろう？」
「ああ、充分だぜ」
　これで互いの情報を共有した訳だが、まあだからどうしたというほか無い。
　私は何時もと同じく、この世界の危機を解決する為に動くだけだ。
「取り敢えず紫耀、暫くのあいだは貴様等に任せておけばいいのだな？」
「おうよ！まあ俺たちにドーンと任せとけって!!」

「そうですわね。多少とはいえ知識がある私達が動いた方が比較的スムーズに事が進むでしょう」
「……めんどいけど仕方ない」
３種３様のリアクションを見せる。……どことなく不安だが、まあ任せるとしようか。
時間が出来るのならば、今日届いた物の実験でもするとしよう。
ふと時計に目を向けると、１２時近くを指していた。
「話し合いはこの辺で良いだろう。もう昼も近いし、このまま昼食にでも洒落こもうではないか」
「いいですわね。私は賛成ですわ」
「……異議なし」
「それもそうだな……うっし、じゃ翠屋にでも行くか」
「……くれぐれも昨日のような真似はするなよ？」
「わぁーてるよ」
そのような会話を繰り広げながら、部屋を出る。

この後、翠屋でローザ・シャルラハロートと紫耀が小競り合いを始めたので活動位階になって二人をのした私は悪くないはずだ。

第8話

紫耀達と情報交換をしてから早数日。
私は変わらず翠屋でのバイトと、送られてきた物の性能確認に励んでいたのだが、紫耀達の方はなかなかに大変なようだ。
高町家の末っ子、高町なのは嬢が無事（？）デバイスとやらを入手し、件のロストロギアとやらを回収しているようだ。それと時期を同じくして、なのは嬢がフェレットを飼い始めた。名をユーノと言うらしいが、魂の形を見るにあれは姿を変えた人間だ。なのは嬢に危害を加えるつもりかとも思いはしたが、紫耀らが動いていないので問題は無かろう。なのは嬢が学校に行っている間は、翠屋のマスコットとなっている。
そんなこんなで私は今、翠屋にバイク【サイドバッシャー】で向かっている。なんでも連休を利用して、高町家、バニングス家、月村家の三世帯で温泉街での慰安旅行をするそうなのだが、私もそれに誘われたのだ。断ろうかとも思ったのだが、紫耀曰く、そこになのは嬢が回収しているロストロギアがあるとの事なので、迷惑をかけない程度に介入してみようと思い、参加を決めた。
……というのは建前で単純に私が温泉が好きなだけだ。温泉はいい。疲れた体だけでなく、心も癒されるものだ。
これから向かう温泉について思考に耽っていたが、翠屋が見えてきたので思考を辞める。
翠屋の前には既に高町家、バニングス家、月村家、そして紫耀達が集まっていた。……何故紫耀達がいるかと言うと、これから向かう温泉街にもロストロギアとやらが有るかも知れないとのことで、ついてくる事となった。勿論旅費は自分達で捻出してもらったがな。
「すまない士郎殿。遅れてしまったかな？」
「いやいや、みんな早めに集まっただけで時間には十分余裕があるよ……にしてもサイドカー付きのバイクとは随分派手だね」
「そうかね？幾つかバイクを所持しているのだが、短期間の旅行などではサイドカー部分に荷物を積めるから重宝するのだがね」

他にも日常ではほぼ使わない機能があるのだが、ここでは割愛する。
「それじゃあ少し早いが皆集まったことだし、出発するとしようか」
「了承したよ、士郎殿」
そう言いつつ、士郎殿は車へと向かう。この団体は乗用車四台、サイドカー付きバイク一台の集団になっている。……こうして見ると、私だけ浮いているがまあそんなことを気にするような精神は遥か昔に捨てたから何の問題もない。
そんなことを考えている間に士郎殿の運転する車が出発する。その後ろをバニングス家、月村家、紫耀組と続く。私は一番後ろになるが、万が一何かしら問題が起きたとしても私が何とかできるだろう。では暫しドライブを楽しむとしよう。

〈キングクリムゾン!!
時間が消し飛んだ感覚がしたので、辺りを見渡して見ると、見たことのあるヒョウモンダコのような髪の男を見つけたが、『運悪く』バナナの皮を踏んで足を滑らせて頭を打ち、そのまま動かなくなった。おそらく死んだのだろう……まだ奴は真実に辿りつけていないのか。ジョルノもいい加減解除してやればいいと思うのだが、まあ奴がやったこと故に自業自得とも言えるので如何せんともし難い。
まあそのような些事はその辺に捨て置くとして、私達は宿泊予定の旅館の前に佇んでいる。子供組は無邪気にはしゃいでいるが、一人だけ顔にほんの少し陰りが見える。
高町なのは嬢、紫耀達によれば今彼女はとある問題に直面している様だが……私には関係無い、というよりも関わる資格がないと言える。彼女が自らの家族や親友に魔法のことを明かしていないのだ。つまり自らの一番信頼出来る者たちに自分の行っていることを明かしていないのだ。それなのに実家でバイトをしているだけの胡散臭い男に何を言われても聞き入れはしないだろう。
いくらなのは嬢が心優しい少女とはいえ、現状を明かしていない以上自分だけでどうにかするつもりなのだろう。であれば私は彼女の

意志を尊重しつつ、彼女の命が危機に晒された場合のみ介入することにするとしよう。
……とまあ長々と語ったが結局は今まで通り過ごすだけだ。今優先すべきは温泉だ、温泉。女性陣はローザ・シャルラハロートに任せるとして、こちらはこちらで楽しませて貰うとしよう。
また暫し時が過ぎ、現在は夕刻。我々男性陣は少し早めの風呂を楽しんでいる。
「ああ～温泉入るのも久し振りだけど、やっぱ気持ち良いな～」
「確かにな。何と言うか……こう、家の風呂とはまた違ったものを実感出来るというか」
紫耀と恭弥が何か爺臭いことを言っているが、その意見には異論が無いので黙っておこう。……にしても、だ。やはり温泉は素晴らしい、心が浄化されていくようだ……。最も、浄化されるような考えなど持ち合わせていないのだがな。
「しかしあれだね。紫耀君は裏でそれなりに有名だったけど、まさか蓮夜君まで武術の心得があるとは思ってなかったよ」
「護身術の域を出ないがね。まあ旅をしている都合上、トラブルに巻き込まれることも少なくないのでな」
実際には護身術等という生易しいモノではなく、殺戮を想定した物であることは黙っておくとしよう。
「私としては士郎殿が裏の世界で名を馳せた人物だというのが未だに信じられんのだがね」
「ははは、昔の話さ。今はしがない喫茶店のマスターでしかないよ」
「士郎さんは凄かったぜ～？俺が裏の世界で仕事するようになってまず最初に言われたことが『御神の剣士が関わる件には関与するな』だったからな。裏じゃ今でも伝説の存在だぜ？」
「そういうお前こそ裏では名が知れ渡っているだろうが。……確か、『請け負った仕事は必ずこなす居合術の使い手』だったか？」
「おいばかやめろ。俺は自分で出来る仕事だけを引き受けてるだけだっつの」
恭弥がニヤニヤしながら紫耀に話題を振る。恭弥が随分と楽しそ

うだが、何時もの意趣返しかねぇ？
「なんだ紫耀。貴様抜刀術の使い手だったのか？それにしてはあの時は普通に刀を振るっていたようだが」
「お前は抜刀術で人を傷付けないで無力化出来んのか？」
「……ああ、成程」
　頭の中から無傷で鎮圧すると言う考えが無かった故に紫耀が言っていることの意味がイマイチ理解出来なかった。私にとって無力化とは手足の一本は潰すものだからな。
「何か随分間が合ったんだが……？」
「気にするな。少し認識の違いを確認していただけだよ」
「……これは突っ込まない方がいいんだよな？」
「……さあ？俺にはわからん」
　……紫耀と恭弥が小声でボソボソ話し合っているが、気にしないでおこう。士郎殿も苦笑いしているが、こればっかりは如何せんともし難い。
「さて、私はそろそろ上がるが皆はどうする？」
　風呂から立ち上がり、三人に問い掛ける。本来ならもう少し浸かっていたいのだが、先程から頭の中から警鐘が鳴り止まないのだ。私には予知能力の類は無いが永い時を生きたことによる今までの経験から、身体が何らかの事象に反応しているのだ。
　早い話が、虫の知らせと言うやつだな。
　何度かこれで危機を免れている故に、信頼性は抜群だ。
「んじゃ俺も上がるとすっか。あんまし長く浸かり過ぎても身体がだるくなっちまうしな」
「僕はもう少しのんびりしていくことにするよ」
「俺ももう少し浸かっていく。先に上がっといてくれ」
　紫耀、士郎殿、恭弥の順で返事が返ってくる。高町親子は残るか、ある意味都合が良いな。
「了承した、ではまた後ほど。紫耀、いくぞ」
「おい!!ちょっとは待てよテメェ……」
　紫耀が文句を垂れているが、無視して、脱衣所へ向かう。奴は多少

扱いが悪い方が輝いている。俗に言う弄られキャラと言うやつだ。
　着替え終わり、割り当てられた部屋へと向かう途中、紫耀へと声を掛ける。
「ところでだ、紫耀。改めて確認しておきたい事があるんだが……構わんか？」
「あ？なんだよ急に」
「先日言っていた此処にロストロギア……だったか？を狙っている第三者などは居るのかね？」
「おう……金髪の少女と橙色の狼のコンビが狙ってる。そいつらも俺達やなのはちゃんと同じ魔導師だ」
「成程……では一度顔を拝みに出向くとするかね」
「……介入するのは構わねぇけど、頼むから五体満足で帰してやってくれ」
「何か事情でもあるのかね？」
　私としては、腕の一本ぐらいは貰い受けるつもりだったのだが。
「まあ色々と複雑なんだわ。何より、なのはちゃんがフェイト……ああ、金髪の嬢ちゃんの名前な。その子と友達になろうとしてんだよ」
「成程……それでは仕方あるまい」
　敵対しているものと友になろうとするとは……幼さ故の無謀というか、なんというか……
「……ッ!!蓮夜、介入するつもりなら今直ぐ向かった方がいい。魔力反応だ、場所はそう遠くない」
「ああ、こちらでも結界だったか？それを検知した。少し覗いてくるとしよう」
　そう言いつつ、私の持つ特殊なチカラの一つで、自らの姿を『化けさせる』。
　私の体が一瞬輝き、周りを白く塗りつぶす。光が納まれば、その体はもはや『緋峰　蓮夜』ではなく、金髪の長い髪をポニーテールにし、黒い軍服を纏った少女の姿になっていた。その状態からさらに『彼女』に関するものを口調から何から模倣する。

そうすることによって生まれるのは、この世界には存在しない人間『ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン』だ。

「……はぁ!!!?」

「……ふう、久々の思考までの完全模倣はやっぱり疲れますね～。それじゃ紫耀、ちょっと行ってきますね～☆」

そう言い残し、エイヴィヒカイトにより上昇している身体能力にものをいわせ、結界が張られている場所に向かう。

紫耀が間抜けな顔を晒していたのをコッソリ写真に納めてからだがな。

第9話

はーい呼ばれて飛び出て電撃バチバチ☆
みんなの戦乙女、ベアトリス・キルヒアイゼンでございまーす☆
……無いな。うん、無い無い。
模倣した思考に引きずられるまま、口に出してみたがこれはない。私のキャラではない、遥か昔に同じ様な真似をした気もするが気の所為だ。ああそうだ気の所為に決まっている。この私がそのような真似をする筈がない……!!
……失礼、取り乱した。まあ今の私は気配を消して魔法少女二人の闘いを見ている。
いやぁ中々に面白い見世物だ。ここ数億年血と臓物に塗れていたからか、こういった死の気配を感じない闘いは私にとっては見世物の域を出ない。確かデバイスには非殺傷設定とやらが搭載されているとか何とか。ダメージは残るらしいが、そんなものはまやかしに過ぎないだろう。
おや、もう闘いは終了かね。金髪の少女がなのは嬢を打ち倒し、小さな宝石のようなものを手に持っている。……確か【ジュエルシード】とか言ったかな?あれは。このまま見逃すのも、悪くはないのだが……フェイトとか言ったか、彼女の意志を見て見るとしよう。なのは嬢と同じくらいの年頃なのに彼女よりも戦い慣れているのは気になるしな。

なのは嬢とフェイトとやらの闘いはフェイトの勝利に終わる。なのは嬢がいくら魔導師の素質に溢れているといえど、同じ素質を持ち、その上修練を積んだフェイトに勝てないのは自明の理というものだ。
「……ジュエルシードは貰っていくね」
フェイトは冷たくなのはに言い残す。本来であればこのまま去るつもりだったのだろうが、それを食い止めるように私が言葉を挟む。

「すみませんが、それを持ち帰らせる訳には行かないんですよ」
「ッ!!?誰……!?」
「名乗らない人物に名乗る必要性を感じないのですけれど、まあ聞かれたからには答えてあげましょう」
　これも大人の女の余裕ってやつです、と呟く。私は本当は女ではないが、これもまた演出だ。
「古代遺産管理・調査部隊、聖槍十三騎士団黒円卓第五位、ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼンです。仲間内では戦乙女（ヴァルキュリア）と呼ばれていますね」
「古代遺産管理・調査部隊……？」
「おや、ご存知ありませんか？裏ではそこそこ有名な部隊なんですけどね～……特に、貴女みたいな人達には」
　……自分で言っていてなんだが、よくここまでまかせが言えるものだ。多少の信憑性を持たせるために黒円卓の名を借りてはいるがこの世界にはそんな組織が存在しないことは確認済みである。
「……」
「おや、だんまりですか。別に私は構わないですけどね……その手に持っているものを置いていけば、ね」
「あ、何なんだいあんた!!いきなり出てきて勝手な事ばっか言って！」
　フェイトの横に立っていた橙色の狼が口を挟む。……狼が言葉を喋るのは私にとっては別段珍しくもなんともないが、中々奇抜な毛色だな。もしや使い魔とか言う存在なのだろう。主人思いの良い存在だ。
「まあ貴女方からすれば勝手な事を言っているようにも聞こえるのでしょうけどね、こちらとしても引き下がる訳にも行かないんですよ。……これが最後通告です、その手に持っているものをこちらに渡しなさい。今ならまだ、怪我をさせずに見逃してあげます」
　言葉と共に聖遺物【戦雷の聖剣（スルーズ・ワルキューレ）】を具現化し構える。この時点で既に形成位階、如何に魔法を扱う才能が有ったとしても私には通用しない。
「……」

少女は無言でデバイスを構える。その目には闘志が溢れている。
「……やれやれ、交渉は決裂ですか。あまり気が進みませんが、仕方ありませんね」
「さっきから何なんだアンタは!!上から目線で偉そうに!!」
咆哮と共に、狼が突っ込んでくる。……随分と堪え性のない奴だな。
「上から目線で偉そう……？当然でしょう、私は大人で、彼女は子供です。そして何より……」
狼の突進を軽くいなし、その首元に戦雷の聖剣を当て、電撃を流す。
「ぐあああああ!!?」
「アルフっ!!!?」
……ほう、この狼はアルフと言うのか。まあ覚える気はサラサラないのだがな。
そのアルフだかは電流を流されたことにより気絶し、私の足元に転がる。それの首元に足を置き、改めて少女に剣を突きつける。
「何の脅威にもならない存在に対して、同じ目線で接する馬鹿が何処にいますか。現に貴女だってそうでしょう？そこで転がっている少女が、自分にとって何の脅威にもならないから、そうやって見下しているんでしょう？」
「……ッ!!?違う!!私は……」
「同じですよ。どれだけ高尚な理由でお膳立てしても、行動に貴女の浅ましさがにじみ出るんですよ。この狼にしたってそうです、大方貴女の使い魔なのでしょう？貴女が使役する以上、使い魔というものは何処か主人に似てくるものです。この狼にしてもそう。相手の実力も把握出来ないくせに無謀にも突っ込んで来て、こうやって私の足元に転がって、生殺与奪を私に握られている。……正直、呆れてものも言えません」
「黙れっ!!!貴女に私の何が解るっ!!!?アルフを離せ……！」
少女は激昂し、私に鎌状になったデバイスを向けてくる。使い魔を思う心意気は見事だが、まだ彼女の本音が見えんな。……もう少し、いたぶって見るとしよう。

「貴女……状況解ってます？貴女が私に指示出来る立場にあるとでも思ってるんですか？もうその発言だけで浅ましさが透けて見えますね。……ですが、良いでしょう。格の違いというものを見せてあげましょう」

そう言い放ち、狼を彼女の方へと蹴り飛ばし、詠唱を紡ぐ。

Wa(私)r es so(犯) schm(し)▪hlich(た)(罪)，――(は)
ihm(心) in(から)nig(の) ver(信)trau(頼)t―tro(に)tzt(お)(い)(て)，
ich(私) dein(あなた)em(の) Gebot(命)(に)(反)(し)(た)(こと)．
Wohl(は) taug(愚)te(か) dir(で) nicht(あ) die(な)t▪r(た)，(の) ge(お) Ma(役)(に) (立)(て)(な)(か)(っ)
Auf(だ) dein(か) Gebot(ら) entbrenne(あ) ein(な) Feuer(た)；(の) (炎)(で) (包)(ん)(で)(ほ)(し)(い)
Wer(我) mein(が)es(槍) Speer(を)es(恐) Spitze(れ) fur(る)cht(な)et(ら)，(ば)
durch(この)schreite(炎) das(を) feuer(超) nie(す)!(こ)(と)(許)(さ)(ぬ)
Bria(創)h(造)―
雷速剣舞・戦姫変生
Donner Totentanz―Walk・re
(トール・トーテンタンツ・ヴァルキュリア)
『雷速剣舞・戦姫変生』。

軍人として大戦を駆けたベアトリスの「同胞たちが道を見失わないよう、戦場を照らす閃光になりたい」という渇望のルールを具現化した求道型の創造。

能力は『自分自身を雷へと変化させる』という至極単純な能力。だが、それに強力な代物である。

「どうぞ？先手は譲ってあげます。せいぜい足掻いてください」

「……ッ!!!バルディッシュ!!!!」

《Photon Lancer Phalanx shift》

デバイスから機械的な音声が響き、少女の周りに魔力で出来た球体が幾重にも展開される。その総数38基、そこから放たれるのは魔力でできた槍。それが何度もこちらに向かって放たれるその総数1064発。普通の人間ならば、防御しなければ例え非殺傷設定とやらが機能していたとしても擬似的な痛みでショック死しそうなものである。しかも物理攻撃では無いので、雷化による攻撃の透過も叶わない。……だが那由多の放浪の中で蓄えた魂魄による私のエイヴィ

ヒカイトの霊的装甲の前にはそのどれもが意味を成すことなく霧散する。
「……ハァ……ハァ……や、やった……？」
「そんな訳無いでしょう？ですが中々に素晴らしい攻撃でしたよ」
「な……あっ!!!」
「貴女にも譲れない気持ちがあるのは今の攻撃でよくわかりました。ご褒美に苦しませずに倒してあげます」
　そう呟いた瞬間には雷化による光速移動で少女……いや、フェイト嬢の横に移動し雷撃を浴びせる。
「Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈ，ｎ」
「あっ……」
　電撃に対して耐性でもあったのか、少し強めに電流を流さなければ気絶しなかった。
「さて、バルディッシュ……とか言いましたか？主人を殺されたく無ければ、先程の宝石を渡しなさい」
《……Ｐｕｔ　ｏｕｔ》
「確かに。素直でよろしい……そこの狼、もう目を覚ましているでしょう？さっさと御主人を連れてここから去りなさい」
「くっ……どういうつもりだよ、アンタ」
「どういうつもりも何も、最初から私の目的はこの宝石だと言っているでしょうに。ほら、今のうちにさっさと行ってください」
「ちっ……アンタ、匂いは覚えたからね」
　そう言うなり、狼は犬耳の生えた女性へと姿を変え、フェイト嬢を担ぎ、この場を去っていった。
　さて、このまま去っても構わんのだが１つ余計なお節介を焼くとしようか。
「貴女にも一応通告しておきます。もうこれ以上この件に首を突っ込まない方が良い。今回は私だったから良かったものの、私の同僚だったら今頃殺されてますよ？」
「え……？」
「何を惚けているんです？さっきのを見ていなかったんですか？貴方

が今足を踏み込んでいるのはそういった世界なんです。何かしらの決意も持たずに、居ていい場所じゃないんですよ」
　これは紛れもない私の本音だ。まだ年端も行かない子供が闘いに関与する必要などないのだ。
「……嫌です」
「なんですって？」
「嫌って言ったんです！私、ユーノ君と約束したんです！どんなに危険でも絶対に辞めません!!!」
「……」
　そう叫んだなのは嬢の目はやり遂げるという意志に満ち溢れていた。こういった目をする者には何を言っても無駄だ。
「ハァ……偶にいるんですよね、こういう人の好意を無下にする子が」
「え、えっと……」
「良いですよ、そこまで言うのならもう止めません。……但し、普段通りの生活を送れなくなることを覚悟しておく事です」
　そう言ってなのは嬢に背を向け、そのまま雷化してその場を去る。
……しかしあのフェレットがなのは嬢に魔法の力をもたらしたのか。何にせよ、これでなのは嬢も何の為に闘うか改めて考えるだろう。ロストロギアのサンプルも手に入ったことだし万々歳だな。

第10話

フェイト嬢を伸して、なのは嬢に認識の甘さを伝えてた日から数日たった。特筆することと言えば、何でも紫耀達がなのは嬢に自分も魔導師ということを打ち明けたらしく、四人と一匹でせっせとジュエルシードを集めているらしい。話によるとジュエルシードは全部で21個。その内の9個をなのは嬢チーム、5個をフェイト嬢、一個を私が所持している。あと6個は未だに見つかっていないらしい。なんともまあ大変な事だ。

私がジュエルシードを持っているのは紫耀達にも伝えてないので、第三者がジュエルシードを集めていると思っているらしい。なのは嬢から聞いた状況からエイヴィヒカイトに似た術式と判断したようで私に相談してきたが、誤魔化しておいた。唯一私が姿を変化させているのを見ている紫耀に対しては【記憶を喰らって】そのことを忘れさせた。奴が覚えているのは『私がフェイト嬢に会いに行こうとした事』だけだ……改竄がバレたら面倒くさそうだ。バレる訳がないがな。

それと紫耀達がなのは嬢に魔導師ということを打ち明けたのと前後して、件の時空管理局とやらが地球に来たらしい。私のスタンスは『魔法については何も知らない裏の人間』なので、管理局の連中とは出会っていないが紫耀達から情報は仕入れている。

何でも14歳の少年が実働部隊の指揮を取ってるとかなんとか。……次にジュエルシード関連の事件が起こったら管理局と接触するとしようか。無論、黒円卓のメンバーとしてだがな。

私の周りに関してはこの程度だな。そのように周りが若干慌ただしくなっているが、私にはあまり関係無い。現在私は異空間内に存在する自分のラボでジュエルシードの分析を行っている。あまり目新しい発見は無かったが、魔導師が使う魔力の性質等は解ったので、それを封じ込める機械を開発する傍らで私の専用機体である、【アストラルセイヴァー】の整備もおこなっていた。

アストラルセイヴァー。科学が発展し、人型兵器が闊歩する世界で

創り出された私だけの機体。正式な機体番号は存在しないが、一応シャドウミラーが所有していたアシュセイヴァー系列になる機体だ。とは言っても全高がアシュセイヴァー系列が２０ｍほどに対して、アストラルセイヴァーは４０ｍ越え。所謂【特機】サイズの代物だ。『向こう側』の技術と『こちら側』の技術を結集させたもので、動力炉は最新式のブラックホールエンジンと『向こう側』のトロニウムを使用したトロニウムエンジンの複合型。補助動力としてＴＥアブゾーバーも積んでいる。

武装もシャドウミラー系列のものから、ツェントル・プロジェクトのものまで取り揃えている。他にも様々な機能を積んであるが、割愛する。この異空間には整備スタッフとして、レモンから教わった技術を使い、量産型Ｗシリーズが存在している。本来この異空間、私以外の生命は滞在出来ないのだが、Ｗシリーズは別だった。まあ人手不足で悩む必要もないから助かっているが。整備に使う素材も【ホワイトスター】にあったキブツを利用している為不足するということはない。

……と、本題から逸れてしまったかな？

まあ現在開発している対魔導師用の機械……仮にＡｎｔｉ　Ｍａｇｉｒｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ、略してＡＭＳとでもしようか。管理局との邂逅の時に脅しの意味で使ってやるとするか。これに関しては試作機は完成済み、効力もジュエルシードを暴走しない程度に稼働させて魔力を抑え込んでいるのを確認している。後は携行可能なサイズにまで小さくするだけだが……この空間で２日もあれば出来るだろう。この空間、時の流れが非常に緩やかでここでの１日過ごしたとしても外では１０分程度しか経過しない。研究するには最適な環境ではあるが、元々武闘派であるためにあまり活用していない。どちらかというと、この研究所から離れたところにある演習場でのカールから贈られてくる代物の習熟のために使っていることが多いな。

とは言いつつもここ最近は研究機材フル稼働だがな。

ガイアメモリもバイラルコアやシグナルバイクも自身で調整出来

るようにしなければのちのち面倒になるからな。では、管理局とやらが本格的に動き出す前にＡＭＳ、ガイアメモリ、バイラルコア、シグナルバイクの調整を済ませるとしよう。

〈メイドインヘヴン!!トキハカソクスル!!!!

時間が加速する感覚がしたが無視する。……俗に言う気にしたら負け、と言う奴だ。

現在は調整を始めた日から現実世界で２日ほど経過している。この異空間では、２８８日つまりはほぼ1年近く経過している。元々想定していた諸々の調整は１００日程度で済んでしまったので、残りの日にちは五大ギアとバイク、アストラルセイヴァーの調整をしていた。

何故このようなことを話し始めたかと言うと、紫耀から連絡があったのだ。何でもフェイト嬢が残りのジュエルシードが残っていると思わしき地点で、強引に暴走させようとしているらしい。私にそれを止める為の手伝いを要請してきたのだが、今研究で手が離せないから向かえないと嘘をついて断ったが、また変装して向かうとする。

とはいえ、模倣する人物も限られて来るのだ。

ベイ、マレウスは紫耀に私だとバレる可能性がある為除外。ベアトリスも海の上では効率よく無効化するのが手間取りそうなので駄目だ。三騎士は強過ぎる、リザ、シュピーネは少々弱い。ゲオルギウスやヴァレリアは今回のケースではイマイチ役に立たない。こうなると、戒と螢くらいか?……戒の力を借りるとするか。脅す、という点ではマキナ並に効果的だろう。

空を飛ぶ術(すべ)も心得ているので問題は無い。

……では、向かうとしよう。

異空間を出てすぐ、外の竜巻が発生している地点へと向かう。私の

姿は既に櫻井戒と同じものになっている。顔の部分に黒色のバイザーを付けて、念の為顔を隠してはいるがな。
「……あれは紫耀かな？上手いことフェイトちゃんたちを庇いながら立ち回っているね」
恐らくフェイト嬢はジュエルシードを暴走させた時に魔力を殆ど使ってしまったのか飛行すらおぼついていない。そんなフェイト嬢を守るようにあの狼の人型が飛んでいるが、どう見ても近接型にしか見えない。そんな彼女がフェイト嬢を守りきるのは難しいだろう、事実幾つか迎撃漏らしがフェイト嬢を襲うが、それを全て紫耀が竜巻に対処しながら迎撃している。それも居合で魔力を飛ばしているのだから、よほど居合に自信があるのだろう。
ローザ・シャルラハロートや灰群蒼児はなのは嬢と黒服の少年と連携して竜巻に対処している。……あの黒服の少年が紫耀の言っていた、管理局の実働部隊の指揮を取っている少年なのだろう。随分と真面目そうな顔をしている。あの顔は融通の効かない堅物の顔だな。
「おっと、何時までぼーっとしてないで僕も手伝うとするかな」
そう呟きつつ、エイヴィヒカイトの位階を形成位階へとあげる。そうして現れるのは櫻井戒の身長に匹敵する大きさの漆黒の大剣。銘を
【黒円卓の聖槍（ヴェヴェルスブルグ・ロンギヌス）】
黒円卓首領であるラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ卿の聖遺物である
【聖約・運命の神槍（ロンギヌスランゼ・テスタメント）】を模して、櫻井戒の祖父である櫻井武蔵によって創り出された擬似的な聖遺物。櫻井一族に伝わる、所持者によって形状を変える特殊な金属で創られているこれは櫻井一族にある呪いをもたらすが、私の模倣には関係がない為割愛するが。ともかくそれを振るい、こちらに向かってきた雷撃をかき消す。
「ッ!!?誰だテメェは!!!」
「君に答える必要があるとは思えないが……まあいいだろう。僕は古代遺産管理・調査部隊、聖槍十三騎士団黒円卓第二位、櫻井戒。仲間からは専ら

【死を喰らうもの(トバルカイン)】と呼ばれている。……そこの少女達には聞き覚えがある組織だろう？先日はベアトリス……いや戦乙女(ヴァルキュリア)が世話になったからね」
「「「!!!??!」」」
仮染!めの名を名乗ると、その場に居た全員が反応する。……まあなのは嬢と容易く倒した奴と同じ組織に所属している人物が現れたらそれは驚くか。
「その黒円卓の一員が何のようだ……よっ!!」
「……この竜巻が先日確保した物と同じ波動を放っていたからね、様子を見に来たと言う訳だ」
「ああそうかよ!!ならとっとと失せろ!!邪魔だ!!!!」
「別にそれでも構わないんだが……ここで何もしないで去るというのもどうかと思うし、手伝うことにするよ」
「はぁ……!!?」
先程から私と会話を繰り広げていた紫耀の素っ頓狂な声を無視して、全力で黒円卓の聖槍を振るう。エイヴィヒカイトにより強化された膂力で振るわれたことにより発生する剣圧は衝撃波に近しいものとなり、竜巻を半ば程吹き飛ばした。それにより、竜巻を生み出していたジュエルシードが露出する。
「なっ……!!?」
「何を惚けているんだ？さっさとあの石を封印したらどうだい？」
「……チッ！言われなくても解ってるよ!!ローザ!!なのは嬢ちゃん!!合わせろ!!」
「は、はい!!」
「勿論ですわ!!」
紫耀が声を掛け、三人が一斉に封印術式が組み込まれた魔法を放つ。なのは嬢は杖の先端からの収束砲撃、ローザ・シャルラハロートは手にっている剣に魔力を集めそれを放ち、紫耀は居合の形で魔力を凝縮したもの、魔力刃とでも呼称しようか。それをジュエルシードに向かって放つ。……ローザ・シャルラハロートのあれはどう見ても約束された勝利(エクスカリバー)の剣にしか見えないのだが……気にしないでおく

か。
　何にせよ、無事にジュエルシードを全て封印出来たので良しとしようか。
「うし、ジュエルシードはこれでオッケーだな。問題は……櫻井戒だったか？テメェは」
「何かな？僕としてはこの場でやるべきことは総て済ませたから、帰るつもりなんだが」
「そんな訳にはいかない!!君達の組織に有るジュエルシードをこちらに渡してもらう!!」
　紫耀と私の会話に黒服の少年が割り込んでくる。……さあて、時空管理局とやらの執務官のお手並み拝見と行こうか。
「何だ？君は。彼女達にしてもそうだが、子供が戦場に出て来るなんて、どういう教育を受けているのやら」
「僕は時空管理局所属、執務官クロノ・ハラウオンだ。そして僕は自分の意志で此処にいる!!馬鹿にするのは止めろ!!」
「おや、それは済まないね。それで？時空管理局だったかな？それはこの世界に関係のある組織なのかな？生憎と僕は聞いたことが無いのだが？」
「……確かに管理局はこの世界には関わりが無かった。だが!!魔法絡みの事件が発生した以上、これは管理局の問題だ!!」
　成程、成程。まさに餓鬼の言い分だな。自分達が使っている技術が使われている事件が発生したらそこはもう自分達の法が適用する世界だと？
「……巫山戯ているのか？君は」
「なっ!!?
!!」
「この世界はずっと以前から、僕たちが守っている。君……いや、貴様等程度の力しか持たない屑共が口を出そうなどと、調子にのるな……!!」
　まあ嘘だが。だが勝手に来てこれは管理局の仕事だから介入してくるな、と言うのは傲慢に過ぎるというものだ。
「なら貴方も公務執行妨害で確保させてもらう!!」

そう叫ぶなり、少年が魔力で出来た砲弾をこちらへと飛ばしてくる。防御してやってもいいのだが、この少年には抗い難い絶望というものを体感してもらうとしよう。
私は何もせずに棒立ちのまま、彼の魔力弾を受ける。すると、その魔力弾は拘束具となって私の身体を縛り上げる。
「そのまま大人しくしといてもらおう!!」
少年はそう私に言い放ち、何処かに通信をし出す。……詰めの甘いことだな。
折角だ。この隙を利用させて貰うとしよう。

血の道と血の道とその血の道返し畏み給おう。
禍災に悩むこの病毒を、
この加持にて今吹き払う呪いの神風。
橘の小戸の禊を始めにて、
今も清むる吾が身なりけり。
千早振る神の御末の吾ならば、
祈りの叶わぬは無し。

「だ、駄目……!その詠唱を完成させちゃ!!」
なのは嬢から少年に注意が飛ぶが、もう遅い。
創造―
許許太久禍穢速佐須良比給千座置座（ここたくのわざわいめしてはやさすらいたまえちくらのおきくら）
櫻井戒の「大切な人（ベアトリスと螢）の穢れを引き受ける者になりたい」という渇望のルールを具現化した求道型の創造。能力は『自身を腐食毒そのものへと変化させる』こと。この力により、私の身体を縛っている拘束具は腐り落ちる。
「何……ッ!?!!僕の魔法が!?」
「遅い」
「……ッア!!!??!!」
少年が驚いている隙に、少年へと迫り、腹部に蹴りを入れる。
……少々感触が可笑しかったが、少なくとも確実に骨を砕いた。

……やはり、人に対しての攻撃はエイヴィヒカイトの効力が落ちるな。本来なら血袋のようになっていないとおかしいのに原形を留めている時点で異常だ。

私を放浪させている上位のモノの意志なのかもしれんが、無用な殺しをせずに済むから助かると言えば助かるが。

「……この程度の攻撃も躱せないのに、一体何を成せるというんだ？此処にいるのが僕であることに感謝するといい。マキナやザミエル卿であれば、跡形も無く消滅させられていたからね」

「な、何を……？」

「解らないかい？なら簡潔に教えてやる。この世界に介入するつもりなら、せめて僕くらいは圧倒してくれ。でなければ、三騎士の方々の怒りを買ってしまう……と言っても、もう遅いと思うが」

「何……だと……？」

「あれだけ無作為にこの世界に近付いて我々が気付かないとでも思ったのか？その時点で君達は彼等の不興を買っている。その上、このように我が物顔で僕達の領域を侵しているのだから始末に負えない」

敢えて大仰なリアクションを取る。顔は仮面で隠しているから相手にはこちらの顔色を窺う事はできないからな。動作で表わしてやるしかない。

「……と、意味のない事を話している時間は無いんだった。では、僕はこれで失礼するよ。管理局とか言う巫山戯た組織の方々は、出来れば早急にこの世界から去ることをオススメするよ」

死にたくなければね。と言い残し、この場を去る。今回の私の介入はここまでだ。これに懲りずにまだ介入してくる様なら……その時は赤騎士（ルベド）、黒騎士（ニグレド）、白騎士（アルベド）のフルコースをご馳走してやることにしよう。

第11話

管理局への牽制という名の脅しをしてから数日。
私は紫耀に捕まっていた。場所は翠屋とはまた別の喫茶店。落ち着いた大人の雰囲気を感じるこの店は表通りから外れた場所にあるため、人に聞かせられないような話をするにはうってつけの場所だ。こんな場所を紫耀が知っていたのいうのに、少々驚いたのは秘密だ。
「……ったく、マジで何なんだあの軍服野郎！ローザの話によりゃあの軍服、ドイツのゲシュタポで使われてたやつと瓜二つだとか言ってやがったし……」
「わかったわかった。その話もう六度目になるぞ？いい加減今回の件の顛末を教えろ」
「あ？ワリィな、どうしても収まんなくてよー……ったく何で日本人がドイツの軍服着てんだよ」
そう、もう既にジュエルシードを巡る事件は終結している。執務官の少年を蹴り飛ばした際に取り付けたナノマシンサイズの盗聴器から逐一情報は得ていた。関わらなかった間になのは嬢とフェイト嬢のジュエルシードを賭けた決闘があったのだが、それはこっそり結界内に侵入して観戦させてもらった。余りにも良い勝負だったので思わず6台もの超高性能ビデオカメラを使ってあらゆる角度から撮影してしまった。
この行為が犯罪者のそれだと気付いたのがビデオを編集し終わった時だった。捨てるのも勿体無いので、今度カールに頼んでハイドリヒに送ってやろう。奴もこういう強い意志がぶつかり合うものは好きだった筈だ。
にしても彼女達は末恐ろしいな。フェイト嬢はベアトリスに扮した私が見せた雷速機動を再現しているし、彼女が私に放ったフォトンランサー・ファランクスを改良したと思われるフォトンランサー・ジェノサイド・ファランクス等という技を使っていた。１０２４発から、３０７２発に変わっていたのに加え、一発ごとの威力も増大しているのだから驚いたものだ。流石にあれは私にもダメージが入ると

思わせる代物へと変貌を遂げていた。
だが、なのは嬢はそれを防ぎ切った挙句、周辺に漂う魔力を収束させた砲撃、スターライトブレイカーとやらを放っていた。それだけで終わればまだ良かったものを、そこから更に周辺魔力を収束、それをデバイスの先端に凝縮させて刀身を形成、そしてそれでフェイト嬢に切りかかるという技まで披露していた。
刀身の形状が、黒円卓の聖槍に非常に酷似していたことから、戒に扮した私に多少なりとも影響を受けたようだ。……正直あれは私でさえ鳥肌がたった。スターライトブレイカーの時点でボロボロになっていたフェイト嬢にスターライト……長いな、ＳＬＢでいいか。それとほぼ同じ量の魔力を収束させた一閃を喰らわせるとは……戦闘民族ＴＡＫＡＭＡＣＨＩの血は彼女にも引き継がれているということなのだろう。もしこれから先、彼女達と戦うことがあるなら開幕の一撃で沈めるのが吉だな。見たところ、彼女達はまだまだ潜在能力を秘めている。これからの成長が楽しみでもあり恐ろしくもある。
「……おい蓮夜。ちゃんと聞いてんのか？」
「聞いているよ。なのは嬢とフェイトと言う少女が決闘したんだろう？」
「……ちゃんと聞いてんなら構わねぇけどよ」
そう言って紫耀は語りを再開するが、全部知っているので聞き流す。どの部分を語っているかだけ聞き逃さなければ問題はない。
今回のジュエルシードを巡る事件は結局１人の女性が原因だったようだ。
【プレシア・テスタロッサ】
フェイト嬢の母親に当たる人物で研究者でもあった彼女はジュエルシードを使って１人娘である
【アリシア・テスタロッサ】の蘇生を行おうとしたらしい。上記の説明と食い違う点が有るかもしれないが、それについては今から説明する。
事の始まりはプレシア・テスタロッサが【アレクトロ社】という会社に在籍していた頃にまで遡る。この頃の彼女は会社の上層部によ

る無理かつ無謀な指令に追われるうち、上層部が強行した実験による事故でアリシア・テスタロッサを失う。
その後【F計画】と呼ばれる人造生物を創り出すプロジェクトに参加し、そのノウハウを学ぶ。
そして彼女に『アリシアの代わり』として創り出されたのがフェイト嬢。つまり彼女はクローン人間となる。だが、フェイト嬢はアリシア・テスタロッサとは人格等が異なっていたため、プレシア・テスタロッサにはフェイト嬢が自分の娘だと受け入れることが出来なかったようだ。
それ故にジュエルシードという人の手に余る代物を使ってまでアリシア・テスタロッサを蘇生させようとした。
プレシア・テスタロッサにしてみれば、失ったものを取り戻そうとしただけ。だが、手段を選ばなかった故に彼女は犯罪者となってしまった。その彼女も最期は管理局に追い詰められて、次元の狭間に存在する
【虚数空間】にアリシア・テスタロッサと共に落ちていった。
何故私がここまで裏事情に詳しいのかと言うと、先程説明した通り、執務官の少年に盗聴器を取り付けている。ナノサイズである以上肉眼では捉えられない為に座標を知らせるシステムも組み込んである。その座標を頼りにして管理局の船に潜入、後は手頃な端末を探して管理局のデータベースにハッキング。その結果、山程の汚職、事件隠蔽、挙句の果てには犯罪幇助までキッチリデータが残っていた。次、管理局の連中が来たら三騎士の武力制圧の後にこのデータを突き付けてやることにしよう。……ククッ。そのときが愉しみで仕方がない。

「……とまあこんな感じで今回の事件は解決ってとこだな」
「ああ、態々すまんな。特に手伝いもしていないのに説明などさせて」
「ああ、気にすんなって。こっちも愚痴に付き合ってもらったからな。お互い様だ」
「……そう言ってもらえるとありがたいよ」

実質今回の事件で私がした事と言えば、黒円卓の連中に変装して余計な茶々を入れたことと、管理局の裏データを根こそぎ奪った程度だ。……言葉にして纏めると本当に酷いな。
「てか蓮夜よ～お前本当に聖槍十三騎士団とか言う連中について心当たりねぇの？」
「ふむ……聖槍十三騎士団、ねぇ……？」
さて、なんと答えるべきだろうか。此処で余計な疑いを持たれても面倒だからな……黒円卓という組織についてだけ軽く説明すればいいか。
「その黒軍服連中かどうかは知らんが、古代遺産管理・調査部隊という組織は聞いたことがある」
「本当か!!!?」
「ああ。とはいえ、ここと別の世界での話だからこの世界の連中が同じかどうかまでは確証は持てんぞ？」
「それでも構わねぇ!!少しでも情報が欲しいんだ!!」
「……わかった。古代遺産管理・調査部隊、この組織は第二次世界大戦前にドイツで作られた組織だった。その当時はただのオカルトに関係ありそうな物を収集するだけの組織だったのだが、世界大戦が激化する中で本当に古代遺産……つまりは聖遺物を見つけ出した」
「……それって、確かエイヴィヒカイトを発動させる為に必要なもんじゃ無かったか？」
「ああ、まあ聖遺物(それ)単体なら問題は無かったんだが、それと時を同じくしてドイツに一人の魔術師が現れた。その当時は【カール・クラフト】と名乗っていたかな？まあその辺はどうでもいいとして、そいつがエイヴィヒカイトを生み出した張本人だった」
「……そんで？」
「エイヴィヒカイトを修得した集団が生まれた。彼等は聖槍十三騎士団と名乗り始め、暗躍し出した……らしい」
「らしい!!!?何で一番大事なとこがあやふや何だよ！」
「仕方あるまい。実際にその当時私はそこにいなかったのだから」
「ぐっ……!!!ならしゃあねぇか……」

「まあ私が知っているのはそのくらいだ。この世界でも同じ存在になっているかは知らんが、一応可能性として頭に入れておくといい」
全部ホラ話だがな。まあ警戒を怠っていれば、死なない程度にぶちのめしてやるとしよう。
「……そう言えば紫耀。お前達管理局とはどのような関係になったのだ？今回は只の協力関係だったのだろう？」
「ああ、それ？一応、委託魔導師扱いになってる。これは高町の嬢ちゃんも一緒だ」
「何だ、管理局には入らなかったのか？」
「あんなブラック組織誰が入るかよ。高町の嬢ちゃんは知らねぇけどよ～」
「あと、フェイト・テスタロッサは保護観察だったか？」
「まあ犯罪行為に手を染めてたのは事実だからな～リンディ提督が代理保護者になるらしいから問題無いとは思うぜ？」
ふむ、関わった者は皆収まるべきところに収まったようだな。
「成程。ということはこの件は一先ず解決ということか？」
「聖槍十三騎士団の連中がしゃしゃり出て来なかったら、だけどな」
「それならば問題あるまい。聞いた話による推測に過ぎんが、彼等は古代遺産と呼ばれるもの、この世界でいえばロストロギアと呼ばれる代物が出てこん限りかち合う事は無いだろう」
「……ホントか～？」
「買い物の帰りに鉢合わせすることはあるかも知れんな」
「ゲッ!!?マジかよ!!?」
「あくまで可能性に過ぎんよ。そう嫌そうな顔をするな」
冗談半分で言ったのに本気で嫌そうな顔をしてきた。……嫌がらせでベイにでもなって会いに行ってやろうか？まあ冗談だが。
一先ずこのジュエルシードを巡る事件は終わりを迎えたということで良いだろう。紫耀曰く次に起こる事件は今回の事件より危険度が高いらしいので、私が表立って動く必要が有るかも知れんな。

第12話

紫耀の愚痴兼事件についての報告を受けた帰り、ディアブロッサ・カスタムに跨り、ホテルへと帰る途中、奇妙な感覚に襲われる。何処かで感じたことがあるのだが……それが何時のものだったか、いまいち確証が持てない。

私はバイクを道の脇に止めて、辺りを警戒する。そこで始めて街の異常さに気付く。まだ16時頃の大通りだというのに人の気配を感じないのだ。『まるで私の周りの空間だけ別の位相にずらされた』としか形容出来そうに無い現象にようやく私の記憶が照合を終わらせる。……成程、直ぐにはわからないはずだ。

「相変わらず、回りくどい手段が好きだなカール？」

「仕方あるまい。生憎私はこういった手法しか知らんのだから」

暗がりから現れたのは、ぼろ布を身に纏った浮世離れした雰囲気を漂わせている人物。彼は様々な名を持っているが、一番私に馴染みのある名を挙げるなら、

【カール・クラフト】という名になる。

私にエイヴィヒカイトを与え、かつ友となった、一番付き合いの長い人物でもある。

「それを止めればもう少し彼女にも受け入れられるだろうに……まあ何にせよ、直接会うのは久しぶりだな、カール」

「ああ　、久しぶりだな友よ。最後に会ったのは、数万年程前だったかな？お前から知らされた我が女神の治世を脅かす因子を根こそぎ撲滅した時以来だったと思うが」

「ああ、あれは面倒だったな……」

第六天、天狗道の因子を一欠片すら残さぬ勢いで殲滅していくカールに付き合うのは骨が折れた。因子を持つモノ全て超新星爆発で対処しようとするのだから、後始末が本当に面倒だった。

「それで？態々私を訪ねてくるとはどういう心境の変化だ？今までは『女神を追い掛けるのに忙しい』等とほざいていただろうに」

「何、そうたいした事では無いよ。何時もの様に愛しの女神を見守っ

ていたら、我が愚息の怒りに触れてしまってね。本気で首を落とされそうになったので、ほとぼりが冷めるまでの間、座を離れることにしたのだよ。そこでお前のことを思い出してね、顔を見に来たというわけだ」
「……いつも通りで、ある意味安心したよ」
「まあそれは本当のことだが、もう一つお前に関する用事があるのだよ」
「私に……？一体なんだというんだ？」
「そこまで深刻な話ではない……お前の抱える問題を解決する術（すべ）を見つけたのでな、その報告にきたのだよ」
「何だと……!?」
　この永劫の放浪を終わらせることが出来るというのか!!……いやいや、落ち着け。興奮していてもいいことなどひとつもない。
「そうか……感謝するよ、カール」
「別に礼は要らんよ、一応現段階ではあくまで方法を見つけたに過ぎん。それを実行するにはまだ準備が必要なのでな……おそらくこの世界のクリスマス辺りには準備が整うだろう」
「わかった……しかし、まさかお前が私の抱える問題について考えていたとは、まさに驚天動地という物だな」
「そうかね？これでも色々大変なのだぞ？私も」
「その大半は自業自得だろうに」
　本当に裏で動き過ぎるから、周りに厄介者扱いされるというのに……まあそれこそがこいつを象徴すると言ってもいいがな。
「では、私はこれで失礼するよ。あまり長い間こうして位相をずらすのも手間なのでな」
「そうか……ああ、そうだ。これをラインハルトに渡しておいてくれ。この世界で起こった魂のぶつかり合いを記録したものだ。あいつもきっと目を惹かれるだろう」
　そう言って渡すのは、先日編集し終えたなのは嬢と、フェイト嬢の決闘を収めたディスク。元々渡すつもりだったので、丁度良かった。
「ふむ、確かに……ではこれにて失礼するよ、我が友」

「ああ、また会おう。我が友よ」
別れの言葉を交わすと同時、カールが現れた時と同じように音も立てずに消える。それと時を同じくして空間のズレも無くなり、一気に騒がしくなった。
「やれやれ、予想だにしていなかったが、良い話が聞けた。クリスマス……あと半年程か。紫耀が言っていた二回目の危機とやらがそれまでに起これば、憂いなくその時を迎えられるのだがな」
そう呟き、改めてバイクに跨りエンジンを掛ける。
そうして考えるのは万が一、カールの言っていた準備とその危機が重なってしまった場合だ。
そうなった場合、カールには申し訳ないが少し待ってもらうしかないだろう。今回の一件を見る限り、私は必要無さそうだが、私が不用意に介入した事による歪みが現れないとも限らない。
「どちらにしろ、最後になるかもしれんのだ。放置する気にもなれんしな」
呟きつつ、ホテルへとバイクを走らせる。未来のことを考えていても拉致が明かない。いつも通りの日々を過ごしていくとしよう。

第13話

毎度のことになって来たが、また時は流れて今は八月上旬……今私は海に来ている。いきなり何を言っているんだと思うだろうが、まずは私の話を聞いて欲しい。

事の起こりは一週間程前になる。いつも通り翠屋でアルバイトに励んでいた私に高町夫妻が、前回温泉街に行った集まりで海に行かないかと聞いてきたのだ。

今回は断るつもりだったのだが、紫耀が勝手に私を参加すると高町夫妻に既に言っていて、もうホテルまで手配してしまっているとの事。

流石にそこまでお膳立てされていては断るのも失礼な為、やむなく参加を決めた。……後日紫耀には痛い目にあってもらうとしよう。

で、結局前回と同様にサイドバッシャーでここまで来た訳なのだが……敢えて言おう。場違い感が半端ではない。なのは嬢達、小学生組は無邪気に海を楽しんでおり、高町夫妻、恭弥と忍、そして灰群蒼児となのは嬢の姉である高町美由希は桃色空間を展開している。……前2組はまだ分かるが、灰群蒼児と高町美由希がそういう関係だとは正直意外だった。高町美由希はまだしも、灰群蒼児はそういったことに興味が無いと思っていたのだが……まあ見る限り高町美由希が一方的に甘えているだけの様だがな。

残りの紫耀とローザ・シャルラハロートはというと……

「紫耀……好い加減覚悟を決めて貰いますわよ？」

「だ・か・ら！断るって言ってんだろうがああ!!」

あっちの砂浜でラブコメを繰り広げている。

ローザ・シャルラハロートの手にはサンオイルらしきものを手に持って紫耀を追い回している。

つまり今、この場で独り身なのは私のみという事になる。……帰っていいだろうか？

「しかし……こういった空気も偶には悪くはない、か」

ついこの間まで闘っていた者達が、こうして日常に違和感無く戻れるというのは感心する。……まあ命を奪われる心配が無かったからかもしれないがな。
「……なのは嬢達が危険なことをしないように見張っておくとしようかね」
高町夫妻や恭弥達がそういったものを見逃すことは無いとは思うが、念のためだ。

そんなこんなで時は過ぎ、時刻は夕刻。既に皆ホテルへと戻って来ている。子供組は女性陣に任せ、男性陣は私に宛てがわれた部屋に集まっている。しかもこっそり持ってきていたのか、紫耀は酒まで持って来た。
まさかこいつここで飲む気か……？
「しかしあれだな。私は灰群蒼児が美由希嬢と親しい間柄だとは知らなかったな」
「何だと!!?」
「……うっさい、高町親子。別にそんな関係じゃない……高校の後輩だし、偶に相談に乗ったり、勉強教えたりしてただけだよ。他意はないっての」
「…美由希の嬢ちゃんはお前のこと気にしてたぜぇ？ありゃ脈アリだと俺は見たね」
紫耀がニヤニヤしながら灰群蒼児に絡んでいる。……ほんのり顔が赤くなっているところを見るに、既に酔っているなこいつ。そして高町親子よ、親馬鹿、妹馬鹿も程々にしたまえよ……
「蒼児君……美由希と付き合う男の最低条件は僕を倒すことなのであしからず」
「そして父さんに挑むには俺を倒してからだ」
「いい加減にしろよ家族馬鹿どもが……！僕にその気は無いって言ってんだろ!!?」
「うちの娘（妹）に魅力が無いというのか貴様!!!」

「そんなこと一言も言ってねぇぇぇぇぇ!!!???」
……よくよく見れば、士郎殿と恭弥も顔が赤くなっているし、手に持っているのはビール缶だ。
「……話を振った私が言うのもなんだが、頑張りたまえ」
「あんたが原因何だから助けろよ!!!?」
「私が自分に課している信念の一つに『質の悪い酔い方をする者に関わらない』というものがある。よって、それに従い私は彼等に関わらない。何、これも社会勉強だと思えばそこまで苦にはならんさ」
「巫山戯んなてめぇぇぇぇぇぇ!!!」
灰群蒼児の腹の底からの絶叫には耳を貸さずに、何時の間にか少し離れたところに移動していた紫耀の横へ移動する。
「……貴様も質が悪いな、紫耀。こういう事態になるのが分かっていて私の話に乗ったな?」
「まっさかー、そんな訳ねぇだろー」
「ニヤニヤ笑いながら棒読みで言われても、説得力皆無なんだが」
私の視線の先では、灰群蒼児がじりじりと近付いてくる高町親子から距離を取ろうとしているが、高町親子は無駄に巧妙に距離を詰めていっている。この様子だとあと1、2分で捕まるだろう。
「……ああ、そうだ紫耀。貴様はどうなんだ?」
「はぁ?なんだよ急に」
「惚けるなよ。ローザ・シャルラハロートと随分といい雰囲気だったではないか」
「んな訳ねぇだろバーカ」
「いやいや、僕たちから見てもカップルみたいだったよ?」
「お前とシャルラハロートを見ていると、付き合い始めた当初の俺と忍を思い出したな」
「うおっ!!?あんたらいつの間に!!?」
さらっと会話に混ざってきたな、この二人。灰群蒼児の方を見てみると、顔を青くして倒れていた。横にビール缶が転がっているのを見るに無理矢理飲まされたな。可哀想だが、まあ放っておいても問題はない……と言うか、寝かせておいてやろう。その方が彼にとっても

幸せだろうな。
「なんだ紫耀、貴様ローザ・シャルラハロートと付き合っているのでは無いのかね？」
「付き合ってなんかねぇっての!!……大体、あいつあれでもドイツの貴族の生まれだぜ？絶対婚約者とか居るって」
そう言う紫耀の顔に僅かながら翳りが見える。
……おやおや？これはもしや？
すかさず高町親子にアイコンタクトをとる。
私の意図はきちんと通じたようで、頷いてくれた。
「……そんな訳無いだろ？結構前にローザに聞いたんだけど、あいつ日本に来るときに父親と揉めて、ほぼ勘当状態らしい。仮にそうじゃなかったとしてもあいつ末っ子らしいからその辺は甘いって言ってたよ」
まさかの横で死んでいた蒼児が大きな援護となる言葉を放った。ゆらりとまるで亡霊のように立ち上がった彼の目には、同じ目にあわせてやろうという暗い感情が見え隠れしている。
「え、いやいやいやいや。あいつとは付き合い長えけどそんな話初耳なんだけど」
「僕くらいにしか話してないらしいからね。取り敢えずもう一回よく考えてみることを僕は勧めるよ」
「お、おう……」
気付いたら灰群蒼児の一人舞台となっていた。もう少し紫耀で遊びたかったが……まあいいだろう。それはまたの機会にするとしよう。
「……それじゃ、本題に入ろうか」
「ん？本題とは一体何のことだね？」
少なくともこの場で話すような話題に心当たりは無いのだが……
「は？この流れで話すことなんて一つしか無いだろ？……緋峰蓮夜。アンタのこれまでの女性関係、洗いざらい喋って貰うよ」
「……本気かね？」

「当然」
「ああ、それは俺も興味あるな。蓮夜は結構整った容姿だし、彼女の一人や二人はいた事あるだろう？」
「そうだな、後学のためにいっちょ頼むわ」
恭弥と紫耀も灰群蒼児に同調して、私に話させようとしてくる。
……士郎殿も場の空気を壊さない為か、口を挟む気は無いらしい。
「……別に私の恋愛経験なんぞ面白くもなんとも無いぞ？」
「それはこっちで判断する。アンタはただ、語ればいい」
「やれやれ……強情なことだな」
もう私には話さない、という選択肢はないようだし、素直に話すとしようか。
「まあ確かに私も幾度か女性とそういった関係になったことはあるさ」
「どんな人物だったか一人一人詳しく話してもらおうか……！」
「外見と性格だけだ。それ以上はプライバシーの侵害になる為、話さないぞ？」
「……チッ。まあ仕方ないか、それで良いからとっとと話せ」
「灰群蒼児……貴様どんどん遠慮なくなってきていないか？まあ別に構わんが」
……さて、語るにしても誰について語ろうか。幾度かと言ってしまっているから少なくとも3人は語らなければならないが……なるようになるだろう。
「ではまず一人目だが……容姿は金髪蒼眼、髪型はツインテールを巻き髪のような形ににしていた。誇り高く、自分にも他人にも厳格で、私も何度も彼女に叱られたものだ」
まだ私が放浪を始めたばかりの頃で、精神的に不安定になっていた時期に、私は彼女に支えられていたのだ。……まったく、改めて思い起こすと彼女には頭が上がらんな。カールの術が成功したら、彼女に会いにいかねばならぬな。あの時はなし崩し的に別れてしまったのだ。殴られる覚悟をしておかねばな。
「……へぇ、アンタでもそんな顔するんだ？」

「ん？そんな変な顔をしていたかね？」
「いやいや、スッゲェ良い顔してるぜ？そうだな……心底誇ってる感じがするぜ？」
紫耀が軽く笑いながら、語りかけてくる。……そんな顔をしていたのか、私は。
「ま、私にとって彼女はそれほどの存在というわけだ」
少々強引に話を切る。これ以上彼女について話していたら余計なことまで話してしまいそうだ。
「彼女の他には……そうだな。容姿は銀髪金眼、西洋人形の如き美貌を持ち合わせていながらも、常識が欠如していた。彼女は純粋ではあるが、子供のような好奇心も持ち合わせていた。そして何より、強かった。……ああ、強かったとも」
「お、おい大丈夫か？蓮夜。目が死んでいるぞ…？」
「気にするな……少々苦い記憶が想起されただけだ」
思わずあの時の悪夢を思い出してしまった。忘れることが出来ない我が身だが、『思い出せなく』することは一応可能なのだ。でなければ幾度となくトラウマに苛まれることになるのでな。
「ま、私の女性関係はこのあたりでいいだろう。これ以上語ることはない」
「……ま、珍しいものも見れたからこれで勘弁して上げるよ。……でも最後にひとつだけ聞かせてよ」
「なんだね？答えられることなら答えよう」
「……その女性（ひと）たちは今どうしてるんだ？」
「――――」
その質問に一瞬、意識に空白が生まれる。まさか、そんな質問をされるとは思っていなかった。だが、それに関して私が言えることは唯一つ。
「それぞれ、自分の道を歩んでいるさ。……私は、そう信じている」
「……そ。ならいいや」
私の返事で納得したのか、灰群蒼児は興味なさげな返事を返しただけだった。

「さて、恋愛話はこのあたりで良いだろう。確かそろそろ夕食の時間ではないかね？」
「本当だね、じゃあ女性陣と合流しようか」
士郎殿の声により、全員が一斉に立ち上がる。

これより後は、特に面白い出来事も無かったので割愛させてもらうとしよう。
こうして、私の夏季休暇は消費されていくのであった。

第14話

先日の海水浴から1週間。現在私は海鳴市の外れにある山に佇んでいる。私の眼前にはデバイスをこちらへと向けている紫耀達三人の姿がある。私も、まだ武器を具現化してはいないものの、既に形成位階にまでエイヴィヒカイトの位階を上げている。

……何故こんな事をしているのかというと、海水浴の時のストレス発散だ。紫耀を呼んだ時に他の二人も一緒にいた為、強制連行させてもらった。

「どうした？貴様等の決意とやらはこの程度の障害で諦められる陳腐なものなのかね？そうではないと言うのならさっさと掛かってきたまえ」

「……て、めぇぇぇぇ!!!!!!」

そう叫ぶなり紫耀がこちらに突っ込んでくる。その勢いは、常人には出せない領域ではあるが、エイヴィヒカイトを習得している者にとっては少し速い程度でしかない。

「遅い」

「がっ……はッ!!?」

紫耀が居合刀を引き抜こうとした瞬間、彼の懐に入り込み、腹部に掌底をぶつける。紫耀の出せる全力に近い速度で突っ込んで来たところにカウンター気味に放たれたそれは、痛みに慣れているであろう紫耀を悶絶させるほどの威力となって彼を襲った。

「紫耀!!?くっ、このッ!!」

「……ッ!!」

紫耀は後方へと吹き飛ぶ。ローザ・シャルラハロートはそれを追いつつも、牽制の為の魔力弾を放ってくる。そしてそれに乗じる形で灰群蒼児が背後から双剣を振るってくる。

「奇襲時に声を出さない点は評価出来るが、太刀筋が甘い。そんなものが私に通じるとでも？」

「……別に構わない。あくまで時間稼ぎが目的だから…ねっ!!!」

脅威に成り得ない魔力弾は無視して、灰群蒼児の対処にのみ意識を

向ける。右手は順手、左手は逆手に持ってこちらに剣を振るう彼には、紫耀とはまた違った強さが垣間見える。そしてもう一つ、彼の体裁きには何処か恭弥に通じる物がある。……もしや。
「灰群蒼児……貴様、御神の技を修得したのか？」
「まさか。見様見真似で動いてるだけだ…よッ!!」
「……本来それすら不可能な筈なのではないかな？」
縦横無尽、変幻自在に繰り出される剣戟。私でなければ、あっという間に倒してしまいそうな勢いではある、だがそれでも私には脅威に成り得ない。
……だが、時間稼ぎという点では非常に有効だ。
「蒼児!!離れなさい!!」
「オッ…ケー!!」
「何っ?!!」
灰群蒼児が目の前から消えた瞬間に現れる、光の塊。
これはローザ・シャルラハロートの技……!!流石にこれを素手で凌ぐのは不味い!!
「チィ……!!」
舌打ちを1つ打ちながら聖遺物を形成する。
――Ｙｅｔｚｉｒａｈ――
一族の悲願宿りし時計（エンスタフター・クルスニク）
その言葉によって生み出されるのは漆黒の槍。それにより魔力剣を打ち消す。
「それが、貴方の聖遺物ですか？」
「まあ間違ってはおらんが……違うよ。これは友の所有物だったものだ」
そう言いつつ、手にある槍を見る。触れたもの全てを滅ぼしてしまいかねない雰囲気を放ちながらも何処か生物的な造形のそれは、この聖遺物の元になった時計を操っていた男たちの魂を宿しているといっても過言ではない。
「しかし、私に武器を形成させるとは……少々君達を舐めていたかもしれんな」

「ケッ……随分とはっきり言ってくれるなぁオイ」
「仕方あるまい。本来エイヴィヒカイトを修得した者に対して、聖遺物を持たない者が傷を負わせることすら不可能なのだぞ？」
「じゃあ何でさっきのローザの攻撃は防いだんだよ」
「私も十全に理解しているとは言えないのだが、エイヴィヒカイトは世界によって効力が上下してしまうのだ。この世界でいえば、ある一定以上の魔力が込められた攻撃なら一応通る仕様になっている。……例を出すなら、なのは嬢の砲撃魔法クラスなら多少だが、ダメージは入る筈だ」
「成程ねぇ……いいこと聞いたぜ。村正!!カードリッジロード!!豪勢に全発持ってけ!!」
『椋解!!』
そう言うなり、紫耀は居合の構えを取る。そしてその鞘から薬莢が六発排出されると同時に、凄まじい魔力を紫耀から感じる。
「ワルキューレ、私達も行きますわよ!!」
『畏まりました、お嬢様!!』
「……シェルティス、カードリッジ」
ローザ・シャルラハロートと灰群蒼児も同様に魔力が跳ね上がる。
「ほう……それが奥の手かね？」
「ま、切り札の一つだ。とくと味わいな……七曜流が奥義…絶空!!」
「滅ぼせ閃光!!!シュテルリヒト・ブレイザー!!!」
「……零閃!!」
三者三様の魔力刃がこちらに迫ってくる。それに対し、こちらは槍の穂先を迫り来る魔力刃へと向ける。
「……破壊しろ、クルスニクの槍よ!!」
手に持つ槍から放たれる閃光。それに触れた魔力刃は全て跡形も無く消え去る。聖遺物、一族の悲願宿りし時計。数多の世界を破壊してきたそれに宿った力は当然の如く破壊の力。何もかもを破壊する槍の前では、例え魔力という非物質の前でも、容赦無くその効果を発揮する。
「なっ……!!?」

「嘘でしょう……!?」
「……わお」
　紫耀達は自分の切り札の一つが容易く無効化された事に驚きを隠せないようだ。
「ふむ。これ以上やっても進展は無さそうだ、ここまでにするとしよう」
「はっ!!まだ行けるっての!!」
「貴様はそうかもしれんが、後ろの二人がもうグロッキーなのでな。貴様一人でも相手になると言うのなら別に構わんが……創造まで使って瞬殺するぞ？」
「……チッ!!わーったよ」
　ようやく紫耀も納得したようで形成を解き、彼らへと近づく。
「しかし最後の技はなかなかに面白いかったな。凝縮した魔力を薬莢に詰め、それを使うことによる一時的なブーストか。多少博打の要素はあるものの、効果的ではある」
「それを軽々と無力化したテメェに言われても嬉しかねーよ!!」
「まあそう言うな。黒円卓の連中も私と同じように一撃で総てを終わらせるような奴が現れるかもしれんのだ。そう考えれば、良い経験になっただろう？」
「……ま、そりゃそうだけどよ。なんか釈然としねーんだよ」
　そう言いつつ、むくれる紫耀。餓鬼か貴様は。
「ま、これから定期的に鍛えてやろうと思うが……都合は合うかね？」
「僕は無理。そろそろ受験のスパートかけないといけないし」
「……せっかくの申し出を無下にする様で悪いんだが、俺とローザも無理だ。長期の護衛の仕事が入ってな、少なくとも冬になるまで海鳴を離れることになってるんだ」
「そうか、まあ私の暇潰しになるかと思っての提案だから気にすることはない」
　チッ、手頃な弄り相手が居なくなるのは勿体無い。
「そうかよ。俺とローザは明日にも出発する予定だから今のうちに伝えとくけど、次の事件が起こるのは恐らく十二月頃になると思う。俺

らもなるべく早く戻れるようにするつもりだが……いざという時は頼む。なのは嬢ちゃん達を守ってやってくれ」
　そう言いつつ紫耀が頭を下げる。……こいつ、彼女を思いやる気持ちの十分の一でもローザ・シャルラハロートに向けてやればいいものを……
「心配せんでも出来る限りのことはするさ。貴様は仕事に集中していろ」
「……ああ、助かるぜ」
　言葉を交わし、そのままこの場で解散する。
　……次は冬か。後半年程になる。それまでは、ドライバー等の調整と、管理局から抜き出した隠匿データでも整理するとするか。

第15話

紫耀達との模擬戦の翌日。私は海鳴市の図書館にて、データの整理をしている。

整理しているデータの内容は全てこの間管理局のデータベースから引っこ抜いてきた物だ。最深部のデータまで根こそぎ盗ってきたものだから、量がかなり膨大になっている為、こうして暇を見つけては整理、解析をしている。当初はラボで一気に解析してしまおうかとも思っていたが、十二月迄にある程度纏め終われば充分なので、ゆっくり進める事にした。

現在見ているのは、【闇の書】と呼称されているロストロギアが引き起こした事件を年表に起こしている。

この闇の書というロストロギア、他者から魔力を奪う事で力が解放されていく物らしく、更に吸収した魔力を持っていた魔導師の魔法も再現出来るらしい。

……地味に私に似ている気がしないでもないが、気の所為だろう。またこの魔道書、転生機能とやらがあるらしく、何代も持ち主が変わっていっているらしい。闇の書に関する一番最近の事件は11年前、この闇の書を護送していた艦隊の一隻が闇の書の防衛プログラムに取れ込まれ、やむなく船ごと闇の書を破壊する事になったらしい。

この事件での殉職者の名は【クライド・ハラウオン】

あの執務官の少年の父親だそうだ。この資料によれば、彼は乗船していた他の乗組員を全員避難させるも、自分は船と運命を共にしたとある。

「……随分と勇敢な御仁だったようだな、そしてあの少年はその遺志を引き継いでいるのか」

親孝行のつもりなのだろうか、健気な少年だ。

「まあだからと言って手加減等はしてやらんが」

それよりもこの闇の書についてが気になる。このロストロギアが記録に記されるようになってから記録から消えたロストロギアが

あったのだ。
【夜天の書】と呼ばれるそれは古代ベルカ時代に開発された魔道書で、守護騎士という四人のプログラム生命体を使い魔の様な形で使役できたそうだ。更にこの守護騎士というものは、闇の書にも搭載されているらしくこの2冊に関係性が有ることを指し示しているような気がしてならない。
　このような手軽に戦力となりうるロストロギアを管理局が手放すとは思えない。事実、この夜天の書が記録から消える直前の持ち主は管理局の高官だったらしい。……考えられる可能性として、その高官が夜天の書に手を加えて闇の書と呼ばれる物にしたか、あるいは夜天の書を真似て闇の書が作られたかのどちらかになると思うが、それを調べることは今の私には少々厳しいものがある為、またの機会にするとしよう。
「……データに残されている情報だけでも不正、隠蔽のオンパレード。これで自分達は世界を守っている等とほざけるのだから大したものだ」
　無論、高官連中の一部だけだとは思うがそれに付き合わされる下の人間はやってられないだろう。軽く目を通しただけでも数十名程の若い命が理不尽に消されていたのだから。
「……次に管理局の連中が来たらこのデータを見せるのも一興かもしれんな……む？」
　恐らく上官の信頼は地に落ちるだろうな。……そんなことを考えていると、目の端にとある光景が映る。
「んしょっ……もう……ちょっ…と…!!」
　車椅子に乗った少女が本棚に手を伸ばしていた。立てさえすれば簡単に取れる位置にあるのだが、それは彼女には無理だろう。また、彼女の近くにいる者も彼女を手伝う様子はない。それどころか露骨に目を背けている輩までいる有様だ。……やれやれ、彼等には思いやりと言う言葉を知らんのかね？そんなことを考えつつ、少女の方へ近付き、彼女が取ろうとしていた本を取る。
「失礼。君が取ろうとしていたのはこの本かね？」

「あっ……ありがとうございます、お兄さん」
「何、気にする必要はない。可憐な少女を助けるのは当然だろう？」
「……あははっ、そんなん言われたら照れてまうわ」
　そういう少女は顔をほんのりと赤らめている。……本当に照れているようだ。そんな大したことは言っていないと思うのだがな。
「そうかね？私は事実を言っているだけなのだがな」
「ほんとですか？」
「ああ、私は嘘が嫌いなのでな。……そうだ、これも何かの縁だ。他に取りたい本はないかね？手伝おう」
「え!?いやそんなんええですよ!!お兄さんにも迷惑やろうし……」
「子供が遠慮するものでは無いよ。子供は子供らしく我が儘に生きればいいのだ」
　……おそらくなのは嬢やフェイト嬢と同じくらいの年頃だろうにこの態度。一体どんな教育を受けたのやら。
　半ば強引に少女の車椅子を押し、移動させる。
「うううう……お兄さん、ちょっと強引やない？」
「君が子供らしかなぬ態度を取るからだ……一つ、不躾な質問をするが、付き添いで来ている者は何処に？」
「……そんな人居ません。わたし、ずっと独りですから」
「何だと……!?」
「一応お父さんの友人って人がヘルパーさんを雇ってくれてるんですけど、それも偶に様子を見に来る程度ですし……あ!!でも困ってるっていう訳じゃ無いんですよ？」
　そう言って笑う少女。……何が『困っている訳じゃない』だ。そんな寂しそうに笑っていて、信じられると思っているのか。
「……」
「……？どうしたんですか？お兄さん」
「……いや、何でもないさ。つまり君は、その身体で独りで暮らしているのか？」
「そうですよ？わたしのお父さんとお母さんが事故で死ぬ前に車椅子でも生活に困らんように家をリフォームしてくれてたから、助かって

ます」
……両親をこの歳で亡くし、たった独りで暮らしているとは。おそらく学校にもいけていないのだろう。この子がいう叔父とやらも一緒には住めないようだからな。
「……あ、ごめんなさい。その本取って貰ってええですか？」
「ああ、勿論。……これかね？」
「はい!!ありがとうございます。これは借りて帰るんで、もう大丈夫です。ありがとうございました、お兄さん」
「……まったく、君は私が言った事を理解していないのかね？」
「……へ？」
「子供は子供らしく、そう言っただろうに。少しだけ待っていたまえ」
そう言い残し、先程座っていた場所へ戻り、荷物を纏める。もうこれ以上ここでやることは無い。そして、彼女を独りで帰らせるつもりもない。
「済まない、待たせた。では、行こうか」
「へ？ちょ、ちょっと……お兄さん？行くって何処に？」
「無論、君の家だ」
「何で!!?何でそうなったん!!?」
「付き添いもいない車椅子の少女を独りで帰らせる訳にもいかないだろう？」
何を言っているのやら、この娘は。
「いや……いっつも一人で行き帰りしてるし、大丈夫やって!!」
「我が儘を言っていいとは言ったが、それは無視させて貰おう……では、改めて出発するとしよう」
「横暴過ぎやろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!?」
「こら、図書館で叫ぶな。周りに迷惑だろうが」
少女がキャーキャー言っているが顔が笑っているので、無視して彼女の車椅子を押して、図書館の外に出る。
「……はぁ、もうええわ。お兄さん、優しそうに見えて強引なとこあるんやね……」

「君が人を頼ろうとしないからだ……すまんが、少し失礼するぞ……っと」
「わひゃあ!!?」
少女を車椅子から持ち上げ、乗ってきたバイク、サイドバッシャーのサイドカー部分に乗せる。
「……お兄さん、いきなり持ち上げんとってよ。びっくりするやんか」
「だから先に声を掛けただろう?ほら被りたまえ」
少女にヘルメットを渡しながら、車椅子を畳み、バイクに括りつける。それが終われば私自身もバイクに跨り、エンジンを掛ける。
「では行こうか。道案内はよろしく頼むよ?」
「はーい……安全運転でお願いな?」
「子供を乗せているのだ。当たり前だろう」
軽い掛け合いを交わしながら、バイクを発進させる。

図書館を出て十数分、私は少女の家に辿り着いた。
中々大きな一戸建てだったので、少々驚いたのは内緒だ。それよりも気になったことがひとつある。
この家の周囲一帯に、違和感を感じるのだ。しかもこの感覚、春先に介入したジュエルシード事件で使われていた【認識阻害結界】とか言う物と同じものであると感じ取れる。
だが、家主である少女がこれを展開している訳でも無いのだ。……何処か、きな臭くなってきたな。
「お兄さん、送ってくれてありがとうございます。助かりました」
「礼をいわれる様な事では無いよ。当然の事をしたまでだ」
「そう……ですか?でもうちもお礼したいし……そうや!!お兄さん今日うちで晩御飯食べていかん?わたしこれでも料理上手いねんで!!」
「ふむ……それは別に構わんのだが、まだ十五時だぞ?」
「あっ……なら一緒に買い物行こう?それも歩いて!それなら時間も潰せるし、一石二鳥や!!」

「君がいいのなら、私はそれで構わんよ」
それにここまで必死に引き止めようとしているのだ。気付かぬ振りをするのも大人というものだ。
一度少女の家に入ったが、改めて外出準備を整える。
準備が出来次第、少女の後ろに回り、車椅子を押す。
「そういやお兄さん名前は？ずっとお兄さんって呼ぶのもなんか変やし、教えて貰っていい？」
ふと気付いた様に少女が身体を捻ってこちらを向く。
……そう言えば、まだ名乗っていなかったな。
「ああ、構わんよ。私の名は緋峰　蓮夜。この海鳴には二月程前に来たばかりだ。……君は？」
「うちは八神はやて言います。よろしくな、緋峰さん」
「少々硬いが……まあいいだろう。こちらこそよろしく頼むよ。はやて嬢」
そのままゆっくりとした速度で近くのデパートへと向かう。
……はやて嬢をこのまま独りで暮らさせる訳にもいかんし、夕食が終わったら彼女と話し合って見るとするか。

第16話

はやて嬢と買い物を終えて、現在ははやて嬢と共に調理中だ。今宵の献立はカレーらしく、私は材料の下拵えを担当している。
本来なら、はやて嬢が全て一人で作るつもりだったようだが、流石にそれは許容出来なかった為、多少の口論を繰り広げた結果こういう形になった。
「もう……緋峰さんは頑固やなぁ。わたしがお礼に晩御飯ご馳走する言うてるのに手伝おうとすんねんもん」
「その気持ちだけ有り難く受け取っておくとするよ。私は身体が不自由な少女に全て任せられる様な人間ではないのだよ」
台所に隣り合った状態で作業を進めていく。
……とはいえ、私の割り振られた役割はあっという間に終わりを迎え、はやて嬢にリビングの方に追いやられてしまった。……データを纏めておくとしようかね。

リビングに追いやられて数十分後、リビングにまで、良い匂いが漂って来た。
「緋峰さーん、カレー出来たで～」
「む？了承した。はやて嬢」
二人分のカレーをよそい、テーブルへと運ぶ。他にはサラダ程度の簡素なものだが、充分だろう。
二人、向かい合ってテーブルにつく。
「いただきます」
二人揃って食事前の挨拶をし、食べ始める。ちょうど安売りしていた鶏肉を使ったカレーは程よい辛さで舌を刺激しつつも、口の中には凝縮された旨みが広がっていく。まあ端的に言えばかなりの味だ。何処ぞのカレー狂いの代行者が作ったものに匹敵しうる程だ。
「ほう……素晴らしいな、このカレーは。とても小学生が作ったものとは思えない出来だ」
「ホンマに!!?そう言ってもらえると嬉しいわ～」

そのような、たわいない事を話す。

そしてそれから一時間程後、私はホテルへと帰る準備をしていた。はやて嬢もわざわざ玄関先まで来てくれた。……律儀な娘だな。

「ごめんな～緋峰さん、長い事引き止めてしもて…」

「だから気にするなと言っているだろう。私が望んではやて嬢の手助けをしたのだ。君が気に病む必要は無い」

「で、でも……」

「……ハァ。先程から何度も言っているが、改めて言おう。子供が遠慮するな……もっと周りを頼りたまえ」

「うわっ!!?緋峰さん!!やーめーてー!!?」

そう言いながらはやて嬢の頭を少々乱暴に撫でる。はやて嬢も悲鳴をあげながらも顔が少し綻んでいる。

「ではな、はやて嬢。何か困ったことが有ったら、この番号に電話したまえ。私が地球の裏側にいようとも通じる」

そう言って、携帯の番号をメモした紙を渡す。

「ありがとうな、緋峰さん」

「無論、困ったことが無くても気軽に電話してくれても構わんがね。ま、こんな面倒臭い大人と話す気があるのなら、だがね」

「あ、あはは……自分でそういう事言うってどうなん？」

「自己の認識を正しくしているだけ、マシだと私は思うがね」

何処ぞの阿呆のように与えられた力で調子に乗るような屑よりは絶対にまともであるはずだ。

「さて、名残惜しいが私はもう行くとしよう。またな、はやて嬢」

「う、うん。またね、緋峰さん」

はやて嬢に見送られ、八神家を出てサイドバッシャーに跨り、ホテルへ……ではなく、以前に紫耀達と戦った場所へ向かう。その理由としては、八神家を出ようとした直前から、視線を感じた為だ。大方、八神家に張られていた認識阻害の結界の行使者だろう。わざわざこちらに触れてこようとしているのだ。盛大に出迎えてやるとしよう。

１０分程で、紫耀達と闘った場所につき、バイクを異空間へしまう。放置しておいて、万が一壊されでもしたらショックで三日は寝込む自信がある。あれも永い放浪の中で譲り受けた物なのだ。修理出来るだけの技術を持ち合わせていても、壊されるのは勘弁願いたいのだ。

「……態々人気の無い所まで来てやったのだ。何時までも隠れていないで、出て来たらどうかね？」

そんなことを考えつつ、背後から感じる気配の主へと声を掛ける。

……出て来るかは正直半々だと思うが、まあ出て来なければこのまま帰るだけだが、さてどう出て来るやら……

「……」

と思考したのもつかの間、目の前に仮面を付けた人物が現れる。

「漸く姿を見せたか……で？わざわざ後をつけて来たのだ、何か私に言いたいことが有るのではないかね？」

何時もよりも威圧的な態度で相手へと話し掛ける。年端もいかぬ少女を人知れず見張っているような輩に、親切に接する気は無い。

「私が貴様に言う事は唯１つ。……八神はやてに近付くな。これに従わない以上、こちらは武力行使も厭わない」

……成程。これではやて嬢が何かしら、厄介なモノを抱え込んでるということは確定。しかも彼女自身はそれに気付いていない……こうなると彼女の父親の友人を名乗る人物がきな臭いな。……後の対処が面倒なことになりそうだが、彼女達にも手伝って貰うとするかね。

「……何時まで黙りこくっている。返事を聞かせて貰おうか」

「無論、断る。貴様の様な年端もいかぬ少女を影から監視している奴の言う事なぞ誰が聞くというのかね？」

仮面の男の要求をあっさりと跳ね除ける。恐らくこいつは管理局……というより彼等の技術を使っている者、即ち【魔導師】と見た。……紫耀から情報が伝わっている可能性がある以上、エイヴィヒカイトを使うのは少々リスクがあるか……？

「そうか……なら、此処で始末させてもらう……!!」

その言葉と共に男は青い魔力弾を飛ばしてくる。……やはり魔導師か!!
「さて、どうするかな……？」
連続して飛んでくる魔力弾を避けつつ、思考を続ける。別にこのまま無力化してもいいのだが、生身の人間が魔導師を無力化するというのは黒円卓の連中と関わりがあると思われる可能性がある為、なるべく避けたい。ここで息の根を止めてしまえばそんな心配をしなくてもいいのかも知れないが、大方こいつの背後にも支援者のような人物が居るはず。
そうだとすれば情報が漏れるのも時間の問題になるだろうし、そのようなリスクを許容する訳にもいかんしな。
……折角の機会だ、ドライバーの実戦テストと行くか。
思考を止め、思い切り後ろへと飛び退く。仮面の男がこちらの動きに戸惑っているうちに懐からロストドライバーを取り出し、腰に装着する。
「……何の真似だ？」
「何、別に大したものではない……貴様を倒す為のちょっとした武装だよ」
「何……？」
仮面の男が訝しげな雰囲気を無視し、懐から白い掌ほどの大きさのＵＳＢメモリ……【ガイアメモリ】を取り出す。
「私にとって、貴様の存在などはどうでもいい。……だが、貴様のせいではやて嬢から笑顔が失われているのだとしたら……私はそれを見過ごす訳にはいかんのでな」
【Ｅｔｅｒｎａｌ!!】
ガイアメモリについているボタンを押すと、メモリから音声、【ガイアウィスパー】が響く。そこから響いたのは永遠を象徴する言葉。それをベルトへと差し込み、倒す。そして、異形の者の力を用いて悪を倒す戦士達……【仮面ライダー】が言い続けてきた言葉を紡ぐ。
「変…身」
その言葉と共に私の体はガイアメモリにより、変質していく。全身

は白く、頭部はEを横にしたような角、目の部分は黄色の複眼、全身にマキシマムスロットを装備し、【エターナルローブ】を纏った姿、【仮面ライダーエターナル】へと変身する。
「な、何だ!?その姿は!!」
「だから言っているだろう?貴様を倒す為の武装だとな」
仮面の男の驚愕を受け流しつつ、新たなガイアメモリを2本と大型の銃、【エターナルブラスター】を取り出す。
「性能実験は済ませてある……威力は折り紙つきだぞ?」
【Ｈｅａｔ!!】【Ｌｕｎａ!!】
熱きの記憶を宿すヒートメモリ、幻想の記憶を宿すルナメモリをエターナルブラスターへと差し込み、仮面の男に狙いを付け、引き金を引く。
ルナメモリの力でエターナルブラスターから放たれる砲弾はこちらの意思で自在に操る事ができる。そうやすやすと避けられる代物ではない。
「チィ……!!」
仮面の男はこの弾丸の危険性をを直感的に感じ取ったのか、空へと逃げる。……確かにいい判断だが、その程度では幻想が宿ったこの砲弾を避けられんよ。
砲弾は仮面の男を追いかける。その速度は男が空を飛ぶ速度よりも速く、後少しで男に当たる。男も避け切れないと悟ったのか、魔法で防御するつもりらしいが……ヒートメモリで増幅されたこの砲弾を防げるとでも思っているのかね?
「さぁ……弾けろ」
「グァァァァ!!?」
砲弾が仮面の男が張った魔法による防壁に触れた瞬間、炸裂する。その威力は容易く男の防壁を破壊し、爆風が男を飲み込む。
「……ふむ、対魔導師戦ではメモリによる威力増幅は必要無い……というよりは威力過剰になってしまうか」
「ぐっ……きさ、ま……!」
「おや、死んではいないとは思ってはいたが、まだ話せる程余力がある

のか。予想以上に頑丈だな、貴様」
　確か魔導師は戦闘時に【バリアジャケット】とか言う防護服を装備しているとか紫耀が言っていたが、恐らくそれでダメージを軽減したのだろう。
「……で？私に対して偉そうに指図していた貴様は、不様にも私の前で這いつくばっているのだが……何か言うことはあるかね？」
「……あの娘に関わると、後悔することになるぞ……！」
「……そうか、ではさらばだ。名も知らぬ愚物よ」
【Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ!!】
【Ｈｅａｔ　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ!!】
【Ｌｕｎａ　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ!!】
　エターナルメモリもエターナルブラスターに差し込み、銃身部分についているスライドを引き、メモリの力を増幅させる、【マキシマムドライブ】を発動させる。後は仮面の男に狙いを付け、引き金を引くだけだ。
「させないよ……っ!!」
「っ!!?煙幕とはこしゃくな真似を……!!」
　だが、第三者の介入により引き金を引くことは出来なかった。声から察するに女のようだったが、そいつが放った煙幕のせいで一瞬だけ仮面の男から意識を逸らした隙に男は何処かへと転移していき、第三者の気配もこの場から消え失せていた。
「……まさか目先の相手に気を取られて他者の気配を見逃すとは……紫耀達に知られると笑われてしまいそうだな」
　自嘲しながら変身を解除する。仮面の男から情報すら引き出す事すら忘れるとは、年甲斐も無く熱くなっていたようだ。
　紫耀の情報に寄れば、次に事件が起こるのは１２月。そして少女を監視する管理局に連なっていると思わしき人物……か。
「こうなってしまった以上、容易には介入して来ないだろうし……警戒を密にするしかないか」
　ある程度今後の方針を固め終えたので、異空間からディアブロッサ・カスタムを取り出し、跨る。

これはもう最初に考えた通り、彼女達を起こすしか無いか……

「……なるべく起こしたくは無いのだがな」

そう呟き、ホテルへと向かう。……今から憂鬱だ。

第17話

仮面の男に襲撃されてから三日程後、私は異空間内のラボで端末を操作している。

内容としては、とあるシステムの解凍作業だ。これはとある世界で拾ったプログラムを改良したものなのだが、非常に面倒な奴等だったので、反省の意味も込めて凍結していた物。そんなものを解凍しているのには、当然のように訳がある。

「これで良いか……サポートＡＩ【アルターエゴ】起動。起きろ、馬鹿娘ども」

『……久し振りに顔を合わせるなり馬鹿呼ばわりとは、相変わらずの傍若無人っぷりですね～』

「五月蝿いぞＢＢ。本来ならあと３０年は凍結したままのつもりだったのだぞ？感謝されるならまだしも、文句を言われる筋合いはないと思うのだがな」

『それを本気で言っているなら、大至急、精神科の受診を勧めるわ、レンヤ』

「……貴様も相変わらずの様だな、メルトリリス」

『お、お久し振りです……蓮夜さん』

「うむ、久しいな。パッションリップ……ほかの二人もこれくらい慎ましければ楽なのだがな」

約一名を覗いて、モニターの中から私に対して文句を言ってきている殆ど同じ顔の三人娘。とはいえ服装の方は全くといっていいほど統一感が無い。そもそも体格が違うから当然と言えるのかもしれんが。

一番最初に喋り出したのが、【ＢＢ】

仮想体（アバター）は黒を基調とした服装でまとめているが、何故かスカートを限界近くまで詰めて、下着が丸見えになっている。何故このような服装にしたのかは聞く気が無いので知らないふりをしている。

補足として、彼女は下着が丸見えになっているのに気付いていなかったりする。

ＢＢの後に話し掛けて来たのが【メルトリリス】
仮想体（アバター）は袖長の黒コートを羽織り、脚部に巨大な剣のような形をした脚甲を装備してはいるが、局部は極少の貞操帯だけというなんともまあ極端な格好をしている。
最後にこちら気遣った発言をしたのが、
【パッションリップ】仮想体（アバター）はサスペンダーのついたかぼちゃパンツを履いているが、問題は上半身部分。女性としての象徴でもある乳房ぶぶん含め、サスペンダーと手に装備されている巨大な手甲以外、何も着ていない　。バストも三人の中では最も大きいのに一番無防備と言っても過言では無いだろう。
この三人こそがサポートＡＩである【アルターエゴ】の中核を為している存在である。彼女たちがある事件で消滅しかけていたところをサルベージし、再構成したのはいいが、口を開けば不平不満のオンパレード。
あらゆる未知を体験してきた私でも面倒になったので、この空間で約１５０００年程凍結していたのだが今回彼女たちの力が必要と判断し、解凍する事にしたのだ。
『……で？緋峰さん？何で私たちを起こしたんですか？言っちゃ何ですけど、貴方私たちのサポート必要無いでしょう？』
「そうでもないさ。分析程度なら私一人でもどうとでもなるが、出来ぬ事もあるのだ……例えば、電子領域に潜伏するとか、な？」
『……成程。私たちの得意分野と言う訳ですか。別にお願いを聞いてあげても良いですが……その見返りはあるんですかぁ？』
……相変わらず人の弱みに付け込むのが得意な奴だな、ＢＢは。まあ此方としても、そう出てくるのは織り込み済みだ。
「ハァ……お前達に合わせて調整を施した義体をそれぞれくれてやる。……これで充分だろう？」
『義体ってことは……自由に外を出歩いていいって事ですよね……？』
「細かいな貴様も……ああそうだ。流石に戦闘行為迄は許可せんが、

普通に過ごす分には私が関与する事は無いだろう」
『なるほどなるほどぉ……私としてはそれでＯＫですが……リップ、メルト。貴女達はどうします？』
『私はそれで構わないわよ？外を自由に動けるようになれば、人形集めにも精が出るしね』
『わ、私もそれで大丈夫、です……』
「そうか……感謝するよ」
　彼女達に礼を言う。幾ら彼女たちが電子上の存在とはいえ、紛れもなくヒトとしての自己を確立している以上、私は彼女達を人間として扱っている。
『商談成立、ということで依頼内容についての詳しい説明をお願いしますね～』
「ああ。まず、潜り込んで貰うのは、時空管理局とか言う下らん組織のネットワーク。時空管理局についての詳細は後で渡すファイルを参照してくれ」
『なに？その頭の悪そうな組織……それで？そこでする事は？』
「闇の書、もしくは夜天の書……そして八神はやて。これらの単語が出た会話記録やその他諸々。一言一句残さず記録してくれ。期間は、外の時間でクリスマス迄の約四ヶ月だ」
『うっわ～それ大分大変じゃ無いですか～？ファイヤーウォールとかも、全部私たちが処理しなきゃいけないんでしょう？』
「……何の為にお前達を起こしたと思っているんだ。お前らにはｉｄ＿ｅｓやシェイプシフターと言う類稀なる力があるだろう？」
『あの、ｉｄ＿ｅｓも使っていいんですか……？メルトのウィルスはまだしも、私の力は盗み聞きとかには役に立たないですよ……？』
　そこでパッションリップが口を挟んでくる。……確かに彼女のｉｄ＿ｅｓは破壊に特化されている代物だ。だが、私がそれについて何も考えていないとでも思っているのかね？
「それに関しても考えてある。パッションリップは主にカウンタープログラムを相手してくれ。……殴ったり、握り潰したりするのは得意分野だろう？」

『は、はい……!!それなら、得意です……!!』
「情報収集が終わった後にもひと仕事あるので、留意しておくように。……次はメルトリリスだ」
『あら、私にも指示があるの？リップと違って何をするべきかは分かっているつもりよ？』
　そう言いながらメルトリリスは妖艶な笑みを浮かべる。他の二人より、身体年齢が低いのだが、二人にも劣らない色気を醸し出している。……下半身部分が痴女状態なのは触れてはいけない。
「お前の場合は逆に枷だよ。ウィルスは防壁の類を無力化する時のみ、使用を許可する。それ以外では決して使わせんぞ？」
『……流石、と言うべきかしら？私の事を理解してくれて嬉しいわ』
「直接剣を交えた事もあるのだ。それくらい分からいでか。で、最後にＢＢだが……」
『……まあこの流れなら私にも指示があるとは思っていましたよ。で～私は何すればいいんですか～？』
「別に大した事は無い。お前には収集した情報を纏めてこちらへ送ってもらうだけだ」
『え、……？ど、どう考えたって私が一番大変じゃ無いですか!!!?』
「そうかもしれんが、ほかの二人に任せる訳にもいかんのでな。お前を信頼しているからこそ任せるのだ……やってくれるか？」
『し、仕方ないですね～!!そこまで言うなら、このＢＢちゃんがやってあげましょう!!!』
　……提案した私が言うのも何なのだが、チョロ過ぎ無いだろうか？月の裏側で相対した時はもう少し、理知的だったと思うのだが……気にしたら負け、と言うやつだな。
「取り敢えず、役割分担も終わらせたし早速頼むぞ。今資料と、管理局のネットワークに繋がるアクセスコードを送る」
　キーボードを操作し、別のファイルに保存していた物をＢＢ達に送る。これがあれば、彼女達は充分仕事をしてくれるだろう。
『……はい、確かに。それじゃ早速行ってきますね～』
『暫しのお別れね。またね、レンヤ。戻って来たら一緒に人形集めを

しに行きましょう？』
『め、メルトずるい……!!私も頑張りますから!!一緒にお出掛けしてくれますか……？』
「わかったわかった。無事戻って来たら、付き合ってやろう」
約束ですよー!!と言うＢＢの言葉と共に、ディスプレイ上から三人の姿が消える。……こんな素直だったか？あいつら。まあ従順なのはこちらが楽なので文句は無いがな。
そんなことを考えながら異空間から出て、ホテルの部屋へと戻るのと同時に、電話が掛かってきた。通知画面を見ると、登録していない番号なのだが……時期的に考えると、はやて嬢かね？
そう思いながらも電話に出る。
「もしもし？」
『あ!!緋峰さん!!?八神はやてですけど、今大丈夫!!?』
「どうしたのだ？随分切羽詰まっているようだが……」
電話先の相手はやはりはやて嬢だった……が、何故かえらく慌てている。……一体何があったというのだ。
『詳しい説明したいねんけど、私もよお分かって無いねん!!?何か急に本棚に入ってた本が光りだして、それが収まったおもたら知らん人達が私の事【主】とか読んでくるし!!?』
「一先ず落ち着き給え、はやて嬢。事情は理解した、直ぐにそちらへ向かう。はやて嬢は出来ればでいいのだがその人物達から事情を説明してもらっておいてくれ」
『う、うん!!わかった!!ほなまた後で!!』
そのはやて嬢の言葉と共に通話が切れる。
……現時点で判明している重要そうなファクターは
【突如光りだした本】【はやて嬢の事を主と呼ぶ存在】の二つか。
……正直、嫌な予感しかしないのだが、まずは自らの目で見極めてからだな。
内心にほんの少し焦燥が宿っているのを自覚しながらも、私ははやて嬢の家へと急ぐのであった。

第18話

ディアブロッサ・カスタムを飛ばし、はやて嬢の家へ向かうこと数十分。私は今、八神家内のリビングに座っている。

横にははやて嬢が不安げな顔をして座っており、私の正面には桃色の髪をポニーテールにしている女性、赤髪の幼女、金髪の女性が座っており、更にその後ろに犬耳をつけた銀髪の男が腕を組んで立っている。補足として、桃色ポニーテールと赤髪ロリータが私の事を睨み付けている。しかも殺気のオマケ付きだ。まあこの程度の殺気など気にするほどの物では無いので、無視しているが。

「……さて、互いにこのまま黙ったままでいるのも時間の無駄だろう。いい加減貴様等について、説明してもらいたいのだがな」

「断る。貴様のような得体の知れない奴に話す事なぞ何一つ無い」

「……」

取り付く島もないとは、正にこの状態を指すのだろうな。桃色ポニーテールはこちらの問いをバッサリと切り捨てる……気は進まんが、仕方あるまい。

「ハァ……すまんが、君から彼女達に説明する様促してもらえるか？はやて嬢」

「え!!?で、でも私の言うこと聞いてくれるかどうか分からんで？」

「それについては心配ない。そこの私を睨んでいる二人は君が、自分達より得体の知れない奴を信用しているのが気に入らんだけだ。要は、子供の癇癪と一緒だよ」

「貴様……ッ!!」「テメェ……!!」

私の言葉に憤りでもしたのか、二人が身を乗り出して来る。……自分を御することも出来んのかこいつらは。

「黙れよ塵芥が。相手との実力差も理解出来ぬ分際で吠えるな、鬱陶しい」

「「「……ッ!!!?」」」

はやて嬢へは影響を与えないように細心の注意を払いながらも連中に、殺気を全力の半分ほどでぶつける。

……情けない事に、連中はこの程度の殺気で動けない様だ。その程度の実力しか無いくせに歯向かって来るとは、愚か者としか言いようが無いな。
「……？緋峰さん、何かしたん？」
「別に君が気にする事では無いさ。……身の程を知らん連中に現実を教えてやっただけだ」
「ならええけど……それでシグナム…さん、やったっけ？もう一回、私にしてもらった説明してもらっていい？私にはよう分からんかったけど、緋峰さんなら理解出来ると思うし」
「し、しかし主!!この様な得体の知れない輩に話す訳には……！」
シグナムとか言う桃色ポニーテールが過剰に反応しているが、はやて嬢はそんな彼女に対して苦笑いを浮かべている。
「……うーん、こんなこと言うのもなんなんやけど……私からしたら、シグナムさん達の方が得体が知れへんのやけれど……」
「なっ……？!!!」
驚愕しているシグナムと赤髪ロリータ。金髪と犬耳の男は当然だろうと言わんばかりの表情をしているが、少しばかり顔が強ばっている。少し殺気を強く当て過ぎたか……？どうでもいいが。
「それもそうよね。はやてちゃんからしたら、私達は突然家の中に現れて、自分の事を主と呼んできた不審者に過ぎないのよね……」
「シャマル、お前まで……」
金髪はシャマルというのか。彼女はあの中で一番常識人のようで何よりだ。
「はやてちゃん、私から説明させてもらうわ。えっと……緋峰さん？もそれでいいかしら？」
「別に構わんよ。君たちがどういった存在で、何故はやて嬢の事を主と呼ぶかを説明してもらえればそれでいい」
……まあ、大体の予想は立ててあるのだが、それが外れていてくれればいいのだが、な。
「そう……それじゃまずは私達について話しますね」

〈キングクリムゾン!!ジカンハケシト…ギャーッ!!

……また時間が消し飛ばされたな。悲鳴が聞こえたようだが気にしない気にしない。

シャマル嬢の説明を簡潔に纏めれば、彼女達は【闇の書】の守護騎士で、その闇の書の現在の所有者がはやて嬢だというのだ。

……嫌な予感というものは当たるものだな。これも運命とでも言うのだろうか？とはいえ、ある意味ではチャンスだな。闇の書のデータと取る事が出来れば、【夜天の書】との繋がりも見えてくるかも知れん。

「……話はだいたい分かった。それで？はやて嬢はどうしたいんだ？闇の書は所有者に強大な力をもたらすらしいが？」

少々意地が悪いのを自覚しながらも、敢えてはやて嬢に問い掛ける。……これだけは、どうしても聞いておかなければならないからな。

「どうしたい……って言われてもな～闇の書やったっけ？それはまだ未完成で、完成させるには魔力…？とか言うのを集めなあかんくて、それは他の人から取らなあかんねやろ？」

「その通りです、主。ですが主がお気になさる事はありません。魔力の蒐集も、全て私たちが行います」

はやて嬢の疑問に、シグナムが答える。その答えを聞いた、はやて嬢は何かを決意したような表情になる。

「なら尚更やな、わたしはそんな力何かいらん。わたしはただ……」

「ただ……？」

「守護騎士の皆と一緒に暮らせれば、それでええよ。シグナム達も、蒐集何かせんでええ」

「し、しかし主!!」

「あ、言うとくけどこれ、闇の書の主としての命令な♪」

「うっ……!?ハァ……わかりました、我が主。我等守護騎士、貴女の名に従います」
　はやて嬢の言葉に観念したのか、シグナム達がはやて嬢の前に跪く。その光景はまさしく、自らの主に忠誠を誓う騎士達そのものだった。
「ふふふ……随分と似合っているではないか、はやて嬢」
「あ、緋峰さん!!からかうのは止めてぇな!!」
「別段からかったつもりは無いのだが?……それはそうと、守護騎士の連中に尋ねたい事があるのだが、いいかね?」
「……なんだ」
「そう警戒するな。はやて嬢が君達を受け入れている以上、私が貴様等に危害を加える事は無いさ」
「私が答えますよ?緋峰さん……もっとも答えられることなら、ですけどね」
「そうか。すまんな、シャマル嬢。とはいえ、私が聞きたいことはひとつだけだ。……【夜天の書】と言う物を知っているか?」
　私の質問に、守護騎士達が揃って首を傾げる。
「夜天の書……?少なくとも私は聞き覚えが無いわ。シグナム達は?」
「私も聞いたことがない。……名前から察するに、闇の書の同型か?」
「あたしも知らねー……闇の書の管制人格なら知ってるかも知れねぇけど」
「管制人格、か……」
　赤髪ロリータこと、ヴィータが零した言葉を反芻する。……確か資料によれば、魔力の蒐集によって一定以上のページが埋まると現れる存在……だったか?
「そうか……手間を取らせたな」
「……おい待てよ。お前、なんであたしらの魔法について知ってんだ?はやては魔法なんて知らねぇって言ってたのによぉ……」

……少々迂闊だったな。魔法についての知識が有る事を知られるのは別に構わなかったが、まさかこんな形で知られる事になるとは思わなかった。しかも一見幼女にしか見えんヴィータに指摘されるとは……この私が動揺したとでも言うのか？もしそうだとすれば、ここ最近の出来事で気が緩んでいたのだろうな。……全く、情けない話だ。

ヴィータの発言にシグナムと犬耳……ザフィーラが身構える。

……さて、どう言いくるめるかな。

「……大したことではない。私が嘗て魔法文化がある世界に住んで居ただけだ。こう見えて、研究者なのでね。法に抵触する様なこともしていたので、管理外世界であるこの世界に逃げ込んで来たというわけだ。……心配せんでも、管理局との繋がりは無い」

……一応、嘘は言っていない。魔法について研究しているのも事実だし、この世界に流れ着いたのも事実だ。

「……信じて、いいのだな」

「無論だ」

シグナムがこちらの真意を確かめる様に尋ねてくる。……余程主が大切と見える。こいつらならば、はやて嬢も気を遣うことなく過ごせるだろう。

「……難しい話終わった？緋峰さん」

「うん？ああ……私に関してはもう用件は済んだ。安心したまえ、はやて嬢。彼女達は君に害を為すような存在ではない……寧ろ、君を害から護ってくれるだろう」

「ほんま？シグナムさん……？」

「勿論です、我が主。我等守護騎士は貴女をあらゆるものから御守り致します」

不安げな表情をするはやての問いに、シグナムが守護騎士を代表して答える。その顔は、自らの主の不安を取り除こうとしているためか、とても自然な笑顔だった。

「…そうなんや。じゃあこれからよろしゅうな、皆」

シグナムの言葉に安心したのか、はやて嬢も朗らかな笑みを浮かべ

ている。
……いい雰囲気が漂っている中、こんなことを思うのは不謹慎なのだろうが、言わせて欲しい。
……私が来る必要は無かったのでは無かろうか？

第19話

はやて嬢が守護騎士達を家族として受け入れてから早くも2ヶ月が経ち、今は10月も下旬である。最初のひと月程はあの様な堅物共がはやて嬢の傍にいるのが少々不安だった為、3日に一度くらいの頻度で様子を見に行っていたが、はやて嬢の気質もあって日常生活に充分馴染んでいった。

それ以降は、一週間に一度程度の訪問に頻度を下げた。理由は色々とあるが、一番に理由を上げるとすれば、私が守護騎士達に嫌われている。という点になる。

……特に嫌われるような真似をしたつもりは無かったのだが、やはり魔導師、引いては管理局に多少なりとも関与している立場と言うのが影響しているのだろう。

それゆえ、と言っていいのかは定かでは無いが、こちらの腹の中を探って来るような事は、今の所は無い。

最も、闇の書について調べようとする時だけは流石に追い払われたが、それ以外では特に問題は無い。

ＢＢ達からも順調にデータが送られて来ている。此処二ヶ月の間で送られてきたデータの中で、一番の収穫が、はやて嬢と出会った時に襲いかかって来たあの屑の裏にいる人物を突き止めてくれた事だろう。

その人物の名は、【ギル・グレアム】。時空管理局の顧問官を務める重鎮であり、前回の闇の書事件に於いて殉職した【クライド・ハラウオン】の上官だった男……しかも、はやて嬢に援助をしている人物でもあった。

そして、私に襲いかかって来たのが彼の使い魔である【リーゼロッテ・アリア姉妹】。何でもあの仮面姿は魔法による変装なのだとか。……そして、これが最も重要な情報、彼等の目的である。

それは【闇の書を現在の所有者ごと、永久封印する】事らしい。彼等は態々その為にはやて嬢の周りから人を遠ざけていたらしいが……

「……随分と傲慢な事だ。天狗道の連中ですら多少ではあるが、まだ身の程を弁えていたというのに」
思わず、口からそんな言葉が漏れる。口調こそ普段と同じようにしてはいるが、内心では腸が煮えくり返る思いだ。……年端もいかない少女を犠牲にしてでも危険な代物を封印しようとする意志は高潔と表現出来るのだろうが、それを決意した理由は、ただの復讐に過ぎない。と言うのが、ＢＢ達がもたらした情報である。
……この情報と、紫耀達転生者組の情報、更には私が入手した管理局のデータから推測するに、管理局の上層部は余程腐っているようだな。管理局全体の思想であろう『自分達が世界の守護者である』という傲慢極まりない思想も気に入らんが、それを上回る醜悪さだ。
正直、管理局ごと上層部の連中の存在を消し去ってやろうかとも思ったのだが、後始末が面倒そうな上、前線に立つ者達にも迷惑がかかりそうなので辞めておいた。代わりと言ってはなんだが、ＢＢ達には此方に戻って来る際に上層部の汚職データを全てネット上に垂れ流して来いと指示して置いた。
……ギル・グレアムの所在も既に入手してある為、いつか自分の罪を数えさせるとしよう。無論、リーゼ姉妹諸共にな。

さて、長々と裏工作に勤しんでいる屑共について語ったが、そんな私が今何処に居るのかと言うと、はやて嬢が通院している【海鳴大学付属病院】にいる。
シャマル嬢、シグナム嬢、ヴィータ嬢と共に、はやて嬢の定期検診にやってきたのだ。とはいえ、厳密には違うのだが身内と病院側に認識されている彼女達と違い、世間的には赤の他人となっている私は、担当の医師から直接はやて嬢の容態を聞くことが出来ぬ為、そちらはシャマル嬢とシグナム嬢に任せて、私はヴィータ嬢と一緒にはやて嬢の傍についている。……なに？ザフィーラ？あれは犬（本人は狼だと譲らんが）に姿を変えて留守番だ。盾の守護獣を自称している癖に守護対象と離れるのはどうかと思うのだが、口出しする義理は無いの

で黙っておく。……万が一、はやて嬢に危機が迫った時は私がどうにかすれば良いだけの話だ。
「つーかよぉ……何でテメェも此処に居るんだよ」
「シャマル嬢から付いてきてくれと頼まれたのだから仕方無いだろう？馬鹿にしているわけでは無いが、ヴィータ嬢も見た目は年端もいかない少女なのだ。形式上とはいえ、大人が傍に居た方が何かと都合が良いだろう？」
「……その物言いが既にアタシを馬鹿にしてねぇか……？」
　私がこの場に居るのが気に食わないのであろう、ヴィータ嬢が突っかかって来る。彼女は守護騎士の中でも特にはやて嬢に懐いているからな、私という不安要素をはやて嬢から遠ざけようとしているのだろう。
　……まあパッと見、姉を取られて嫉妬している妹にしか見えぬので、微笑ましい物と私は捉えている。
「コラ、ヴィータ!!何時まで蓮夜さんに突っかかってんねや!!」
「うぇええ!!?は、はやて!!?別にこいつに突っかかった訳じゃ……」
「歳上の人にそんな口の聞き方してる時点でアウトに決まっとるやろー!!!」
　不満げな態度を隠そうとしないヴィータ嬢をはやて嬢が叱り始める。……はやて嬢、確か9歳だった筈なのだが、守護騎士達と一緒に暮らし始めてからなんというかこう……母親じみて来ていないだろうか？
　まぁ元々の気質がお人好しなのだろうが、今まで人との関わりが無かった分、その反動でこうなっていると思っておくとしよう。
「……元気なのは良い事なのだが、もう少し声量を抑えようか、はやて嬢」
「へ？……せやった、ここ病院やった!!うぁ～恥ずかし～」
　私の指摘で自分がしている事を自覚したのか、顔を真っ赤にするはやて嬢。……うむ、やはり子供はこれくらい感情豊かな方がいい。
「お待たせ致しました、我が主」
「お待たせ～はやてちゃん」

「シグナム、シャマルお疲れ様〜。先生は何て言ってたん？」
「……少しずつではあるのですが、良くなって行っているそうです。完治するかどうかまでは分からないそうですが……」
「……そーなんか。まあ少しずつでも良くなってるっていうのは朗報やね!!これからもリハビリ頑張らなあかんな!!」
シグナム嬢とシャマル嬢が戻って来て、シグナム嬢がはやて嬢に診察結果を伝えている。……だが、シャマル嬢の顔が僅かに曇っているように見える。恐らく、シグナム嬢が伝えた病状が良くなってきているという検査結果は嘘で、実際の結果は悪化の一途を辿っているのだろう。そして、その原因は闇の書……なのだろうな。
それを聞いたはやて嬢も、恐らくではあるがそれに薄々感づいているのだろう。だが、それでもシグナム嬢達を心配させない為か、明るく振る舞っている。
……互いが、互いを気遣っているが故に、見事に悪循環が生まれているな。
こうなると守護騎士達は、はやて嬢の意志に背いてでも闇の書の蒐集を始めるだろう。……彼女達の動きにも注意する必要がある。あらかじめ守護騎士達にはハラウオン少年と同じタイプの盗聴器を仕込ませている為、動向を事前に察知する事は可能だが……問題はそれに対してどう対処するかという点だ。黒円卓は地球以外で使う訳にも行かぬが……仕方あるまい。『奴』見張りとして使うとしよう。ラインハルト曰く、『諜報能力だけは一流』らしいので、大丈夫だろう。……多分。どうもかませ犬というイメージが頭から離れないが、それは飽くまで戦闘に持ち込まれた場合だけだ。諜報だけなら問題は無い筈だ。そうに違いない。
はやて嬢と守護騎士達を眺めながら、これからについて、思考を巡らせる。……現段階で出来る事は、少なくは無いが、ＢＢ達と『奴』による情報収集が一段落するであろう、十一月の中旬頃になるまでは、静観するとしよう。

第20話

十一月上旬。私は想定外……というよりは、想定したく無かった事態になってしまった事に自室で頭を抱えていた。

「まさかと言うべきか、やはりと言うべきか……やっぱり奴はかませ犬だったのだなぁ……」

いきなり何だと思われるかも知れんが、多目に見てもらいたい。何せ、守護騎士達の偵察に使っていた聖槍十三騎士団第十位【紅蜘蛛】ロート・シュピーネの模倣体が消滅したのだ。それだけならまだマシだったのだが、よりによって模倣体を形成していた魔力を守護騎士達に蒐集されてしまったのだ。

どのような事態が起きても対処出来るように、結構な量の魔力を込めていたにも関わらず、だ。その量はこの世界での基準に照らし合せると、大凡魔力ランクＡＡ＋位にはなるはずだったのだが……やはり、シュピーネを使うべきではなかったのだろうか？

……まぁ過ぎた事をいつまでも引きずるわけにもいかんし、それよりもこれから起こりうる問題へと目を向けるとしよう。

まず直近の問題としては、魔力を蒐集されたことにより、闇の書の完成が近付いたのが１つ。これ自体はまぁ、いつかは守護騎士達が完成させるだろうから、その時期が早まっただけとも言える。

……問題は、私の魔力が蒐集されたという事だ。確か闇の書には蒐集した魔力所有者の魔法を使うことが出来るらしい。……これはあくまでも想像の域を出ないのだが、私の魔力を蒐集した事により【エイヴィヒカイト】が使える様になるかも知れないのだ。……まだ模倣したシュピーネだけなら問題とする程では無いのだが、他の黒円卓の連中……特に三騎士の能力を使えるとなれば、大惨事になる事が目に見えている。唯一の救いは、闇の書の主であるはやて嬢がその力を使う気が無いという事だが、それも闇の書が暴走してしまえば意味が無くなる。

「……こうなると、ＢＢ達がより詳細なデータを持ち帰ってから対策を立てた方が良さそうだな」

今私の手元にあるデータは闇の書が起こした事件を纏めた物が主であり、私が闇の書について知っている事はその中で触れられていた闇の書の機能についてだけなのだ。より綿密な対策を練るには、もっと詳しい情報が必要になるだろう。

『呼ばれて飛び出でジャジャジャジャーン!!!何時もニコニコ、貴方の傍に擦り寄る乙女!!ＢＢちゃんで～す!!』

「……ＢＢよ。偶には普通に出て来れんのかね？」

『だって～蓮夜さんの驚く顔が見たかったんですよ～？そりゃインパクト重視で行くに決まってるじゃ無いですか～!!……もっとも、全然驚いてくれなかったみたいですけど～』

コートのポケットに入れていた端末から、大音量でＢＢの声が聞こえてくる。端末を取り出し、画面を見ると不機嫌そうな表情を浮かべるＢＢがいた。

……相も変わらず人を弄ることになると、何処からでも現れるなこいつは。

「それで？呼んでもないのに出て来たという事は、何かしら進展があったのか？」

『そんなとこですね～。管理局が保有する【無限書庫】と呼ばれている場所で、闇の書……もとい夜天の書についての詳細なデータを見つけました。夜天の書の特性から、闇の書への改造データまで根こそぎ調べ上げてきましたよ～!!』

「何…だと!?」

……ＢＢのこの手腕は流石と言うべきだな。殺生院キアラに狂わされていたとはいえ、たった1人を救う為にムーンセルを掌握しようとしただけはある。

『ふっふ～ん♪どうですどうです？見直しました～？この超・絶・美少女であるＢＢちゃんに掛かれば、この程度楽・勝なんですよ!!』

「お前がそのすぐにつけ上がる悪癖を直したら見直してやろう」

『ええー……頑張ったんだから褒めてくださいよぉ～』

「また今度な。……で？纏めたデータは何処に？」

『ちゃんと持ってきてますよ～♪私達がメインで使ってる端末に保存

しました♪』
「そうか、助かる。……ギル・グレアムの方は？」
『彼の使い魔が守護騎士の動向を調査しているくらいで、それ以外は特に変化はないですね～』
「そうか……」
　ＢＢからの報告に一言だけ返事をして、思考に入る。現状でもっとも知りたかった情報である、闇の書の詳細データはＢＢ達により私の手元に。ギル・グレアムは未だ大きな動きは見せていない。こうなると、ＢＢ達を管理局へ潜入させておく意味が無いが……さて、どうするのが最善だろうな？
『あ、そうだそうだ。緋峰さ～ん、１つ報告するの忘れてた事があるんですけど～？』
「ん……？報告すること？管理局関連以外でか？」
『ハイ♪実はですね～無限書庫を調べる際、いくらムーンセルの上級ＡＩだった私と、アルターエゴのメルトとリップの三人だと、色々人手が足りなくてですね……』
「……それで？」
『……アルターエゴを三人程、新たに創り出したんですよね～』
「……普通のＡＩとしてだろうな？」
『当然、ハイ・サーヴァントとしてです♪』
「……」
　ＢＢがカミングアウトした内容の酷さに絶句する。確かに彼女を月の裏側からサルベージした際、ムーンセル中枢へ干渉していた時の記憶は消していない。加えて、ムーンセルに匹敵する情報量を持つスーパーコンピュータが私のラボには鎮座している。
　これらの事から、確かにアルターエゴを生み出す事は不可能では無い。だが、いくら人手が足りないとはいえ、神霊の集合体であるハイ・サーヴァントを三体も
　生み出すなど可笑しいだろう？やはりこの女、馬鹿なのでは無いだろうか。
「……まあ生み出してしまったのならしょうがないか。今、彼女

達をここに呼べるか？」
『そりゃそうですよね～。じゃ、呼んでくるんで待ってて下さいね～』
そう言うなり、画面からその姿を消すＢＢ。これから対面するアルターエゴがどういった奴等かは分からんが、アルターエゴというＢＢの感情から生み出された存在である以上、一癖も二癖もある連中に違いない。
『おっ待たせしました～♪それじゃ貴女達、ちゃっちゃと自己紹介しちゃって下さい』
再びＢＢが画面に現れる。その後ろにはＢＢに似た容姿を持つ少女達が佇んでいる。……見たところ、和装幼女にクールビューティー、そして身体の各部に包帯を巻き付けただけと三種三様である。非常に個性的な姿ではあるが、まだメルトリリス、パッションリップの様な痴女じみた格好では無いだけマシと言うものだ。
『初めましてですね。創造主たる我が母、ＢＢより与えられた名をヴァイオレットと申します。宜しくお願いします。緋峰蓮夜』
『私はカズラドロップです。ＢＢから創り出されたのですが……ぶっちゃけるとＢＢ含めたアルターエゴ全員嫌いです。そんな訳で、私に仕事をさせるなら、彼女達と関わらないような仕事をお願いします。緋峰蓮夜さん』
『きんぐ、ぷろてあです。よろしく、おねがいします。れんやさん』
「恐らくＢＢから聞いてるとは思うが、緋峰蓮夜だ。立場的にはお前達の所有者（マスター）になるが……別にかしこまったりする必要は無い。永い付き合いになると思うが、宜しく頼むよ」

クールビューティーがヴァイオレット、和装幼女がカズラドロップ、全身包帯がキングプロテアか。ヴァイオレットは見た目通り、硬い性格の様だが、問題はカズラドロップだ。アルターエゴ達に対して、偉い毒舌が飛び出してきた。……気持ちは分からんでもないが、本人達を前にしてあそこまで堂々と言える辺りが彼女もアルターエゴであると言えるのかも知れないな。そしてキングプロテア、彼女は他のアルターエゴに比べると、少々内面が幼いように見えるがＢＢも

意味が無いアルターエゴを創り出した訳でもないだろうし、何か別の分野で優れているのだろう。
『自己紹介終わりましたか～？緋峰さ～ん』
「ああ。随分とまた、個性的な連中を生み出したものだな。ＢＢ」
『それほどでも無いですよ～』
「褒めてない」
……とはいえ、人手が増えたのは私としてもありがたい。もう管理局に対しても、ギル・グレアムの動向を探る程度で問題は無いだろうし、守護騎士達は地球（この世界）で動かない限りは静観する他無い。
「……まぁいいさ。ＢＢ、お前とメルトリリス、パッションリップはこっちに戻ってこい。ヴァイオレット、キングプロテア、カズラドロップも同様だ。」
『それは構いませんが……ギル・グレアムの監視についてはどうなさるのですか？少なくとも一人は監視についていた方が良いのでは？』
私の指示にヴァイオレットが疑問を挟む。確かにこのまま野放しにするには少々危険だが……
「心配いらん。私自ら、奴に釘を刺しに行く。一応穏便に済ませるつもりではあるが、それもあちら側の出方次第……と言ったところだな」
そう言いながら、軽く笑う。どうせこちらの忠告に対しても聞く耳は持たんだろう。というより、そうでなくては困る。なにせこちとら一度襲われているのだ。その分の貸しは徴収せねばならん。
『……成程、得心しました。確かにそれならば監視は必要無いですね』
『あまりやり過ぎない様にしてくださいね～』
「言われるまでも無い。酷くても心神喪失程度で済ませるさ」
『……心神喪失を程度で済ませる辺り、性根の黒さが滲み出ていますね。緋峰蓮夜』
「何京年と人間の醜さを見続けているのだ。少なからず影響はあるに決まっているだろう」
どんな世界でも、必ずと言っていい程に屑はいた。そういった奴等

の魂を優先的に喰らって来た以上、何かしらの影響を受けているのかも知れんが、それも微々たるものだろう。
「……では、早速話し合いに行ってくる。好きに過ごしているといい」
『じゃあ私達の義体出して下さい!!』
「それは私が戻ってきてからだ。心配せんでも数分で戻ってくるさ」
『むー。仕方無いですねぇ……さっさと済ませて下さいよ～』
「言われんでもそうするさ」
ＢＢ達との会話を済ませ、端末を懐に仕舞いつつ空間移動を始める。
では、Ｏ・ＳＨＩ・Ｏ・ＫＩの時間といこうではないか。

第21話

「どうした？ギル・グレアム。闇の書を封印するなどとほざいているくせに、この程度の戦力しか持ち合わせていないとは……笑わせてくれる」

「き、貴様……!!」

今、私の目の前にはギル・グレアムが座っているが、その顔は憤怒と困惑に彩られている。まあ自分の使い魔がなすすべもなく蹂躙されてしまえばそんな顔になるのもわからなくは無いがな。

こうなった背景は至極単純である。数分程前にギル・グレアムの元へ辿りついた私を察知してかリーゼ姉妹が襲い掛かってきたのだが、それをビズリー直伝の【絶拳】を一発ずつぶち込み、沈めたところである。

「き、貴様……!!？その黒い軍服、もしやリンディから報告のあった聖槍十三騎士団か?!!」

ギル・グレアムが驚いた通り、今の私は黒円卓の軍服に身を包んでいる。一度管理局を脅している以上、これほど視覚的な脅しとして効果的なものは無いだろう。

「私が何者であろうと貴様には関係無いだろう？だがまぁ一応名乗ってやろう。聖槍十三騎士団黒円卓第十三位代理、ロートス・ライヒハート。黒円卓内では処刑人（シャルフリヒター）などととと呼ばれている」

無論嘘だが。とはいえ、カールとラインハルトから自由に名乗っていいと許可を得ているので問題は無い。

ついでに偽名はツァラトゥストラの元となった魂の名を借りている。

「……聖槍十三騎士団は地球でしか活動しないのでは無かったのかね？」

「普通の団員は、だがね。だが私はあくまで代理なのだよ。正規の団員ではないが故に自由に行動出来るという訳だ」

「……成程。それで？私の目の前に現れたのは何故だ？先程闇の書の封印がどうとか言っていたが、それだけではあるまい？」

漸く状況を飲み込めてきたのか、ギル・グレアムは此方に質問を投げ掛けてくる。
「話しが早くて助かるよ。こちらの要求はたった一つのシンプルな要望だ。貴様に連なる人間が闇の書に関わるなという事だけだ」
「何だと!!?貴様は、闇の書の恐ろしさを理解していないからそんな事を言えるのだ!!闇の書の所有者が無力なこの時を逃せば、どれだけの被害が出ると……」
「お前達のような自惚れに浸っているような者共と我々を一緒にするな。あの程度の代物など我々に掛かれば正常化する事など造作も無いのだよ」
「……正常化、だと?貴様、何を……」
間抜けな顔を晒すギル・グレアム。こいつ、闇の書を封印するつもりだったのにそんな事も調べて……いや、そういえばＢＢ達でも時間が掛かったことから考えれば、知らなくても当然と言えるのかね?
「何だ、知らんのか?なら教えてやろう。闇の書は元々、夜天の書と呼ばれる古代ベルカ式のデバイスだった物だ。それを、当時のとある管理局の高官の手により改悪されたものが、現在貴様らが忌み嫌っている闇の書と呼ばれるデバイスになる。それまではただのストレージデバイス程度の能力しか無かった物だったのが守護騎士システム、転生機能、無限再生機能といった今の闇の書を形成している機能を加えたのだよ」
「……は?」
「まぁ簡潔に纏めてしまうとだ、貴様が怨んでいる代物を生み出したのが貴様が所属している管理局だったというのだから滑稽というものだな」
相手を嘲笑っているかのような表情を作りながら、ギル・グレアムに闇の書の真実を伝える。
「それでは……私の復讐は、無意味だと……?」
「無意味とまでは言わんがね。今闇の書を封印した所で、数十年もすればまた闇の書の力に目が眩んだ阿呆が封印を解いて、元通りだろうな」

「そう……か」
そう一言呟いたきり、ギル・グレアムは黙り込んでしまった。
……さて、これだけ心が折れてしまえばもう直接的には関わって来ないだろう。
「……分かった。貴様の要望を呑む。私と私の使い魔はもう闇の書には関わらん」
「賢明な判断を感謝するよ、ギル・グレアム。出来れば、他の管理局の連中にも手を出さない様にしてもらいたい所だが……まあそこまでは要求しないさ」
「ふん……所で、先程言っていた闇の書の正常化。本当に出来るんだろうな？」
ギル・グレアムが此方に念を押すかのように尋ねてくる。こちらをそう簡単に信用しようとしない辺にこの男の有能さが見て取れるな。復讐に囚われていない状態であれば、これほど頼りになる男も珍しいと言うのに……惜しいことだ。
「その為のデータは既に揃えてある。貴様如きに心配される謂れはない」
「そうか……用件が済んだのなら帰ってくれないか？」
「ふむ、それもそうか。ではな、ギル・グレアム。貴様のこれからに幸多からんことを……なんてな」
そう言い残し、空間移動を用いてその場を去る。
移動する直前に改めて見たギル・グレアムはずいぶんと老け込んだ様に見えた。

ギル・グレアムの元からラボの方へと直接帰還する。別にホテルの方に戻っても良かったのだが、ＢＢ達の義体の件もある為、直接ラボに向かったという訳だ。
『あ、お帰りなさい、蓮夜さん。随分早かったですね～』
「……まあな。奴の使い魔に一発ずつ絶拳をぶち込んで、ギル・グレア

ムの心をへし折ってやっただけだからな」
『それはそれは。随分とお楽しみだったみたいですね～』
戻って来るなりラボ備え付けの大型スクリーンいっぱいにＢＢがニヤニヤ笑っている姿が映し出される。
……何故かあの顔、無性に腹が立つな。
「別に面白くも何とも無かったよ。幾ら世界の為だなんだとほざこうが、ギル・グレアムも所詮は復讐に囚われた一人の人間に過ぎなかったということだろう」
『そんなものですかね～？私はＡＩだからそのへんはよく分かんないですけど～』
「……少なくとも愛した者の為にムーンセルを支配しようとした奴が言えるセリフでは無いな」
『……それを言われちゃうと反論出来ないんですけどね～』
ＢＢとそんな軽口を交わしつつ、ＢＢが映っているモニター備え付けのキーボードにコードを入力し、ＢＢ、メルトリリス、パッションリップの義体を保管庫から呼び出す。この義体は、完全に人間と同じ状態になっているので、メルトリリス、パッションリップの凶悪ともいえる装具が存在せずに人間の手足となっている。一応義体使用時に戦闘状態になる事も考慮して、装具を展開出来る様に義体そのものに量子化して格納しているので問題は無い。ついでに服の方も、現代風のものを用意済みなので、何処かのラブコメみたいにラッキースケベなどは起こらん。
「ＢＢ。今そこにパッションリップとメルトリリスは居るか？」
『もちろん!!後はヴァイオレットちゃんが居ますよ～カズラドロップとキングプロテアはどっか行っちゃいましたけど』
「そうか。……まああの二人なら放って置いても問題は無かろう。では、お前達専用の義体の起動確認をする。スマンがアルターエゴの後発組はもう暫く待っていてくれ」
『別に構いません。我々はまだ生まれて間もないので、そこまで外への欲求が強くは無いので』
私の言葉にヴァイオレットが答える。まあどちらにせよ、アルター

エゴのｉｄ＿ｅｓに合わせて義体を造っている以上、後発組アルターエゴのｉｄ＿ｅｓを私が把握出来ていないので造れないのだがな。
「そうか……少なくとも外の時間で年が明けるまでには用意できると思う。それまでに知識の収集なり何なり好きに動けばいいさ」
『……それもそうですね。では私は早速知識を蓄えて来るので、これで』
　そう言うなり、ヴァイオレットがモニターから消える。……流石はアルターエゴ、自分の意志に忠実だな。
『蓮夜さ～ん？メルトもリップもさっきからずーっと待ってるんですけど～？』
「ああ、すまんな……ではこれよりアルターエゴ専用義体、タイプ【ムーンキャンサー】【メルトリリス】【パッションリップ】の起動を開始する。各々、心の準備はいいかね？」
『大丈夫ですよ～♪』
『わ、私も……大丈夫、です』
『愚問ね。いつでも大丈夫よ？』
「よろしい。ではそれぞれの義体へのアクセスパスを渡す。それを使って義体へアクセスしてくれ」
『は～い♪』
　３人を代表してＢＢが返事を返すとともにモニターから消える。その数秒後、目の前の義体がそれぞれ動き出す。
「あー、あー。コレちゃんと聞こえてます？」
「すごい、です……!!」
「……指先の感覚っていうのは、こんな感じなのね」
　……取り敢えず、成功と見て大丈夫そうだな。細かい問題点があるかも知れんが、それは後で直接聞くとしよう。
「三人とも、動作に支障がある箇所はあるかね？」
「私は問題無しで～す♪」
「わ、わたしも、大丈夫です……！」
「……そうね。ただ一点を除いて、問題は無いわ」
「ん？それはなんだね、メルトリリス」

……まあ何となく言いたい事はわかるのだが、敢えて言わせよう。その方が面白そうだ。
「……どうして私だけ他の二人より身長低いのよ!!!」
そう、メルトリリスの義体は、ＢＢ、パッションリップのものより５ｃｍ程低くなっているのだ。ＢＢ、パッションリップが大凡１５６ｃｍに対し、メルトリリスは１５１ｃｍとなっている。仮想体（アバター）では脚甲を装備した状態で１９０ｃｍを越えていたのだから、文句を言いたくなる気持ちもわからんでも無いがね。
「仕方あるまい、外で過ごすにはあの脚甲は物騒過ぎる。脚甲を除けば、お前が一番身体年齢が低いのだ。我慢したまえ」
「別にリップと大して変わらないでしょ私!!」
「パッションリップは体格的にこれ以上身長を低くするとアンバランス過ぎる。ＢＢはお前達の基準になるから論外だ。だからお前になったのだメルトリリス」
「納得いかないわ……!!どうして私が……!!?」
メルトリリスはそのままブツブツと文句を垂れる。
……このまま放って置いても面倒くさくなりそうだな。
「……わかったわかった。代わりと言ってはなんだが、お前専用の人形収集用の空間を用意してやる。それで妥協しろ」
そう提案するなり、メルトリリスが黙り込む。やはり人形には弱いな、こいつ。
「……それと、人形集め用の資金も要求するわ」
「貴様……はぁ、仕方あるまい。それで手を打とう」
「交渉成立。なら我慢してあげるわ♪」
メルトリリスめ、人の足元を見よってからに。まあ拗ねられてメルトウィルスを撒き散らされるよりはマシだろう。
「ちょっと蓮夜さ～ん？なんかメルトに対して甘くないですか～？あ！もしかして、幼女趣味（ロリコン）ですか～？」
「め、メルトだけずるい…!!わたしも、お小遣い欲しい、です!!」
そして、そのような弱みを彼女達が見過ごす訳がなく、他の二人もこちらに詰め寄ってくる。

「わかっている。ちゃんとお前達にもそれなりの資金は渡すさ。……ＢＢは減額だがな」
「えぇ――――っ!!?!!な、何で私だけ!!?」
　私の言葉に驚くＢＢであるが、私から言わせてもらえば当然である。
「……人を幼女趣味扱いする様な奴に渡す金は無い!!」
「そ、それは場の空気を和ませるジョークですよ!!ＢＢちゃんジョーク!!だからお小遣い減らすのだけはご勘弁を～!!」
「さて、それでは外へ向かうぞ。小遣いは外へ出た時に揃って渡す」
　ＢＢが私にしがみついて来るが、敢えて無視して空間移動を行う。
　元々三人に渡す小遣いは同じ額にするつもりだったので、ＢＢの行動は無意味なのだが、言わぬが花というものだ。
　何はともあれ、私の模倣体以外の戦力が確保出来たのはそれなりに有意義である。ギル・グレアムの方はもう動きたくても動けぬだろうが、まだ守護騎士達の暴走は収まることを知らない。そろそろ切羽詰って来る頃だろうし、なのね嬢や灰群蒼児にも守護騎士の手が伸びるやもしれん。
　……守護騎士達の地球での行動が判明し次第、三騎士を投入するとしよう。
　闇の書が有ると分かれば、必ず管理局も動く。その時こそ聖槍十三騎士団の真の恐ろしさを教えてやるとしよう。

第22話

ＢＢ達に義体を渡してから時間は経ち、今は十二月。
本格的に寒さが厳しくなってきた今日この頃だが、この三週間程はそんなことに考えを回す余裕も無かった。
なにせ一週間毎にＢＢ、メルトリリス、パッションリップに色んな場所を連れ回されていたからである。
おかげで退屈するといったことはなかったものの、精神的疲労は増加する一方だった。
そんな彼女達も今は三人で出掛けており、私は久しぶりにゆっくりとした時間を過ごしていた。
「ふむ、バイクで風を切る感覚も悪くは無いのだが、やはり疲れた時には気ままに散歩するのが一番だな」
少々爺くさいと思われるかもしれんが、見た目こそ二十代かそこらだが、こちとら数える気が失せる程永いこと生きているのだ。年寄りという点は間違っていない。
時刻は既に夕刻を過ぎている為、寒さも厳しくなって来ているが私の身体には関係が無い為、のんびりと歩みを進めていく。
……カールとの約束の日が十二月二十五日、クリスマス当日。それまでに闇の書もとい、夜天の書にまつわる事件を終わらせておきたいのだが……微妙な所だな。私が直接相手をしてやってもいいのだが、はやて嬢のことを考えるとそれは避けたい。模倣体を使うにしても、魔力を奪われる可能性が万が一、いや億が一でもある以上使う気にはなれない。
「まぁ転生組が首を突っ込んでいくだろうが、闇の書の復活に多少なりとも関わってしまっている以上、傍観する訳にも行かんしな」
俺の魔力を奪われてしまっている以上、この世界の物とは違う魔法や魔術が使われる可能性もある。法則が違う以上、使えない可能性もあるが物事は常に最悪を想定して動いた方がいい。
これからについて考えを巡らせていると、突如周りの空間が一変する。人の気配が消え去り、何処か別位相に連れていかれたような雰囲

気……と言うか、魔導師が使う結界に巻き込まれた。
「これは……なのは嬢達が使っていたものとは少々術式が違うな……チッ、あの馬鹿共め、とうとう地球(この世界)でも動き始めたか」
この結界、ほぼ間違いなく守護騎士達の仕業だろう。
確かに魔力を蒐集している彼女達にとってこの街にいるなのは嬢や灰群蒼児は絶好の獲物である。そしてこの結界に巻き込まれてしまっている以上、私とて蒐集対象になっているだろう。
一度私自身の魔力を蒐集されて入るが、私の魔力をシュピーネという模倣体に合わせて変質させている為、別人として見なされる可能性がある。これ以上魔力を通して異世界の情報を与える訳にも行かん。
そう判断し、魔力を隠蔽しつつ、辺りを探る。
「……結界の半径が大凡5ｋｍ、そしてここから1．5ｋｍ程先で魔力の激突している反応が2つ。……なのは嬢とヴィータ嬢、灰群蒼児とシグナム嬢か。こちらには……ザフィーラが向かっている、か」
紫耀達がまだ戻っていない以上、数の不利は覆せないな。だとすれば、第三勢力を使い、状況を滅茶苦茶にしてしまえばいい。
「彼等はあまり使いたくないのだが、仕方あるまい……我が記憶より顕現せよ、不死の軍勢(エインフェリア)を統べる大隊長。来たれ白騎士(アルベド)、悪名高き狼(フローズヴィトニル)。
来たれ黒騎士(ニグレド)、鋼鉄(ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン)の腕。来たれ赤騎士(ルベド)、魔操砲兵(ザミエル・ツェンタウア)。偉大なる愛すべからざる光(メフィストフェレス)の元に仕えし三騎士よ、我が呼び掛けに答えよ……」
本来、模倣体を創るのにこのような詠唱じみたものは必要ない。だが、聖槍十三騎士団大隊長である彼等を創り出す時は別だ。彼等への尊敬の念を込めて、言葉を紡ぐ。かつて敵対し、嫌になるほど味わった強大さをそのままに創り出す。
……そうして現れるのは三人の黒円卓の軍服を纏う人物達。一人は銀の長髪を持ち、右目にトーテンコープが描かれた眼帯を着けた少年風の人物。
彼の名は【ヴォルフガング・シュライバー】。仲間内からも【暴嵐】、

【凶獣】と呼ばれる、黒円卓内で最も多くの人間を殺した人物。
一人は無精髭を生やした、全身が巌のような雰囲気を醸し出す男。彼の名は【ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン】。黒円卓内での通称は【マキナ】。寡黙で殆ど言葉を発さぬ、ヴェヴェルスブルグ城に囚われ、己の名を失った人物。
一人は真紅の髪を一つに結わえた、顔の左半分に大きな火傷のある葉巻を加えた女性。彼女の名は【エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ】。黄金に永遠の忠誠を誓い、自分にも他人にも厳格な、軍人を象徴したような人物。
彼等こそが、嘗て私達を苦しめた黒円卓、聖槍十三騎士団の大隊長。その気配は衰えを知らず、凄まじい威圧感を感じる。
「さて、三騎士諸君。創り出した時に今回やるべき事について埋め込んである為、詳しくは語らぬが一つだけ注意して欲しい点がある。……決して敵対対象を殺さない様に頼む」
「えー……僕らに殺すなって言うのは呼吸するなって言ってるのと同義だよ？」
そう文句を垂らすのはシュライバー。根っからの殺人狂である彼にとっては厳しい制約だろうが、模倣体である以上、本来の力を発揮し切ることは出来ない為、問題は無いが、モチベーションを上げる為に言葉を弄すとしよう。
「なら言い方を変えよう。死なない様にいたぶってやれ。……得意分野だろう？」
「ああ、確かにそれなら得意分野だ。それじゃ、僕は先に行ってるよッ!!」
そう言うなり、シュライバーは両手に愛用している【ルガーＰ０８】と【モーゼルＣ９６】を顕現させ、凶暴な笑みを浮かべながら、こちらに近付いて来ているザフィーラの方へと駆けて行った。
「……相変わらずの戦闘狂だな、シュライバーの奴は。では、我々も成すべきことを成しに行くとするか。マキナよ」
「……ああ」
残るエレオノーレ、マキナ両名もそれぞれの担当へと向かう。エレ

オノーレにはシグナム嬢、灰群蒼児組を、マキナにはなのは嬢とヴィータ嬢を担当して貰う予定である。この指示にエレオノーレは大して気にしている様子は無かったが、マキナは目的地へと向かう直前、こちらを睨みつけてきていた。……終焉こそが美しいものと考えている彼からすれば、この場にいる事自体が許し難いのだろうが、我慢してもらうとしよう。……まあ、結局の所、模倣体は私の別人格を紡ぎ出した様な存在のため、どれだけ自意識を持たせていようと、深層意識下で繋がっているので私に攻撃を加えてくる様な事は無いのだがね。

「……さて、私だけ傍観する訳にも行かんし、私も行動を起こすとしようか」

そう呟きつつ、懐から【ファントムガンナー】を取り出す。ロイミュードの死神と呼ばれていた存在が持っている【ブレイクガンナー】のデータを元にクリム・スタインベルトが開発し、私へと贈られた物ではあるが、暇を見つけてはラボに篭って手を加え続けた結果、凄まじい性能を発揮する代物になってしまった。

右手に持った緋色と黒を基調とした配色であるファントムガンナーを胸の前で、銃口型のスイッチが上を向くように掲げ、左手でスイッチを押し込み、それを離す。

《Ｃｈａｎｇｅ　Ｐｈａｎｔｏｍ》

左手をスイッチから離すのとほぼ同時に低く禍々しい電子音声が鳴り響き、紅い光とともに、私の身体を装甲が包んでいく。光が収まった時には、私の身体は全身機械じみた装甲に覆い尽くされていた。

頭部はイクサシステム・セーブモードと同じデザインの物、それより下はＧ３―Ｘと同じデザインとなっている。細かい変更点としては腰のベルト部分がマッハドライバー炎を模した【ファントムドライバー】に、左手首部分にシフトブレスを模した【ファントムブレス】を装備し、全体の配色が黒を基調とし、紅いラインが入っているデザインとなっている。

この形態の名は【機進ファントム】。バイラルコアだけでなく、シグ

ナルバイク、シフトカーにも対応した、私の技術の粋を集めた代物である。
その状態から、シフトカー・シフトスピードを取り出し、ファントムブレスに差し込み、ファントムブレスについている能力発動用のボタンを押し、加速能力を発動させる。
《Ｂｏｏｓｔ　ＳＰＥＥＤ!!!》
ファントムブレスから能力発動を知らせる電子音声が鳴り響く。
そうして加速した状態で向かうのは守護騎士達の中で一人だけ離れた場所にいる、シャマル嬢の元。
「……お前達にも譲れぬものが有るのは分かっている。だがな、この世界で暴れさせる訳にも行かんのだよ」
そのような言葉を残し、その場を離れる。

Ｎｏ　Ｓｉｄｅ

闇の書の守護騎士、【ヴォルケンリッター】が張ったリンカーコア、及びそれに準じた資質を持つ者のみが動くことの出来る結界。ヴォルケンリッターにとっては魔力を蒐集する為の檻。
高町なのはにとっては未知の敵。
灰群蒼児にとっては【闇の書事件】の本格始動を知らせる号砲。
その中で行われる魔導師同士の激しい戦闘に、災厄とも表現出来る者達、聖槍十三騎士団が彼女達を蹂躙していく。
「ディバイン……バスターッ!!!!」
「ぶち抜けッ!!」
「……くだらん」
高町なのはとヴィータの前に現れるのは、黒騎士、マキナ。
彼はパワー重視の魔法を使う彼女達の攻撃を受けても、全く揺らがず、高町なのはから放たれる桃色の閃光、ヴィータによる鉄球、そのすべてを両の拳で粉砕していく。
「何なんだよテメェは……!!?わざわざあたしらの前に出て来て、なにが目的だ!!」

自分の攻撃を悉く打ち砕きながらも、攻撃をしてくる様子の無いマキナに思わずといった様子で問い掛けるヴィータ。
高町なのはもヴィータと同じように、油断せずにマキナの方を見つめている。
それもそのはず、ヴィータとは違い彼女はマキナが纏う黒軍服の集団、聖槍十三騎士団と相対している。雷を操る女性と大剣を使いこなす青年、両方共自分とはかけ離れた実力の持ち主だった為、同じ軍服を纏っている目の前の男もそれと同等、若しくはそれ以上の力を持ち合わせていると判断し、攻撃を全て全力で放っていたが、結果はご覧の有様である。
「……目的、か。俺達を呼び出したあいつにはそれなりの理由があるようだが、俺にはそんなものは無い。俺は俺に課されたものを全うするのみだ」
「へっ!!なんだよ、まるで人形みてぇな奴だな!!」
「人形……か、言い得て妙だな。確かに、俺はラインハルトの奴隷に過ぎん。終焉(おわり)を奪われた俺にとって、この場にいる事自体が気に入らんのだ」
マキナは表情を一切変えず、鉄面皮のままヴィータへと返答を返す。人形と言われてもそれは揺るがない。
「じゃあ、何で私達の前に立ち塞がっているんですか!!貴方にはここで闘う理由が無いんでしょう!!!」
高町なのはマキナへと問い掛ける。つい数ヶ月前まで闘いとは無縁だった少女だからこそ出てくるその質問に、マキナは失笑する。
「フッ……愚問だな。そもそも軍人とはそういうものだ。自分の意志と相反していようが、上の命令には従わなければならない」
「そんな……」
「俺からすれば、お前達の方が理解出来ん。赤髪の方は戦場の何たるかを弁えているようだが、なにか迷いを抱えている様に見える。そちらの白いのに至っては戦場(いくさば)にいる事そのものが間違いだ。……まあ、相手を理解しようとするその気概こそは認めてやってもいいが

な」
「さっきから偉そうにしやがって……調子のんなぁあああ!!!!」
「あっ!!?ま、待ってよ!!!」
マキナの言葉を聞いて、堪忍袋の緒が切れたのか、ヴィータが叫びながら、マキナへと突っ込み、高町なのはもそれに追随する。
「……」
それを眺めながらも、マキナは表情を変えずに、その場に佇む。魔導師が魔人に敵う通りがない。だが、それでも彼女達は自分達の信じるもののために一歩も引かずに立ち向かって行く。しかし、魔人を相手にしてのその姿は蛮勇という言葉以外に表す言葉は無いだろう。そんな事をマキナは頭の片隅で考えつつ、自分に挑んでくる少女達を迎え撃つ。

Side　緋峰

……三騎士を使ったのはやはりやり過ぎだったな。シュピーネが不意を突かれたとはいえ、守護騎士に倒されているのだから念をいれたが、結果としては正しく蹂躙と言う言葉が相応しいだろう。なのは嬢とヴィータ嬢はマキナに対して、ろくな攻撃を加える事すら出来ず、灰群蒼児、シグナム嬢もエレオノーレの猛攻に逃げ惑うばかり。ザフィーラに至っては成すすべなく、シュライバーから放たれる弾丸の嵐に呑まれている。
「ああ、不用意に動かないで貰えるかね？あまり女性を傷付けたくないのでな」
「くっ……」
ところで、私が今何をしているかと言うと、ファントムガンナーをシャマル嬢の後頭部に突き付けた状態で三騎士の蹂躙劇を観賞している。
彼女は守護騎士の中でも、後方支援に特化した魔導師だったようで、簡単に間合いを詰める事が出来た。

大方魔力反応だけで索敵していた為に、魔力の隠蔽工作をしていた私の接近に気付かなかったのだろう。
因みに機進ファントムには変声機も仕込んであるので、声で私だとシャマル嬢にバレる事もない筈だ。
「……貴方は一体何者なんですか？この結界内では魔力が無いと動けない筈なのに……」
「私からは魔力が感じ取れないと言うのかね？」
「……ええ」
「成程……確かに君の疑問も最もだ、守護騎士。別に答えてやる義務は無いのだが、折角だから教えてやろう」
「……！！」
そうシャマル嬢に告げると、シャマル嬢の雰囲気がほんの少しではあるが、冷たいものとなった。
……大方こちらが説明している隙を突くつもりなのだろうが、気付いていない振りでもしておいてやるとしよう。
「さて、まず大前提として私には魔力――君達風に言えばリンカーコアだったか？が備わっている。それゆえにこの結界の中でも自由に動ける訳だ」
「……」
「そして、私から魔力を感じ取れない理由だが、それは私が纏っているこの鎧によるものだ。対魔導師用に開発したパワードスーツなのだが、まだ実戦テストが済んでいなくてね。丁度いい機会だから君達相手にテストを行う為にここまで出向いてやったのだよ」
まあ魔力を隠蔽しているのはまた別の方法なのだが、そこまで教えてやる必要も無いだろう。
「……魔力を感じ取れない理由は分かりました。それで結局、貴方は何者なんですか？向こうで暴れている人達の仲間である事は何となく分かりますけど」
「いやいや、彼等はただの協力者に過ぎないよ。彼等の上の人間とそれなりのコネがあるのでね。不確定要素の排除を頼んだところ、あの三人を送り込んでくれたという訳だ。私自身は、魔導師という存在を

知っているだけの科学者に過ぎんよ」
「……ッ!!」
私の『科学者』と言う言葉に露骨な反応を見せるシャマル嬢。
……そう言えば、初対面の時に科学者と名乗ったな。魔法、及び守護騎士について知っている科学者となれば、疑わない方が可笑しいな。
「……？」
シャマル嬢が考え込んでいる姿を眺めていると、結界の外側からそれなりに大きな魔力反応が三つ近付いてくるのを感じ取った。この魔力は……紫耀にローザ・シャルラハロート、それにテスタロッサ嬢か。……あの3人まで出てくるとなると、これ以上は収拾がつかなくなって来るな。
「……さて、君のような美人との会話を切り上げるのは非常に勿体無いのだが、我々はここで失礼するとしよう。君達も今回はこの辺りで切り上げる事を勧めよう」
「なっ……!?き、急に何を……!!?」
「いや何、結界の外側から管理局の連中が近付いて来ているのでね。今彼等に目を付けられるのは御免被るのだよ。では、またいつか会える事を祈っているよ」
シャマル嬢に声をかけながら、ファントムブレスにシフトカー・ディメンジョンキャブをを差し込み、能力を発動させる。
《Ｂｏｏｓｔ　ＤＩＭＥＮＳＩＯＮ!!!》
電子音声と共に、三騎士と私の足元に円状のワープホールが現れ、私達を包み込む。
「ま、待ちなさい!!」
「Ａｕｆ（さ）　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈ（よ），ｎ（う）守護騎士殿（な）。君達の主に宜しく伝（ら）えて置いてくれたまえ」
私がその場を去る直前に巨大な光の柱が空から振り下ろされていた。あれは確かローザ・シャルラハロートの技だった筈だ。彼等が介入するのならば、守護騎士の直接的な対処は彼等に任せて、私は闇の

書を元に戻す準備を進めるとするかね。

第23話

守護騎士達と一戦交えた翌日、私は八神家へと向かっていた。
普通に考えれば、シャマル嬢にあれだけ私の存在を匂わせておきながら向かうのもどうかとは思ったのだが、前々からはやて嬢と約束していた為に向かわざるを得なかった。
そうしてサイドバッシャーを走らせる事十数分、はやて嬢の家へとやって来た私は、インターホンを押し応答を待つ。
『はいはーい、どなたですか～』
「おや、今日はヴィータ嬢かね？珍しいこともあるものだな。緋峰だ、先日の約束通りはやて嬢を迎えに来たのだが」
『……ちょっと待ってろ。はやて呼んで来るから』
そう言ってヴィータ嬢はインターホンを切る。
あからさまに私に対して警戒していたな。まあ昨日の内に守護騎士間で情報交換をしているだろうし、私を警戒するのも当然か。
なにせ自分達が拠点としている魔法文化がない世界で魔法文化についての知識を持った科学者を名乗る人物が短期間に二人も現れていて、しかも片方は顔を隠していたときたものだ。関連性を疑わない方がおかしいというものだろう。
そうして玄関先で待つこと数分、シャマル嬢に車椅子を押して貰いながらはやて嬢が出てくる。
「おはようございます、蓮夜さん」
「おはよう、はやて嬢。シャマル嬢も元気そうで何よりだ」
「……ええ、おはようございます。緋峰さん」
はやて嬢に挨拶を返しつつ、その後ろにいるシャマル嬢に目を向ける。いつもと変わらない人当たりの良さそうな笑みを浮かべてはいるが、その視線はこちらを見極めようとしているのが感じ取れる。
「なぁなぁ蓮夜さん。今日はシャマルも一緒に行きたい言うてんねんけど大丈夫？」
「ふむ……」
シャマル嬢がそんなことを言い出したのは、どう考えても昨日の件

を踏まえてだろう。自分達の正体と、大切な物の詳細を知っていると思わしき人物達と繋がりがあるかも知れないのだ。あまり自分達の主を得体の知れない人物と二人きりにしたくないのだろう。
「別に構わんが、サイドカーにははやて嬢を乗せなければならんから、シャマル嬢は私と二人乗り（タンデム）になるがそれでも構わんかね？」
「……ふぇ!?!!」
　シャマル嬢驚愕。どうも私を警戒することに意識を割きすぎて、私の主な移動手段がバイクであったのをすっかり忘れていたようだ。
「ふぅーん？シャマル、もしかして蓮夜さんのこと好きなん～？」
「は、はやてちゃん!?!!え、ええと、その、あのですね？別に私はそういった意図があるわけではなくてその単純にはやてちゃんが心配なだけで他意は無いですからね!?!!??」
「……分かっているから少し落ち着きたまえ。気付いているかどうかは知らんが、顔が真っ赤になっているぞ？ほら深呼吸でもするといい。はやて嬢もあまりシャマル嬢をからかってやるな」
「ふひひ、まあええやん。コミュニケーションの一環やって」
「まったく……出会った当初と違って、とんだお転婆になったものだ」
　元々こういう性格なのだろうが、今までの抑圧された環境下では出ることは無かっただろう。
「……それで？決心はついたのかね、シャマル嬢？」
「ええ、やっぱり私も一緒に行きます」
「二人乗りだが？」
「問題無いです。……ええそうです別に私は蓮夜さんに対して特別な感情がある訳じゃ無いんだしバイクの二人乗り位気になんてしてませんし――」
「「……」」
　そう呟くシャマルの目は、焦点が合っておらず、濁っていた。
　どう見ても未だに迷っているようにしか見えんのだが……一応は決心したようだし、とっとと行くとするか。
「……では、出発するとしようかはやて嬢」

「……せやね。シャマルの為にも、はよ行くとしよか」
はやて嬢をサイドカー部分に乗せた後、何処か虚ろな表情を浮かべるシャマル嬢を強引にバイクの後ろに乗せバイクを図書館へと走らせる。

数十分後、図書館に到着した私はシャマル嬢を椅子に座らせ、その向かいでパソコンで昨日の小競り合いで得られたファントムの起動データの整理をしていた。
はやて嬢は偶然図書館に来ていたすずか嬢と共に、私達から少し離れた所で会話に花を咲かせている。
シャマル嬢は未だに虚ろな表情のままである。
……どうも異性に対しての免疫が弱過ぎるのでは無いか？大方殺し合いばかりで碌に異性と接していなかったのが原因だろうが。
「ハッ!!?わ、私は今まで何を……!!?」
「おや、ようやくお目覚めかね？シャマル嬢。混乱するのも分からなくはないが、図書館では静かにしたまえ」
「え……？あっ……!!?す、すいません……」
ようやく目が覚めたシャマル嬢に話し掛けると、慌てふためきかけたので、現状を把握させる。
シャマル嬢も周りからの責めるような視線を感じたのか、身体を縮こまらせる。
「さて、状況把握は済んだかね？シャマル嬢」
「え、ええ。何とか」
「それは重畳。で？私に話したい事が有るのでは無いかね？」
パソコンから視線を離さずにシャマル嬢へと問い掛ける。
「……」
「話しづらいかね？ならばこちらから話題を振ってやろうではないか……闇の書の蒐集において、何かしら問題があったのでは無いかね？そう、例えば……魔導師とも思えないような連中に蒐集を邪魔さ

れた、とか？」
「……ッ！やっぱり、知ってたんですね？私達がはやてちゃんに黙って蒐集をしていたのを」
「無論だ。守護騎士全員にナノサイズの発信機を付着させてある。それによって君達の動向は総て把握させてもらっていた」
　私の例え話に露骨な反応を示すシャマル嬢。一応魔導関連にも精通しているという経歴（詐称）を話していた以上、そこまで動揺するような事でも無いと思うのだが……まあどうでもいいか。
「……つまり、私達の行動はすべて貴方には筒抜けだったと？」
「そういう事になるな。まぁそんなものはこの場においては些事に過ぎないだろう？本題に入ろうではないか」
「……そうですね。私達の動向を把握していたのなら、昨日の夜についての説明は必要ないですよね？」
「ああ、君達が黒軍服の連中と管理局と小競り合いを繰り広げたのだろう？」
「それともう1人、全身を機械鎧に身を包んだ自称科学者がいました。その人物曰く、魔法を研究している科学者と名乗っていました……緋峰さん、貴方と同じように」
「ほう……それで？」
「……おかしいとは思いませんか？ここには魔法文化が全く存在しない。せいぜい委託魔導師が数人程度存在するくらいです。そんな世界で、魔法を研究している科学者を名乗る人物が2人もいるなんて」
「別段不思議な事でも無いだろう。第三者に知られたくない研究をどう隠すかなぞ限られている。徹底的な情報封鎖、例え見られたとしても周りが理解出来ない場所で研究をする。……もしくは何も無い場所で活動するか、この程度しかないのだ。偶然同じ世界に辿り着く可能性が無いわけでもないだろうに」
「……それが天文学的な数字の可能性だって理解していて、言ってるんですよね？」
「愚問だな」

「そう、ですか……」
　その言葉を最後にシャマル嬢は黙り込む。もっともその瞳は雄弁にこちらへ語り掛けて来ているのだが。
　……信じたい、信じてはいけない、彼は味方のはずだ、いや、彼も結局は闇の書を狙っている者のうちの1人に過ぎない……等等、いい感じに疑心暗鬼に陥っている。まったくもって素晴らしく、そして……愚かしい。大方、例え敵対する可能性があるとしても、不意さえ突かれなければ自分一人でどうにか出来るとでも思っているのだろうが、考えが甘過ぎやしないだろうか？
「……やれやれ。所詮は家族ごっこに興じる人形風情でしかないか。少しは君達に期待していたのだが……期待するだけ無駄だったようだな」
「家族……ごっこ？緋峰さん。急に、何を……」
　シャマル嬢の驚きを無視して言葉を続ける。……この先を口にすれば、これから先、はやて嬢に構ってやることは難しくなるだろうが、問題は無い。何せ彼女の側にはもう、本物の家族がいるのだ。人を外れた存在である私が側にいるよりは彼女の為になるだろう。
「違うのかね？君達守護騎士は主の願いに応じて呼び出される存在なのだろう？君達が呼び出された時、はやて嬢はきっとこう思っていたはずだ……『自分にももう一度、家族が欲しい』とな。何せはやて嬢が久しぶりに他人とのコミュニケーションを取ったのだ。そう願っても何ら不思議はあるまい。どれだけ気丈に振る舞っていようともまだ9歳の少女なのだから」
「それ、は……」
「そして君達はその願いに応え、姿を顕した。守護騎士として、主の願いを叶える為に……ああ、別にその事を悪く言うつもりは無い。君達の御陰ではやて嬢は年頃の少女のようによく笑うようになったのだからな。そこのところは感謝しているよ。ただ……」
　そこで一度言葉を区切り、シャマル嬢の心に絡みつくように呪詛（言葉）を投げ掛ける。
「自分達の本来の在り方すら忘れ去っている者（物）達が、どうやって主を

幸せにするというのかね？」
「……なんですって？」
「おや、自覚が無いのか？自分達の記憶が闇の書にとって都合の良いように書き換えられているというのに？……それとも、はやて嬢に自分達の手が血に塗れているのを知られたくないが故に忘れた振りをしているのかね？」
「何を勝手な事を……!?!」
シャマル嬢の目に憤怒の色が現れる。……得体も知れない奴に自分達の記憶が贋物と言われれば憤るのも無理は無いだろうがな。
「ならば答えてみろ。闇の書の蒐集によって手に入る、強大な力とやらの詳細をな」
「そ、それは……」
「答えられないのだろう？それこそが、お前達が弄ばれているという真実を示す事実に他ならんのでは無いかね？」
「……」
「沈黙は肯定と取らせてもらうぞ。まぁお前達が人形だろうが、人間だろうが私にとっては至極どうでもいい話だ。はやて嬢を見守っているのもただの気まぐれに過ぎんのでな」

そう言い放ち、シャマル嬢との会話を終わらせる。
これから先、この世界（地球）で蒐集活動を継続するかは彼女達の判断次第になる。
……まぁこちらに向かってくるというのならば、盛大に持て成すだけだがな。

第24話

シャマル嬢に闇の書の異常を匂わせてから数日たつが、私はずっとラボに篭もりっきりになっていた。

とはいえ、闇の書組や、管理局組、転生者組にはＢＢ達を監視につけている為、近況は常に把握出来ている。はやて嬢は症状が悪化した為、入院。見舞いに行こうかとも思いはしたのだが、守護騎士達にあの様な啖呵を吐いた為に、私への警戒を怠っているはずが無い。それに加えて、接触すれば余計に拗れそうな為、やめておいた。

管理局組は、三騎士に抵抗出来なかったのが堪えているのか、戦力の強化に勤しんでいるようだ。

なのは嬢はエレオノーレの戦闘方法に光明を見出したのか、魔法陣による砲口を幾つも生成し、そこから絨毯爆撃の如く魔砲を放つ訓練を行っているし、フェイト嬢はベアトリスを遥かに上回る速度を持ったシュライバーと相対した故かは定かでは無いが、より速さに対する渇望を高め、それを追求していっている。

彼女達のデバイスもまた、自分達の主の願いに応えるために【カードリッジシステム】と呼ばれる瞬間魔力増幅機構の搭載を決意していた。このシステムは本来はベルカ式……つまりは守護騎士達が主に使っていた機構の為、何処かしら異常が起こる可能性があったらしいが、転生者組のデバイスデータを流用して、安全性を確保した上での性能向上を果たしたようだ。

クロノ・ハラウオンもまた、修練を重ねている。今まで使用していた黒い杖ではなく、青と銀を基調とした色合いのデバイスへと持ち替え、その習熟に勤しんでいるようだ。

転生者組もまた、管理局と同様に訓練に勤しんでいる。主になのは嬢、フェイト嬢、クロノ・ハラウオンとの模擬戦が主な様だが、それだけでは飽き足らず、私にまで模擬戦を申し込んで来るのだから困りものだ。面倒だったから、ムーンセルから拝借してきたサーヴァントデータをインストールした義体を送り付けてやった途端、ブッツリと連絡が途絶えてしまった。……流石に、【無銘】とスカサハはやり過

ぎだっただろうか……？まぁ純粋な戦闘データと基本武装しか積んでいないから、死にはしないだろうが。
さて、上で述べたように、今私は他者との接触を完全に遮断して、ある物の作成に勤しんでいる。
まぁ大体予想がつくとは思うが、私が作成しているのは【夜天の書】と同型のストレージデバイスだ。
もっとも、中身はまっさらな物の為、さほど手間取ってはいないのだが並行して、ミッド式、ベルカ式の魔法についての分析を行っている為どうしても時間が掛かってしまっている。
「……とはいえ、このデバイスも飽くまで管制人格を一時的に避難させる為に作っているだけだから、あまり本腰を入れなくてもいいのだがなぁ……」
等と独り言を呟きつつも、本物と同レベルに仕上げようとしている辺り、私は職人気質なのかもしれん。
とはいえ、外との時間に差異があるこの空間では、本物同然に造ったとはいえ、外の時間で1日もあれば十分すぎる。後の時間はファントムガンナー及び、機進ファントムのアップデートに費やしている。
先日シャマル嬢と対峙した時は、クリムから渡された物にシフトカー関連の技術しか導入していなかったが、今回の改修で今まで蓄積してきた技術を総て組み込んでいる。
主な改良点としては、ガイアメモリ発動用のマキシマムスロットの増設、ミラーワールドへの適応、フォトンブラッド関連機構の搭載、ミッド・ベルカ複合式の魔法式のインストール等を盛り込んでおいた。
……1通り作業を終えてから改めて見直して見ると、少々やり過ぎた感が否めないがまぁ良いだろう。
この世界の魔法技術を加えた事でより万能性が高まった上、なのは嬢達と相対する時に余計な怪我をさせる心配が無くなったのだ。これで思う存分、力を振るうことが出来る。
「……闇の書、もとい夜天の書の魔力蒐集は残り2割程度。管理局も大まかにではあるが、闇の書の正体について調べを付けてきてい

る。そろそろ、結末が近付いているのだろうな……」
改めて各々の戦力を分析してみる。
先ずは管理局。前線戦力としては、高町なのは、フェイト・テスタロッサ、クロノ・ハラウオンの三人に指揮官としてリンディ・ハラウオン。後はアルフとユーノ・スクライア位だろう。懸念材料があるとすれば、管理局が真っ黒な組織である事と、主戦力が年端もいかない子供である事だろう。
次に闇の書……もとい夜天の書の守護騎士、ヴォルケンリッター。シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル。この４人にははやて嬢を必ず救ってみせるという意志がある。ましてや、徐々に症状が重くなってきている以上、生半可な言葉では止まらないだろう。……とはいえ、彼女達は『闇の書の闇』についての記憶が無い。それが、裏目に出ないことを祈るしかあるまい。
続いて転生者組。
黒岸紫耀、ローザ・シャルラハロート、灰群蒼児の３人。現状において、もっとも闇の書事件について把握していると言っても良いだろう。これからどういった事態になっていくかも大まかではあるが把握しているらしいしな。……だがそれによって行動の選択肢を狭めているとも言える。それが悪い方向に影響しなければいいのだがな。
最後に私自身。
管理局、守護騎士、転生者組それぞれとある程度の関わりがある上、それぞれの事情についても把握している。戦力としては、ＢＢ、メルトリリス、パッションリップ、ヴァイオレット、カズラドロップ、キングプロテアのアルターエゴ達と、ムーンセル・オートマトンと同等の性能を発揮する演算装置と、カルデアとかいう組織から拝借した英霊召喚術式によって呼び出される英霊（サーヴァント）、そして私が行使する模倣体……等々、世界を片手間で相手に出来る程の戦力を保有している。
……改めて確認してみると酷いな、これは。
「……まあ英霊達は余程の事が無ければ召喚する必要は無い。模倣体もこれ以上は余計な介入にしかならん……実質的な戦力は私自身とアルターエゴ達だけになるか」

それでも充分戦力過多になっているがな。そうなると、現実世界でも活動できるように後発組のアルターエゴの義体の調整に取り掛かるとしようか。
クリスマスまであとひと月程度。それまでにはケリをつけたいところだが……そういう訳にもいかんのだろうな。

Ｏｕｔ　Ｓｉｄｅ
ここは時空管理局所属艦『アースラ』内の訓練場。そこでは、管理局の協力者が集い、模擬戦を繰り広げていた。
「ディバインバスター・ファランクスシフト!!てぇーッ!!」
高町なのはによって作られた１４の砲口から放たれる超極太のディバインバスター。それだけならまだしも、その砲口とはまた別に１８個の魔法陣が展開しており、そこからアクセルシューターがさながら光のシャワーの様に放たれる。
その先にいるのはフェイト・テスタロッサ、ローザ・シャルラハロート、灰群蒼児の３人。
「いくよ、バルデッシュ!!」
《Ｙｅｓ　Ｓｉｒ．　ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　ｍｏｖｅ》
「薙ぎ払いますわよ、ワルキューレ!!」
《了解です、お嬢様!》
「……御神流の体捌きと、アイツから教わった双剣術。試すには持ってこい……!!」
フェイトは魔法を発動し、大小入り乱れる魔法の雨の中を超高速で駆け抜け、ローザは刃先に己の魔力を収束させた５ｍ近くにまで巨大化した魔力刃を振るい、魔砲を切り裂き、蒼児が御神流の体術を駆使し、右手の剣を順手、左手の剣を逆手に持ち、魔力弾を切り裂いて消滅させていく。
そこから離れた所では、黒峰紫耀とクロノ・ハラウオンが相対している。紫耀は村正を納刀した状態で身体を半身にして構え、クロノはグレアム提督の使い魔でもあり、嘗ての父の使い魔でもあったリーゼ

姉妹から託されたインテリジェンスデバイス、『デュランダル』を構え、魔法を展開する。
「くらえ……っ!!ブレイズキャノン!!」
ジュエルシード事件の時とは比べものにならないほどの速さで魔法が発動する。それもその筈、つい先日までクロノが使っていたデバイス『S2U』は幾度と無く改良が加えられてはいたが、それでも数世代前の型落ち品。それに比べて現在クロノが使用しているデュランダルは元々ギル・グレアムが闇の書の完全封印を目指して、管理局の最新技術を導入したものである。そのスペック差は歴然と言っていい。
……だが、それでもなお、紫耀にとっては脅威になり得なかった。
「その程度の砲撃で、俺を倒せると思ってんのかよ!!?七曜流・守型……流水烈花ァ!!」
居合いの構えから放たれる幾重もの剣閃。それがクロノの放つ砲撃と衝突し、切り裂き、彼岸花の様な軌跡を残して、砲撃を消滅させた。
「くっ……っ!流石と言うべきか。だが、この程度と思われるのは心外だな!!」
「上等ォ!!かかってこいよ!!クロノの坊主!!」
そうした見ようによっては阿鼻叫喚の地獄にも見えかねない訓練をモニターから眺めるリンディ・ハラウオン、エイミィ・リミエッタの2人。
「……なのはちゃんもフェイトちゃんも、凄まじい進歩ねぇ……」
「フェイトちゃんはまだしも、なのはちゃんなんかあれ、戦艦の爆撃並ですよ?」
「……よっぽどあの聖槍十三騎士団という組織に対して思うことがあったのかしらね」
「何、心が折れて戦えなくなるよりはああやって無茶苦茶ではあるが訓練に励んでくれていた方が君達にとっては有難いのではないかね?」
そう言いながらリンディ達に近づく影。その声に反応した2人が

振り向くとそこには、赤い外套を身にまとい、ボディーアーマーを身に付けた、どう見ても管理局の人間には見えない、浅黒い肌と白髪の青年であった。
「えーっと、アーチャーさん？でしたっけ。どうしたんですか？こんな所まで来て」
「どうしたも何も、食事の用意が出来たから呼びに来たのだよ。まったく、本来私は彼等の訓練相手だった筈なのに何故料理人の真似事をしているのだ……」
そう呟くアーチャーと呼ばれた青年。しかし何処か満更でも無さそうな声色である。
「それはありがとうございます……ですが、見ての通り今白熱し始めて来たところですから、暫くは放っておくしかできないと思いますよ？」
「どうやらそのようだ。……しかし、年端もいかない子供を戦場に立たせることを黙認しているとは、伝え聞いていた通りの組織の様だな。管理局というのは」
そう言葉を零すアーチャー。その顔は険しく、どう見ても現状に不満を持っているのがありありと浮き出ていた。
「……返す言葉もありません。しかし、現状を解決するにはどうしても彼女達の力を借りるしか……」
「そんなものは自分達が正しいと思い込む為の詭弁に過ぎん。私の知り合いには、どれだけ力が及ばなくても、どれだけの苦難が待ち受けていようとも、『自分には才能が、力が無いから』などという弱音を一言も吐かずに戦い続けた者がいた。傍から見れば、まさしく一般人にしか見えないような奴だったよ」
そう言いつつ、アーチャーは過去に思いを馳せるように苦笑する。『今』の彼には実際に『彼／彼女』と戦った記憶は無い。『彼／彼女』と共に戦った『自分』は既に消滅してしまった。しかし、『記録』としては残っている。
「……少し話が逸れたな。ともかく、そんな奴でさえ誰かを救うことが出来るというのに、貴様らは子供に頼り切りとは……随分と情けな

いことだ」
「な、何もそんな言い方しなくても!!リンディさんにだって、立場が……」
「立場を気にするなら人助けなぞ考えるな。どうしても助けたい命があるのなら自分の全てをかけろ。そうでないならば、それはただの自己満足に過ぎん」
「あ……う……」
　途中で口を挟んだエイミィだったが、アーチャーの容赦ない言葉に縮こまってしまう。リンディも先程からずっと、苦い表情を浮かべている。
「その点では、彼女達は無意識ながらもそれを理解していると見える。もっとも幼さからくる無鉄砲な正義感での行動とも取れるが、貴様等管理局の大人に比べれば、純粋な分彼女達の方がまだマシだろう」
　そう考えると、クロノは素直に称賛に値するとアーチャーは考える。管理局の闇を未だ知らないのだろうが、それでも出来ることをしようと努力しているのが見て取れる。若干堅物気味だが、それも経験を積むことで何とかなるだろう。
「「……」」
「おっと、すまない。つい出過ぎた真似をしてしまったな。まぁ私の言葉は心の片隅にでも置いておいてくれたまえ」
　すっかり黙ってしまった2人に言葉を残し、アーチャーはその場を去っていく。彼はあくまで、蓮夜によって召喚されたサーヴァントであり、管理局の協力者では無い。苦言を呈す事はあっても、彼女達を慰める必要は無いのである。
　闇の書の発動を止めることが出来るのかどうかは年端もいかない子供達と、現地の青年達に掛かっている。
　そう考えると、管理局という組織の先は長くなさそうだ。
　そのような考えを巡らせながら、アーチャーは歩みを進めた。